
死神亜種

羽月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神亜種

【Nコード】

N2184R

【作者名】

羽月

【あらすじ】

下校中、黒猫と出会った私。目の前にもふもふが……！これは是非にもふもふを堪能したい。ただそれだけだったのに……。トラツクに撥ねられかけた黒猫を助け、私は多分死んだのだろう。あれから早5年、私は今、死神育成学校——通称『死学^{しにがく}』の2年生である。マイペース過ぎる主人公が繰り広げるコメディー小説です。今の所シリアスの欠片もありません。

000 プロローグ（前書き）

初投稿です。どうぞ宜しくお願い致します。

000 プロローグ

現日本において、黒猫といえば不吉を呼ぶものという印象がある。しかし、実は江戸時代あたりでは魔除けや厄除けなど、幸せを呼ぶものとして親しまれていたようだ。外国でも幸せの象徴となっている地域もある。

私の見た黒猫は前者か後者か………どちらだったのかは分からない。

夏の夕日を浴びながらの下校中、私の目の前に黒猫が現れた。9月中頃の夕方はまだ暑い。午後の体育でバスケットという夏には地獄の種目を行い、上着が絞れる程の大量な汗をかいたというのに、また次から次へと汗が滲み出てくる。不快感が最高潮だ。帰りにコンビニへ寄ってアイスでも、と思っていたのだがそんな思考は瞬時に何処かへと吹き飛んだ。

キラキラと宝石を嵌め込んだかのような透き通った綺麗な蒼い瞳、触り心地が良さそうな艶々の黒い毛、スラリと伸びた足――目の前の黒猫はかなりの美人さんだ。

……………アリエル。……………うん、じっくりくる。アリエルって雰囲気を感じ出している様な感じの黒猫さん。どんなだよと突っ込まれそうだが私には他にピッタリな言葉が見つからない。アリエルはアリエルだ。私の中でこの目の前に佇んでいる綺麗な黒猫をアリエルと命名する事に決定した。

私は動物が好きだ。見かけたらもふもふしたい、出来る事なら全力で。しかも今回は滅多に見かけない程の上玉。是非とももふもふ

……せめて一撫だけでも触りたい。

私はアリエルの隙を伺っていた。道端で手をわきわきしながら姿勢を低くし、いつでも飛び付く事が出来るよう体制を取った私と、私を引いた様子で見ながら体勢を低くし、物凄く警戒心丸出しな様子でじりじりと後ずさる黒猫^{アリエル}。怪しい事この上ないがそれが何だというのだ。もふもふ天国を味わえるのなら人目など気にしない。今通りがかったオバサンが異様なものを見る目でこちらを凝視していたが知らない。私、今それ所じゃない。

かれこれ5分ほどの静かな攻防戦を繰り広げているのだが、どうしたのか。相手に全く隙が出来ない。……アリエル、やりおるな。

しかしそろそろこの体勢もキツくなってきた。何せ5分と言えどぶつ通しで中腰状態を維持しているのだ。……もうこれは軽く筋トレである。部活をしていない上に体育の授業も適当に動いている為、ここ2年ほど運動という運動をしていない。そんな身体が鈍りに鈍り切った女子高生には物凄く辛い。

足が限界だと思ったその時、アリエルが動いた。——しまつた、見事に隙をつかれてしまった。

一步出遅れて後を追うが追いつけるだろうか？ああ、私のもふもふ……っ！

もふもふ求めて全速力で突っ走る私。全てはもふもふの為、錆び付いた身体を叱咤し稼働させる。

もふもふしたい、もふもふしたい、もふもふしたい……っ！

頭をもふもふ天国が占拠した。私は目の前のもふもふ求めてまっしぐら。

人間って凄い。ってか私って凄い。私、やれば出来る子だった。3メートル、2メートル、1メートルとどんどんアリエルとの距離を詰めていく。ふぬう……、あともう少し……っ！

アリエルが私との距離を測る為かチラリと振り返り、その綺麗な眼を見開いて仰天する。……それはそうだろう。普通の人間の所業ではない。

その光景を見た彼女は軽くパニックになったのか、今まで直進していたコースを急に直角に曲がって道路に飛び出してしまった。

彼女を目で追えば、そこへスピードを出したトラックが突っ込んで行くのが見える。

ブレーキは――間に合いそうにない。

「危……ッ!!」

間に合え、とこれでもかというくらい足に力を入れて踏み切り、私もアリエルに続いて跳んだ。

足元を流れる白いガードレール、トラックのけたたましいブレーキ音、誰かの悲鳴。

自分以外の全ての時間がスローモーションのように過ぎていく。今なら過ぎ行く足元に転がっている石を数える事だって出来るだろう。

――だが私の意識は全て目の前の黒猫へと注がれた。

もふもふは正義！アリエルは正義！私が護らなければ……ッ！！

懸命に伸ばした両手でガッチリとアリエルをキャッチし、自身が空中に浮いたそのままの状態最後の力を振り絞り、ぽーんと彼女を放り投げた。

助け方が少し乱暴になってしまったが、猫だから着地はお手の物だろう。

予想通りアリエルが向こう側へ華麗に着地したのを見届け、私の

視界は暗転した。

000 プロローグ（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

001 歴史のテストは赤丸一つ（前書き）

どうぞ宜しくお願い致します。

001 歴史のテストは赤丸一つ

「では明日はペアを発表します。今日はここまで」

授業終了のチャイムと共に教師が終講の号令をかける。号令をかけたのは先程までのHRを仕切っていた担任のイズミ先生という女教師だ。少しウェーブのかかった長い翡翠色の髪を一つに括ったその物静かな美人さんは正にクールビューティーという二つ名を付けたくなってしまう。やはりというか、多大な男子生徒の人気を誇っている彼女。しかし、怒ると物凄く怖いので誰も表立ってアタックを仕掛けようとはしない。影でファンクラブなるものが出来ているらしいと聞いた事があるが、イズミ先生にもしもバレたら……いや、私無関係だし、考えるのも怖いので止めておこう。

「ヒイラギ、後で職員室に来なさい」
「了解です」

教室を出ようとした際、イズミ先生が立ち止まって私に告げる。お呼び出しを喰らったのはこれが初めてではない……寧ろ常習犯だ。私は慣れた様子で返事をした。

今回のお説教の原因は先ほど返却されたこの歴史のテストの答案用紙。右上に書かれた大きな赤丸……つまり0点を取った事だろう。私は落ち込む事もなくその紙切れをボーッと眺めた。

「またやったの？ヒイラギ」
「サカキ」

後ろから答案用紙を覗き込み、呆れた様子で話しかけてきたのはサカキだ。彼女とはそこそ仲良くさせてもらっている。腰まで流れる綺麗な紺色のストレートを揺らしながら席に座っている私の前へ回って来た。私はそれを見届けた後、へらりと笑っていつもの言葉の口にする。

「うん、やっちゃった」

「やっちゃった、じゃないわよ」

眉間に深い皺を寄せながら腰に手をあてて見下ろしてくる美人な彼女。……うん、凄い迫力だ。

彼女は今だへらへらと笑いを浮かべている私から答案用紙を奪って一瞥し、更に深く眉間に皺を寄せた。……どこまで深く皺を寄せることが出来るのだろうか？ ちよつと気になったが、それを言うとは絶対殴られるのでお口チャックで黙っておく。態々痛い思いなんてしたくはない。

「笑ってる場合じゃないわよ。0点で……しかもコレ何？」

「ん？……ああ、暇だったんだよ」

彼女が指をさした先には簡素な家が描かれていた。他にもそれよりはもう少し大きな家や星、ロケットなどが解答用紙の至る所に描かれている。所謂、一筆書きというやつである。

それが何でもないかの様な態度の私へ、彼女はジロリと睨むような視線をくれた。一見キツく見えるこの視線にも慣れたものだ……まあ慣れてしまう程までにこの視線をもらう様な事を今まで私がしてきたのだが。

サカキ、すまん、と心中で謝りながら私は平然とそれを受け止める。しかし何度それをくれた所で私は自身を改めるつもりはない。さっさと諦めると良いと思う。

「テスト中に暇つてのもアレだけど、落書きって……解答欄は真っ白じゃない」

「まあ毎回の事だよね」

あははと笑う私にもう怒る気も失せたのか、サカキは深い溜め息を吐き出して解答用紙を返してきた。私はそれを受け取り、鞆の中にがそこそと仕舞う。

「ヒイラギ、このままじゃ留年するわよ？」

顔を上げると心配そうにしているサカキが視界に入った。彼女は何だかんだ言いつつもこうやっていつも心配をしてくれるのだ。心配なら心配と最初から言えば良いのに必ず怒る所から始まる不器用なサカキさんである。

今日も今日とて心配そうに忠告してくる彼女の様子に自然と笑みが零れた。

「大丈夫だつて。心配してくれてありがとう」

「大丈夫なわけないでしょ。どっからその自信が来るのよ。赤、しかも0点取ってるのよ？こんな解答欄が白紙状態で追試大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫。今までコレで2年まで上がれてるし」

「いや、確かにそうなんだけど……」

「じゃ、そろそろイズミ先生が待ちくたびれてるだろうから怒られる前に行くね」

「あ、ちよつと！」

まだ言い足りないといった様子のサカキを残し、教室を後にする。彼女は凄く心配性というか何というか……。毎回心配してくれるの

は有難いが、いつもそれは杞憂に終わっている。いい加減信じて欲しいものだと思うが、多分何を言っても無駄であろう。

私は早々に諦め、今日の晩御飯は何かなと考えながらのんびりと階段を下りていった。

教室を出て約2分。私は職員室前まで辿り着いた。

同じ事情で此処へ来るのは何度目だろうか。面倒臭いなと溜息を吐き出しながら2回ノックし、ガラガラと少し重たい扉を開ける。

「失礼します。2年C組のヒイラギです」

「……座りなさい」

イズミ先生に促され彼女の机の傍にセティングされた、もう私ヒイラギ用と言っても過言でない椅子によいしょと腰掛ける。尻に馴染んだそれがギリりと音を立てた。馴染む程までに何度も座るとかどうなんでしょうと一瞬考えたが、まあ愛着も湧いたし良いとしよう。……いや、良くはないか。面倒臭いので出来れば何度も通いたくはない。イズミ先生は私が大人しく座った様子を確認すると、手元で作業していた書類を机の端にバサリと置いてこちらへと向き直った。予想通り、彼女の眉間には皺が寄っている。

「何故呼び出されたかは……もう言うまでもないわね？」

「はい。コレですよね？」

私はそう答えて鞆の中から例の紙切れを取り出し、イズミ先生に提示した。

先程無造作に鞆へ突っ込んだせいか、所々ぐしゃりと皺になっている。まあ破れてはいないので見る分には問題ないだろう。

イズミ先生はそれを一瞥し、皺について特に何かを言う事はしなかったが少し眉間の皺が深くなった。……ちよつと気になつたらしい。すみません。

私があははーと笑つて誤魔化していると、彼女は視線を紙切れから私に移し、もう幾度と聞いた台詞を吐き出した。

「……そう、それ。文字は名前の部分しか書かれていないわ。何故何も書かないの？記号選択の問題もあつたでしょ？」

「分からなかつたからです。覚えてませんから」

同じくしてこちらでも幾度と吐いた台詞をしれつと言う私に片手で顔を覆いながら深い溜め息を吐くイズミ先生。哀愁が漂つていてなにやら大人の雰囲気……って、見惚れてる場合ではない。いかんいかん。

「貴方に何を言つても無駄なのかしら？」

「そうですね」

説教聞きながらも早く帰してくれないかな、とか思つてるし。

淡々と続けるこの遣り取りは最早職員室での恒例行事と化している。無駄なのか、と尋ねつつも無駄な事であるとイズミ先生も分かっている様だ。彼女はまた深い溜め息を吐き出した。

「この死学^{しにがく}始まつて以来だわ、貴方みたいな人は」

「はあ」

またもや私の適当な返事にイズミ先生は呆れきつた様子で「もういいわ」と仰つた。これが説教終了の合図だ。

私はそのお言葉に甘えてちゃつちやと帰らせて頂く。失礼しましたと形ばかりの礼を取り、私は第二の我が家へと足を運んだ。

——そう、私が今いる此処は日本ではない。そして地球ではない異世界なのである。

アリエル
黒猫を助けて事故にあったあの日から早5年。私はこの異世界『イグラント』で死神育成学校、通称『死学』の2年生をしているのだ。

001 歴史のテストは赤丸一つ（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

002 迷いの森に佇む隠れ家（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

私の第二の家は森の中にひっそりと佇んでいる。そしてそこは死学からそんなに離れていない。寧ろ近い。詳しく言うと死学の裏手の森に入って徒歩5分程で到着してしまう。

第一の家——つまり日本の家にいたときは学校まで徒歩と電車の乗り継ぎを経て、移動時間は合計1時間近くかかっていた。電車内で寝てしまって、「はて？此処は何処？」なんて惨劇もちらほら。勿論遅刻だ。開き直り、屋台のヤキソバを求めて近くの海に行ったことが懐かしい。そんなこんなで私からすれば近距離というだけであつてもなく良物件に思える。今まで移動に費やしてきた時間を他にあてられるのだ。睡眠とか睡眠とか……とにかく睡眠を遅刻ギリギリの時間まで貪り尽くしたい。二度寝三度寝と時間の許す限り繰り返し、至福のあのまどろみの時間、寝落ちする瞬間を味わうのだ。……嗚呼、近いって素晴らしい。ブラボー。

そんな目と鼻の先にある我が第二の家だが、その存在を知るものは殆どいない。原因はこの家の主、タチバナさんだ。

「お帰りー」

「ただいまっス」

死学を出発して早々帰ってきた私を家の前でのほほんと迎えてくれた年齢不詳なお姉さん。サラサラシヨートの金髪にエメラルドグリーン瞳、陶器のような滑らかで白い肌、そして完璧なボディーラインというラスボスも裸足で逃げ出すと思われる最強防具を惜しげもなくフル装備。彼女がニッコリと微笑めば一体何人の男共が貢物を捧げるのだろうか。下僕志願者も続々出てきそう……怖い怖い。

目の前の人物はそんなことをしつつい考えてしまつほどのものすごい美人、正に生きる芸術。それがタチバナさんだ。

「ヒイラギー、紅茶飲みたいなー」

「了解っス」

「ありがとー」

「いやいや、タチバナさんもお疲れっス」

「いえいえー。あ、ミルクティーが良いなー」

「うっス」

シャキシヤキと体育会系の返事を返す私。タチバナさん相手だと条件反射でこうなってしまうのだ。

まあそんなことより今は任務を遂行しなければ。生きる芸術タチバナさんの御所望、ミルクティーを入れるため、私は目の前に佇んでいる2階建てのカントリー風な我が家へと足を踏み入れた。

間延びした喋り方にこの容姿、そして輝かんばかりの笑顔。思わず護つてあげ……………いやいや、馬鹿を言っちゃいけない。

この人はこんなナリをしているが見た目だけで判断すると酷い目に遭う。現に先ほど私を迎えてくれたタチバナさんの手には誰が見ても彼女には相応しくないとと思うだろう大きな斧が装着されていた。それを片手で軽々と振り下ろし、木をぶった切っている。スコンスコンと小気味良い音を奏でながら鼻歌まで歌っている様はまるで夕飯の為に包丁でキャベツでも刻んでいるかのようだ。だが、か細い腕から放たれるこの一撃一撃はそこらのマツチョごときじゃ足元にも及ばない。違和感を抱かずにはいられないこの光景……………私は慣れるのに1年ほどかった。

彼女はどうかやら薪割りをしてくれていたようだ。私がやると半日仕事なそれを彼女に任せるとあつという間に終了するのでとても助かる。

話は戻って、何故この家の存在が知られていないことの原因がタ

チバナさんなのかというと、彼女がこの家周辺に結界を張っているからである。この世界には魔力というものが存在するのだが、それが並大抵の力の持ち主ではこの結界に気付くことすら出来ずに通り過ぎていく。結界に触った瞬間、森のどこか違う場所にワープしてしまうのだ。森の中はどこも同じような景色なので知らないうちに強制ワープさせられ「此処は何処なんだ」と迷子になる人が絶えない。故にここは「迷いの森」と安直な名前で呼ばれている。

傍迷惑極まりないが仕方ないとも思う。こんな恐ろしい美人が一人暮らしをしているのだ。襲った奴らの方が心配である。絶対に無事では済まない。何故森の中なのか本人から詳しくは聞いてはいないが、多分アタックする奴やら襲う奴が押しかけてきてタチバナさんの振り返りに遭うということが繰り返されてきたからだろうと私は推測している。そりゃあ鬱陶しくもなるもんだ。私だって同じ目に遭えば森に籠ることを躊躇いなく選択する。

「ふー、いい汗かいたー」

「そんな涼しそうな顔して……汗なんて一つも掻いてないじゃないっスか」

色々考えている内にタチバナさんが仕事を終わらせ家へ入ってきた。先ほど家の前で山済みになされた薪を見たのだが……汗一つ掻いてもいないのは流石といったところか。「ふいー」と汗を拭う振りだけをしている。毎回思うが彼女は化け物だろうか………思っても勿論口に出すことはない。断じてない。理由は言わずもがな。心の中だけに留めておく。

タチバナさんが椅子に腰掛けたので今入れたばかりのミルクティーと昨日作っておいた紅茶のクッキーを棚から出して彼女の目の前に置く。紅茶紅茶しているがまあいいだろう。

「ありがとー」

「いえいえ」

優雅にミルクティーを口へと運びながらもそそとクッキーを齧るタチバナさん。美味しい美味しいと合間に言いながら食べる様は、仕草は上品だが何だか小動物を見ている気分させる。

私は5年前にこの人に拾われた。

5年前の真夜中、私はこの世界では異質な制服姿で入れるはずがない結界内のタチバナさん宅に突然訪問したのである。そのときタチバナさんは目を丸くし少し驚きを見せただけで怪しかったに違いない私を快くこの家に入れてくれた。

異世界から来たからだろうか。よく解らないが私はこの結界にすんなり入ることが出来る。初めは通じなかった言葉もタチバナさんが何か呟いた後通じるようになった。恐らく魔法だろう。ファンタジー小説やらにお決まりな事だが、それがとてつもなく有難かった。……異世界で言葉が通じないとか考えただけで恐ろしすぎる。実際、最初タチバナさんから発される言葉が理解できなかったときは軽く絶望した。

それから事情を話し、結果、この家に置いてもらえる事になった。右も左も解らない、言葉すら通じない状態だったのを助けてもらったのだ。感謝してもしきれない。タチバナさんは私にとって恩人であり、第二の母のような存在である。

因みに1年前から死学へ通うようになったのは自主的に行こうと思ったのではなく、「明日から死学に行つてらー」とタチバナさんが私に言ったからだ。既に手続きを済ませた後で急に言われたのでビックリした。拒否権は勿論ない。宣告された時点でそれは決定事項なのである。

まあ学校ではそれなりに楽しくやっているのです。今では感謝してい

る……が、急に言わないでほしい。私にだって少しは心の準備というものがある。

しかしそれをこの人に言ったところで意味はない。……諦めが肝心である。

「今日学校どうだったー？」

「呼び出されてまた言われたっスよ。あー、明日はペアが発表されるらしいっス」

「あーペアねー。気に食わなかったらやりたいようにやれば良いよー。ヒイラギの場合言わなくてもそうするだろうけどー。うふふー」
「そうっスね」

会話をしながら私はタチバナさんにカバンから出した例の紙切れを渡す。タチバナさんはそれを受け取り、幾許いくばくか眺め、指をさす。

「これなにー？よく解んないけど何か凄いいー」

「あー、それは一筆書きといってですね、ペンを一度も紙から離さずに絵を描くんスよ」

「へー、落書きなのに頭使うんだねー。この不思議物体は何ー？」

「ロケットっス」

「なるほどー、よく解んないー」

「宇宙に行ける乗り物っス」

「おー、すげー」

興味津々できいてくるタチバナさんに一筆書きを教えたり、くだらない話をしたりして今日1日を終了した。

因みに赤丸をとったことに対してお叱りはなく会話にすら出てくることはなかった。

002 迷いの森に佇む隠れ家（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださいと有難いです
(
・
・
・

003 黒学の生徒についての考察（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

朝、許される限りの惰眠をむさぼり、まだパジャマ姿のタチバナさんに「遅刻しても良いけどすっ転ばないでねー」という注意を受けつつ我が家を後にした。

私は一定の速さで足を運んでいく。森を抜け、昇降口を跨ぎ、私はチャイムと共に教室へ足を踏み入れた。遅刻ギリギリである。タチバナさんの注意を守る為、勿論歩いた。家から学校までの距離と時間の計算は我ながら完璧だ。

私は満足して窓際最後列の自分の席へと着席した。うむ、ベストポジション。

「おはよ。今日もギリギリね」

「おはよ。計算通りなのだよ」

「……そんなことに頭使わないで歴史覚えるとかしたら良いのに」

隣の席からサカキが話しかけてくる。………ってかまだ歴史のテストの赤丸気にしてたのか。本人より気にするってどうよ？

「髪もボサボサだし……いい加減直してから来なさいよ。折角綺麗な髪してるんだから」

ぶつくさ言いながらサカキは櫛を片手に持ち、私の明るい茶髪に触れてせつせと寝癖を直してくれる。いつも寝癖をそのままに登校してくる私に見かねた彼女が直してくれるのだ。これはもはや日課となっている。

スツと通る櫛の感触の心地良さに思わず頬の筋肉が緩む。サカキ

を振り返りへらりと笑いながら「ありがとー」と礼を述べると彼女は「次は自分で直しなさい」と言ってそっぽを向いてしまった。相変わらず手は優しく髪を梳すいてくれているし頬が少し赤い。今日も良いツンデレ具合だ。

私がにやにや笑っているとサカキは誤魔化す様に話題を変えて話しかけてきた。

「早速朝からペア発表らしいわよ。今、黒学くろがくの生徒を講堂に詰め込んでる最中らしいわ。さつきイズミ先生が連絡してそのまま行っちゃった。大変そうね」

「ふーん」

「ふーんてあんた……他人事じゃないのよ？ペア決まっちゃうのよ？3年間ずつと一緒になんだからね？」

わかってんの？と私に言い寄るサカキ。近い近い、顔が近い。そんな美人顔で迫られると惚れてしまうではないか。勿体無いことに相変わらず彼女の眉間には皺が刻まれているが……いや、私のせいなのだけでも。

サカキがさつき言った黒学とは『悪魔育成学校』の事である。悪魔育成学校、通称『黒学』。その名の通り悪魔を育成する学校の事である。

私達が通っている死学は7年制だ。1年のときに教科書を使った勉強、そして2年になるとそれの他に黒学の生徒とペアを組んでの実習が組み込まれてくる。ペアは2年から4年の3年間、そして5年から7年の3年間で計2回組む。今決めるペアは5年になると組み直される。つまりどんなに気に食わない奴でも1回ペアを組まれてしまうと3年間ずつと行動を共にしなければならない。ちなみにペアはくじ引きで決まるので運に任せるしかない。

何故黒学と共に実習を行うかというと、死神は悪魔が弱らせた人間の魂を狩るのが主流だからだ。世の中の死神は殆ど悪魔とペアを

組んでいる。実習はその予行練習といったところだ。勿論悪魔が関与していなくても弱っている魂があれば狩るのだが、明らかに悪魔が弱らせた魂の方が多い。

逆に弱った魂を癒すのが天使だ。彼らは『天使育成学校』、通称『白学^{しろがく}』に通っているのだが、何せ性質が正反対な為、黒学のようにこつやつて実習することはない。

「全員講堂に向かいなさい」

ガラガラと教室の扉が開き、顔を出したイズミ先生声を掛ける。
どうやら準備が整ったようだ。

丁度寝癖も直ったらしくサカキが「出来たわよ」と私の頭をぼんと叩く。寝癖だらけだった私の髪はサカキの手によって気にならない程度に見れるまでのセミロングを取り戻していた。所々重力に逆らっているツワモノもいるがこれは中々直ってくれないので仕方がない。

「ヒイラギ、行こ」

「ういー」

ぞろぞろと移動するクラスメイトに加わり、私達も移動を開始する。移動中ざわざわと話す生徒から期待や不安、緊張など、様々な感情を読み取ることが出来る。

おーおー忙しいことで。

「ねえ、悪魔ってどんな奴ら？黒い翼バサバサ広げてげへげへ笑ってんの？リングが好きなの？」

私の質問にサカキが噴出した。

「何それ！？どっからそんな話聞いたの！？ってかリンゴって何！？リンゴ！？リンゴってあのリンゴ！？」

リンゴリンゴと連呼するサカキ。もうすぐ私の中でリンゴがゲシユタルト崩壊を起こしそうだ。そんなにリンゴが気になるか。

この世界の物は何故か基本地球と同じである。私がリンゴと認識しているものはこちらの世界でもあくまでリンゴだった。たまに色が違うものがあるが、あまり困ることは無い。一から覚えなくて済むのは大変助かる。

しかしこの反応を見る限り、どうやら私の考えているものとは違ったらしい。私の中の悪魔像は、黒いノートを持ち歩いているリンゴ好きで小粋な彼なのだが。……って、あれ？死神だっけ？

まあどちらにしろそれを言ったところでどうせ通じやしないので「いや、まあ色々」と誤魔化す。

実は、私は悪魔というものを見たことがない。今までの5年間、結界が張られた範囲と学校の間しか移動したことがないのだ。学校内でも先輩悪魔と接触するどころか遠目に見ることすらなかった。

「悪魔なんて外出ればそこらへん飛んでるのに出会ったことがないなんて……ある意味凄いわね………まあいいわ」

今まで私が何処で何をしていたのか気になったのだろう。一瞬疑問を口にしような彼女だったが、今更私の非常識っぷりに突っ込んで仕方がないと思ったのか、それを問いたすことはなかった。私の扱い方が少しずつ解ってきたようだ。順応能力はそこそこ高い彼女である。

ふう、と溜息を一つ吐き出し、サカキは無知な私に懇切丁寧に説明してくれた。いつもすまんね。お礼はお昼のおやつに持ってきた紅茶クッキーを3つほど分けてあげよう。タチバナさんのために焼いたやつ残り物だが、そんなこと言わなければわからない。わか

るのは私とタチバナさんだけである。

……おっと、また思考を変な方に飛ばしてしまった。ちゃんと説明かなきゃ怒られるので彼女の言葉に耳を傾ける。最初の方は聞いてなかったので途中からだが……まあ問題ないだろう。大丈夫大丈夫、ごまかしは得意だ。

「で、彼らは皆外見は綺麗よ。美男美女ばかり。きっと人間を騙す為にそういう遺伝子を持っているのね。揃って髪は黒、瞳は赤と決まっているわ。色は自由に変えられるらしいけどそれが元の色。肌の色は黒が多いけど白い肌を持っている悪魔もいる……まあ少ないけどね。黒い翼はあるけど消せるの。邪魔だから使ったとき以外は消しているみたい」
「ほうほう」

さも今まで聞いてましたよといった風に相槌を打つ。どつかの小説でそんな設定を読んだことがあるような、ないような。そんなことを考えながら彼女の説明を聞く。

「ただし、性格が最悪なの。乱暴者や捻くれてるのが多いわ。彼らとそれなりにやっていくにはかなりの精神強化も必要よ」

「わあ、めんどくさそ」

「ええ、扱いは難しいと思うわ。私達はこの実習で手綱捌きさばを磨かなきゃいけないの。私も気が重いつたら……ああ、でも美形……」

……………。

……どうやらサカキにとって美形という点は性格云々とくさをも見事に弾き飛ばしてしまうほどの最重要事項らしい。美形が正義ですか。美形ならなんでも良いですか。そうですか。

過去に見かけた悪魔でも思い出しているのだろう。彼女はうつと

りとした表情を浮かべている。説明を聞いている最中、サカキは実習大丈夫だろうかと一瞬考えたが、この分だと彼女は強か^{したた}にやっていきそうだ。心配するだけ無駄、杞憂に終わりそうなので放っておこう。

「ごちゃごちゃと話しているうちにいつの間にか講堂前に到着していた。2年生全員が集結しているので凄い人数、まるでちよつとしたライブ待ち状態である。人ごみの上からちらりと見える扉は閉まっているのでまだ入室はできないらしい。いつまで待たせるのだろうかと思いつつ扉を眺めていたら、イズミ先生がよく通る声が響いた。

「扉を開くので順に入って着席してください。席は開いているところなら何処でも良いです。……決して惑わされないように」

そういつて先生は講堂の大きくて頑丈そうな両開きの扉を押し開いた。

003 黒学の生徒についての考察（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださいと有難いです
、
（
、
・
・

004 手網の行方（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

ボタンと大きな音を立てて講堂の扉が開かれた。

今までざわざわとくっちゃべっていた生徒達が黙り、途端に静かになる。私は最後列辺りにいるのでまだ中の様子を窺^{うかが}うことは出来ない。

続々と死学の生徒たちが講堂内へと入っていく。そこでふとあることに気がついた。

先頭群、つまり中の様子を窺うことが出来る集団の顔がほんのり赤い気がする。頬を赤く染め、フラフラと入っていく死学の生徒達

それはまるで恋をしているかのような…………… っておいおい、マジかよ。手綱はどうした。華麗に捌くんじゃないのかよ。お前らが捌かれてどうするよ。

誘導する先生達もその様子を目の当たりにして心なしか顔が引きつっているように見える。「やっぱりか」「またかよ」みたいな心の声^{かがわ}が聞こえてきそうである。つい先程注意したばかりだということにも拘^からずこの有様。確かにこれは厳しい指導が必要になりそうだ…………… お疲れ様です。

少しずつ順番待ちの数が減っていき、やっと中の様子が窺える所までやってきた私は、どれどれと黒学の生徒を拝見…………… しようと思つたのだが、急にガツシりと手を掴まれたのでそちらに視線をやる。掴まれた手を徐々に辿っていくと、そこには頬を染めて目をキラキラさせた恋する乙女なサカキさんがいた。うわあ、やっぱりお前もか。

ぎゅうぎゅうと…………… いや、ぎちぎちと握り締めてくる手を苦戦しつつも引き剥がす。アナタ握力どんだけあるんですか。手を見ると赤くなっていた。痛い。…………… やっぱリクッキーは一人で食えること

にしよう。

今サカキに文句を言っても無駄だ。絶対私の言葉なんて右から左へスルツと通り抜けてしまう。

抗議を諦めて今度こそ講堂内へと視線を向け――

「……………何じゃこりゃ」

あまりな光景に思わず声に出してしまった。顔も思いっきり引きつったかもしれない。

そう、この場面を一言で表すならカオス。此処はいつからホストクラブになったのだろうか……………あ、ホステスも発見。

この部屋の空気は何か濃い。何がって、あれだ、おそらくフェロモンとやらが。発生源は勿論黒学の生徒達である。

お前らは蝶々か何かか。悪魔が鱗翅類りんしるいだったとは初耳だ……………フェロモンなんて鱗粉みたいにやたら滅多に振りまくものではない。

まだ一步も足を踏み入れていないのに私はフェロモン酔いなるものを初めて体験した。勿論気分が悪くなる方、悪酔いである。彼らの濃すぎるフェロモンが私の自律神経失調を引き起こしたようだ。気分は最低最悪。そして若干吐きそうだ。

吐いたらテメエらのせいだぞ……………もしもゲロリンする羽目になっってしまったら投下地点は奴らの頭の上にと心に決める。

思わず悪酔いしてしまうこの空間。正直このまま回れ右をして出て行きたい。身体は正直なものだ。そう思った瞬間私の身体は素早く回れ右を――

「ヒイラギ、こっち空いてるわ」

私が走り出すよりも一瞬速く、サカキの手が私の腕をガツシリガツチリとホールドしてきた。今度は更に強い力で締め上げてきやがるので振りほどくことが出来ない。

一つ断っておくが、決して私は非力なわけじゃない、寧ろどちらかといえはかなり強い方だ。リングだって握り潰せるし。そんな私でも歯が立たないなんてサカキがおかしいだけである。そしてもっとおかしなのはタチバナさんである……彼女までいってしまうと、もはやバケモノ級であるが。

目で訴えてもサカキが私の腕を放す様子はない。私の逃亡は阻止されてしまった……なんてこと。

無駄に馬鹿力を発揮したサカキにズルズルと引きずられ、私はついに講堂へと足を踏み入れてしまった。

「うぐっ……！」

ちよつと待て。

何だ？何だかべらぼうに臭いぞ此処。

強烈な香水を鼻に塗りたいくらいのような感覚だ。鼻がツ鼻がへし折れる……ってか何で他の奴ら恍惚とした表情してんの？鼻イカれてるの？そつなの？

「早く早くっ」

容赦なく私を引っ張って行くサカキ。テンションがいつもの5割り増し高い気がする。

一方私の気分は優れない。奥に進むにつれて頭も痛くなってきた。何コレ。

思わず片手で鼻と口を覆った。……少しはマシになった感じがしないでもない。着席するとサカキの手が離れたので今度は両手で覆う。……うん、これなら何とかギリギリいけそうだ。

隣に座ったサカキを見ると彼女の向こう側に腰掛けている黒学の生徒と楽しくお喋りを開始していた。早くも丸め込まれているように見えるのだが……サカキよ、手綱を何処へ投げ捨てた？そそくさ

と拾って帰ってきなさい。

私の投げかける生暖かい視線にサカキが気づく様子はない。

それから暫く、口と鼻を両手で押さえつつ横目に恋する乙女まっしぐらなサカキを写す他、特に何をするわけでもなくぼーっとしていた。大分吐き気も治まってきたので周りを見回してみる。先程は吐き気やらなんやらでそれどころではなかったのでゆっくりと観察することができなかったが、なるほど、美形揃いだ。サカキの説明通り、黒髪に赤目の美形集団が講堂の半数を占めている。慣れない色彩を見ているからかちよつと……いや、かなり不気味だ。

サカキによると悪魔は乱暴者や性格がひん曲がっている奴が多いらしいが、今のところそれはわからない。ホストとホステスだ、くらいしかわからない。

今、講堂内にいる教師は2人だけだ。死学と黒学それぞれ一人ずつ講堂の隅っこに立っている。親睦を深めるようにだか何だか言って残りの教師は出て行ったのだ。なので現在フリータイム。そこかしこで大人数が喋りまくっているので騒々しい。そしてその光景は親睦を深めているというより、ホストもしくはホステスが客に相手しているようである。……何度も言うが、此处は学校の講堂内である。決して夜のお店ではない。

私はホストと馴れ合う気は更々ない。

面倒臭いし寝てしまおうと、私は机に突っ伏した。

004 手網の行方（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださると有難いです
(、・・)

005 陰湿遊戯に踵を贈呈（前書き）

少しばかりの流血表現があります。本当に少しばかりですが。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「おはよう」

机に突っ伏してから早々寝るのを諦め、しげしげと講堂内を見回していた私。こんな五月蠅いところで寝られるわけがなかったのだ。そんな私に冒頭の挨拶が隣から飛んできた。見回していた視線をそちらに向けると黒学の男子生徒がニコニコと胡散臭……いやいや、一見人当たりのよさそうな笑顔を私に向けていた。悪魔なのでもれなくこいつも美形である。出来るだけ関わりたくないが、何かされたわけではない。ただの挨拶だ……無視するわけにはいかない。

「おはよ」

両手を鼻と口に当てているのでくぐもってしまったが伝わっただろう。挨拶は済ませたとばかりに、また講堂内ウォッチングへと専念する。

私が今いる講堂は円状のホールで、中心に向くようドーナツ状に席が設けられている。そして後ろの席になるにつれて高度は高くなっている……サーカス会場みたいなものだ。ぽっかりと空いた中心には少し大きな机と椅子が3脚、こちらと対面するように三角形を描いて設置してある。主に講師が喋るスペースだ。私が座っている場所は後ろの方の席なので全体が中々よく見渡せる。

こつやつて見回していると男女の数が均等に取りれている死学と違い、黒学は女子が圧倒的に少ないことに気が付いた。それでも男臭

さを微塵も感じさせないどころか、寧ろ華やかになっているのは流石といったところか。

……しかし何処を見ても夜の店のような光景が視界に入るので落ち着かない。

黒学男子に骨抜きな死学女子や、数少ない黒学女子に鼻の下を伸ばしきった死学男子。そこまでは解るのだが、黒学男子に頬を染めている死学男子がいるとはこれいかに。いくらあっちの女子生徒の数が足りないからってそれはアウトだろ。……いや、セーフか？……いやいや、ギリギリアウトだ。

何故なら男子が男子に頬を染めて恥じらい、身体をもじもじさせているのをリアルに見るのは決して気分が良いものではないからだ。こんな公の場でやられるのは勘弁である。是非人目に付かない所でこっそりやってくれ。それならアウトとは言わない。ギリギリ……セフトだ。

だだっ広い講堂内にその光景が隙間なく詰められていると想像してほしい。実にシニールである。ここは何処の店ですかね。何やら幻聴まで聞こえてきそうになる。はい、こっちピンク入りまーす。はいはい、こっちはタワーお願いしますーす。

……ところで私帰って良いですか？

「大丈夫？」

また隣から声が飛んでくる。そちらを見ると先程挨拶してきた奴と目が合った。どうやら私に話し掛けているようだ。

大丈夫かとは体調の事を訊いているのだろうか？……まさか頭ではなかるうな？先程まで阿呆な事を考えていたのがバレたとか？口に出して………はないはずだ。うん、大丈夫。奴らのスキルに読心術とかがなければ………そういえばサカキの説明ちゃんと聞いてなかったな。

……。

……………。
……今更ながらにその部分が物凄く気になってきた。読心術スキルがあるよ、みたいな話だったらどうしよう。あのときちゃんと聞いていなかった自分が悔やまれる。

「えっと、余計な節介かもしれないけど……良かったらこれ使って？」

思考の渦に飲み込まれて黙り込んでいた私に話し掛ける黒学生徒。
……ん？使って？

知らぬうちに下を向いていた顔を上げると目の前に綺麗に畳まれたハンカチが差し出されていた。ハンカチを持ち歩いている男子生徒とは珍しい……じゃなくて。何ぞこれ？

頭にクエスチョンマークを浮かべて隣人を見やる。すると彼は少し困ったような表情をし、小声で

「……鼻血出てるんでしょ？」

と、のたもつた。

ハナチ？……鼻血？

……。

「此処に入ってきたときから鼻押さえてるでしょ？……ホントごめんね。気にせず使って？」

黙ってハンカチを見ている私に彼は小声で更に追撃を仕掛ける。
私の目は据わっているのだが全く気付く様子はない。

……つまりはあれか？私はお前らの魅力に当てられて思わず鼻血ぶーたれ娘になっちゃったと？原因は見目麗しい僕ちゃん達のフェロモンなんだけど、こればかりはどうしようもないんだ、ごめー

んねえー、と？

恐らく過去に実際こんな事態があつたのだろうけど……… すごいな。自分達のフェロモンのせいだと信じて疑っていない。例え美形だとしても自信過剰もここまでくるとドン引きだ。

「いや、鼻血なんて出てないのでいりませんよ？」

「ああごめんね、無神経だったよね。………でもそのままだと嫌ですよ？」

……… うん、話が全くとって通じない。言葉自体は解るのに不思議なものだ。悪魔ってこんな奴らばかりなのだろうか？……… こんな奴らがパートナーとか……… 鬱だ。

弁解するのもアホらしいので無視して席を立つことにした。サカキは相変わらずなので放っておくことに。彼女は奥の手、怪力というものがある。もし何かあっても大丈夫だろう。

よっこらしよと席を立つ。そのとき、何か嫌な視線を感じた。

そちらに目を向けると、近くにいた別の黒学の生徒達がこちらを見ていた。

チラチラと見ては隣に座っているもう一人の黒学生徒とくすくす笑っている。嫌な感じだ。よく見るとハンカチ野郎とも視線を交わしているようだった。

……… ああ、そういうこと。何という陰湿なやり方だ。

つまり私は祭り上げられていたのだ。私は本当に鼻血なんぞ出していないのだが出していると仮定すればどうだろう。

知られたくない事実を美形男子に知られ、ハンカチまで渡され心配される。美形男子のハンカチを鼻血で汚すことは躊躇われ必死に断るが相手は引いてくれない。強引に押し付けられるが使うことは出来ず、どうしたら良いのかわからなくなる。

垂れているものが涙なら何も問題ない。恋に発展しそうな典型的な展開である。

だが、今回の場合はどうだろう？

涙ではなく、鼻血。そう、鼻血の場合なのである。

普通の女の子なら恥ずかしい事この上ないだろうし、わたわたと慌てまくるだろう。その様を多人数で笑いながら観察するのだ。もしかしたら優しくした後に突き落とす気にいるのかもしれない。

……悪質にも程があるだろ。

私はこちらをチラチラ見ている彼らに気が付いた事を知ってか、ハンカチ野郎は心配顔を止め、今度はにやにやと嫌な笑みを浮かべている。

うん、よくわかった。これが悪魔か。

私は今まで鼻と口を押さえていた両手を離れた。目の前のハンカチ野郎の目が点になる。まあ出ていると信じてやまなかった鼻血が出てないんだもんな。びっくりするよな。

私は彼ににっこりと微笑む。

「ご心配どうも？」

言うが早いか私はハンカチ野郎の顔面に回し蹴りをお見舞いした。斜め上から下に振り下ろし、若干踵落としの様になったので奴は吹っ飛ぶことはなく、強かに床に叩き付けられる。吹っ飛んで他の人に迷惑がかからないようにするための私なりの配慮である。少々大きな音を立ててしまったが……こればかりは仕方がない。

椅子から落ちて床に倒れこみ、苦しそうに唸っているところへ言葉葉を吐き捨ててやる。

「デメエで使えよ、鼻血垂れ」

彼の鼻からは夥しい量の血が流れていた。おびただ

005 陰湿遊戯に踵を贈呈（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださると有難いです
、
（
、
・
・

006 高級寝具 + (前書き)

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

目の前に長い螺旋階段らせんが延々と続く。そこを私は壁に手をつきながら一人でよたよたとゆつくり歩いて降りていた。2年生は全員講堂に詰め込まれているので辺りはしんと静まっている。

今いる場所は2年生の塔、『第二塔』の階段だ。死学こくの校舎は変わっていて、7つの塔で出来ている。1つの塔で1学年だ。塔の名前は単純に学年の数字を「第」と「塔」の間に嵌め込めば良いだけなのでわかりやすく、覚えやすい。全体の構成は第一塔から第六塔が第七塔をぐるりと囲んでいる状態である。それぞれ階毎にクラス分けされており、1つの塔にAからJの10クラスと体育館、講堂、職員室、2年の塔の場合は保健室がある。なんと14階建ての縦長な校舎なのだ。一階部分に職員室、その上に2年の場合は保健室、そしてそこからJ、I、H、G、Fと順にクラスが積み上げられ、その上に体育館が挟まれる。そこからまたE、D、C、B、Aと順にクラスが積み上げられ、最後に講堂がドシンと乗っかっている。職員室と体育館、そして講堂は各塔に複数存在しているわけではなく第一塔から第七塔のその階の部分だけが結合してワンフロアになっている。他の階には隣の塔と第七塔に繋がる渡り廊下が設置されている。

私はこの校舎を初めて見たときウェディングケーキを思い出した。職員室と体育館、講堂がケーキ部分で他はそれを支える柱である。てっぺんに人形を飾れば完璧だ。

この建物は建築構造力学的にどうかと思うが此処は日本ではない

イグランドである。魔法やらなんやら使っているのだろう。本当に何でもありだ。

それはさておき、私は現在講堂から保健室に向かって歩いている。今にも吐きそうになるのを堪え、懸命に足を前に運んでいるのだ。原因は悪酔い。黒学の生徒が撒き散らかすあの傍迷惑な代物、フェロモンである。

ム力つく奴に踵を喰らわせたあの時、鼻血なんぞ出てねえよアピールで手を離してしまった。フェロモンが物凄く濃い場所で。蹴り倒して気分がスッキリしたのは良いが、吐き気に頭痛と体調の方は最悪になってしまったのだ。

結構派手にやってしまったのだが全く騒ぎにはなっていない。あまり気付かれていなかったのだ。気付いていたのは私を祭り上げていた奴らと近場にいた他の黒学の生徒。前者は少し驚きを見せた後にやにやと笑い、後者はチラリと一瞥しただけでまたお喋りに戻っていた。死学の生徒は誰一人気が付かなかったようだ。皆お喋りに夢中だったのだろうか……そこまで夢中になるとか、そのうち貢ぎ始めないだろうか……っていうかサカキ、お前真横にいて何故気が付かない。

講師二人は勿論気が付いていたようである。黒学側の監視を勤めていた講師は眉間に皺を寄せてはいたが別に私に何かを言うということではなく、死学側の監視役を勤めていたイズミ先生からも特に何かを言われることはなかった。イズミ先生に関しては怒るところか微かにほくそ笑んでいるのを私は見逃さなかった。……恐らく準備中に何かあったのだろう。

そんなこんなで私は咎められることもなく、体調が悪いから保健室へ行くとだけ告げ、今に至る。

……ん？鼻血垂れ野郎？

知らない。今、私は自分の事で精一杯だ。他人を気遣う余裕などない。

まあ余裕があったとしても奴に気遣うつもりは更々ないが。

吐き気と頭痛を紛らわすようにあれこれ考えながら足を運ぶこと約10分。……やっと、やっとだ。保健室の表札が見えた。下り階段とはいえこの体調で14階の講堂から2階の保健室まで徒歩で移動するのはキツイ。無事に辿り着いたことから来る安堵ともう立っているのも限界だという焦りが入り混じる。さっさとベッドに横になろう。

ガラガラと扉を開け、消毒液や薬品の匂いが充満する保健室に足を踏み入れる。足取りが覚束ない^{おぼつか}ので壁や棚にぶつかるわ椅子を倒すわけでちよつとした惨事になってしまったが気にしている余裕はない。……ヤバイ、眩暈までしてきた。視界に影が差し、世界がゆらゆらと揺れている。気持ちが悪い。

一番近くにあるベッドのカーテンに手を掛けよると引く。そこには恋焦がれてやまないベッドが私を待っていてくれた。……ああ、ベッド。会いたかった。やっと横になれる。

私は最後の力を振り絞り、ふらつく身体をベッドへと転がして目を閉じた。まだ頭痛や吐き気は相変わらずであるが、休んでいるうちに治まるだろう。一つ長い息を吐き出して身体の力を抜く。

……うむ、やはりベッドは良いものだ。疲労した身体を優しく受け止めてくれる洗剤とお日様の良い匂いがする白いシーツが被さった低反発仕様の敷布団。風邪をひかぬように身体を優しく包んでくれる洗剤とお日（中略）白いカバーが被せられたふわふわで軽い掛け布団。……こいつはフェザー90%の羽毛布団様とみた。そして、頭を優しく支えてくれる（前略）カバーを被せられたこれまた低反発仕様な枕。……保健室のベッドにしては気前が良すぎ……。まあ気にするまい。そんなことは今どうでもいいのだ。それら全てが私を癒してくれる。

ああ、幸せ。体の調子是最悪だけでも。

健康良児である私に保険室は無縁である。今回初めて訪れたのだが、こんな素敵ベッドがあるなら仮病なり休み時間なり使ってちょくちょく来てしまおうか。

幸せ気分で寝返りをうつと何かにぶつかった……抱き枕まであるとはとことん気が利く保健室である……が、硬い。他の寝具は最高級だというのに、けしからん。どうせなら抱き枕までこだわるべきだ。しかしこの抱き枕、温かいとは湯たんぼも兼ねているらしい。

私はそのけしからん抱き枕がすこぶる気になり、閉じていた目を開いた。

赤い二つの目と私のそれがかち合う。

「……………人型の抱き枕とか……………ないわー……………」

ないわーと言いつつも、そうだと良いなと期待を込めて言ってみた。

すると抱き枕の目が細まる。

わあ、すげえ、動くんだぜこの抱き枕。悪口言つと怪訝な表情になるんだぜ。リアル設計過ぎて悪趣味としか言いようがないが。流石異世界、まだまだ未知なものが盛り沢山である。

……………。

……………。

……………うん、ごめん、明らかに人だ。

しかもこいつ

「……………悪魔だし」

ついつい溜息が漏れた。

そう、私が現在進行形で抱きついていいる彼は赤目と黒髪。サカキが説明してくれた悪魔の色彩をバツチリ携^{たずさ}えていた。

しかもこの人、超が付くほどの恐ろしい美形っぷりである。講堂

にいた黒学の生徒たちも勿論美形なのだが、それをも超越する美形だった。ずっと見ていても見飽きることはないというか……否、もう美形は結構。腹一杯です。ごつつあんです。

そういえばこの人に対して何か違和感を感じていたのだが、その理由がわかった。恐ろしいくらいに顔が整っている……ではなく、あの濃すぎるフェロモンを全く感じないのだ。彼の周りを纏う空気は澄んでいる。先程と変わらず吐き気と頭痛はあるのだが、こうやって普通に息をしても急に悪化する事はない。こんな密着しているのに……密着……密着？

不思議に思ったところで、自分の腕がまだ彼に巻き付いていることに気が付いた。何て事だ。これでは痴女ではないか。

「……すみません、ごめんなさい、お邪魔しました」

私は彼にそう告げて腕を離し、もそもそとベッドを降りて他のベッドへ移ろうとした。

だが、床に足をついて立ち上がった瞬間

「うえ……っ」

酷い眩暈に襲われた。

容赦なく世界がぐるぐると回転する。

「ぶっ」

身体前面に鈍痛が走る。冷たいと感じるこれは床だろうか？……どうやら私はぶっ倒れたようだ。

頭痛が酷いし吐き気もするし打った部分は痛いし……散々である。身体を少しでも動かすのが億劫だ。

「……………ううー、くそう……………鱗翅類め……………」

彼等とは性格的に全く合わないし身体的にも異常をきたす。

……………ペアとか本格的に無理ではないか。

これは実習どころじゃないなと考えたところで、私は意識を手放した。

006 高級寝具 + (後書き)

誤字・脱字などあれば報告してくださいと有難いです
(
・
・
・

007 夢才子に清き一票を（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します（・・）

柔らかなまどろみの中、徐々に意識が覚醒していくのを感じる。

ふわふわふわ……この布団は最高だ。寝心地良すぎて涎垂れそう……いや、もう手遅れだな。口元が冷たいし。

ああもう少し寝ていたい、夢の中へ帰りたい。

……しかし、妙な夢を見た気がする。あのやたらリアルな人型抱き枕。本当にあるのだろうか？ あったら値段はいくらくらいするのだろうか？ 妙に凝っていたし高そうだ……いや、買わないが。誰があんな悪趣味なもの買うものか。私にはタチバナさんが直々に作ってくれたブタの抱き枕がある。あれは最高の抱き枕だ。……見た目がちょっとアレではあるが。ブタの抱き枕、あの子がいれば私はすぐに夢の世界へと旅立てるのに――

――吐きそうだ。

あれこれと考えているうちに完全に意識が覚醒してしまった。結構寝た感覚はあるが体調は回復していない模様。頭痛も吐き気も健在である。

因みに目は閉じたままだ。これを開ければ現実世界が訪れる。……何だろう、ものすごく目を開けたくない。開けちゃいけない気がする。

だがしかし、そういうわけにはいかない……現在時刻の確認がしたいのだ。

もしも夜だったらシャレにならない。タチバナさんの反応を想像するだけで恐ろし過ぎる。

私は諦めてゆるゆると瞼を上げて——即、下ろした。
何だろう、今見たくないものを見た気がする。やっぱり寝ようかな。

「……起きたか」

……何か聞こえた気がする。
低くてよく通る声。売れっ子声優になれそうなくらい良い声だ。
今まで見たことなかったが、イグランドにもテレビが存在しているのだろうか。

……。

……いかん、現実を見なければ……。

私は意を決してもう一度ゆっくりと瞼を開ける。

2つの赤い瞳と私のそれがかち会った。デジャヴだ。

あれだけ冒頭で夢だと言いつ聞かせたのに……どうやら夢オチは許されなかったようである。

「……おはようございます」

「もう昼だな」

「………こんにちは」

「………」

何とも言えない視線が突き刺さるがそんな視線もなんのその。スルースキルならレベルMAXだ。痛くも痒くもない。

……まあそんなことより、もう昼なのか。少し寝過ぎたかもしれない。サカキはあれから大丈夫だったのだろうか？……いや、怪力に心配は無用であった。

そして何故この人が此処にいるのだろうか？ベッドサイドの椅子に腰掛けてこちらを見下ろしてくる端正な顔を見上げる。……うん、恐ろしい美形っぷりだ。ではなくて。

確かこの人私が保健室に入ってきたとき寝てなかったか？……ここに私が失敬してしまったわけだが。意識が朦朧としていたとはいえ大変なことを仕出かしてしまった。それからベッドを移動しようとして……移動………あ。

今更ながらに床にぶっ倒れたことを思い出した。それからの記憶がぶつつり途絶えている。恐らくそのまま寝てしまったのだろう。

だが、本来床に転がっているはずの私の身体は何故か今ベッドに預けられている。

ということは、だ。

「あの、もしかして運んでくれました？」

問い掛けると短く「ああ」という肯定の返事が返ってきた。意外だ。意外過ぎて呆然とする。

悪魔といっても性格やら色々と種類があるのだろうか？現にこの目の前の悪魔は親切だ。

私の中にある悪魔の先入観を少し変えなければいけないようである。

「邪魔だったからな」

……そうでもないようだ。

しかし、理由はどうであれ態々私をベッドまで運んでくれたのは事実であるし、確かに私も見ず知らずの他人があんなところでぶっ倒れられても困る。迷惑極まりない。そして私ならそのまま放っておく可能性も無きにしもあらず……って私の方がよっぽど悪魔じみているではないか。なんてこと。

思わず突き付けられた事実は何とも言えない複雑な気持ちにさせられ、目を逸らしてしまう。

「……御迷惑をおかけしました」

謝罪をするとまた「ああ」と短い台詞が返ってきた。先程からそれしか聞いていない……ああ、邪魔だったとは言われたか。

それにしても彼は講堂にいた悪魔とは少し違うようだ。何より口数が少ない。ペラペラと離しかけてきた鼻血垂れとは大違いである。もう一度彼を見上げるとまた目が合った。

何となく先に目を逸らしたほうが負けな気がして逸らすことができない。

何か話さなきゃいけないかなとか考えていたら予想外にも向こうから話しかけてきた。

「……お前は何故此处にいる」

言葉数は少ないが、無口というほどでもないらしい。あちらから話を振ってくるとは思わなかった。

しかし、何故と訊かれても

「体調悪いからですが」

此处、保健室だし。

他に理由などない。まあ今後は体調不良でなくとも来ると思うがこの布団の寝心地は最高である。持ち帰りたいくらいだ。

……その手があつた………はっ、いかんいかん。ついつい誘惑に負けそうになった。恐るべき素敵寝具。

「……いや、そういう意味では………まあいい」

私が己の欲望と格闘していると彼は溜息混じりでそう言った。私の返事は欲しかった答えではないらしい。

いやいや、他にどう応えろ？

疑問符を浮かべながら考えるが一向に別の応えを導き出せない。
意味がわからない。

この人は私の中で不思議君にカテゴリ分けされた。

007 夢才子に清き一票を（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださいと有難いです
、
（
、
・
・

008 零れる事はそのままに（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「恐ろしく顔色が悪いな。……………風邪か何か」

「へ？」

答えを導き出せずに頭を傾げる私。そこへ突然話し掛けられたものだから間抜けな声が出てしまった。

私は視線を彼に戻す。

こちらをジッと見ているがその表情に心配の色は見られない。本当によく解らない悪魔である。

「……………あー風邪じゃないですよ。講堂で今日ペア発表があつたんですけど……………その空気に酔って気持ち悪くなったというか……………多分悪魔が撒き散らしていたフェロモン酔いです。私には強烈過ぎるみたいです」

あれ何とかならないかなとぼやきながら彼を見ると少し驚いた顔をしていた……………気がする。

気がするというのは表情の変化がほんの僅わずかだったからだ。

私は彼の顔をじつと見た。

さっきから会話をしているけど……………そもそも何者なのだろう？制服を着ているから目の前のこの人は黒学の生徒ではあるようだが、ブレザーを脱いでいるので同級か先輩かを判別することはできない。ブレザーに学年ごとに色分けされているラインがあるのだ。それに年齢を判断するのに見た目なんて全くあてにならない。

見た目が年齢の判断基準にならないのは彼らが恐ろしく長寿だからだ。イグランドでは人間を除外した種族——死神や悪魔、天使な

どは地球人の10倍は生きるというから恐ろしい。……今は私も死神なのでその恐ろしい奴らの仲間入りを果たしているわけだが。実際、私の外見は5年前からちっとも変わっていない。年齢的には21歳なのに見た目は16歳のままなのである。かといって成長スピードが単純に10倍遅いだけなのかといわれれば少し違う。彼らの外見は地球人と同じように16歳くらいまで成長するのだ。しかし、そこからの成長、老いが物凄く遅いのである。外見が同じ年齢くらいなのに実は100歳以上年上でしたといったような事はさらにある。

よって、目の前の人物が何年生なのか、そもそも何歳なのか見当も付かない。私は迷惑を掛けたという負い目から彼に対して敬語で喋っているのだが、負い目があるうとなかろうと敬語で話すのは妥当だろう。

私は彼を凝視したままずっと気になっていた事を口にする。

「そういえば悪魔あなたが近くにいても全然気持ち悪くならないのが不思議です」

これだけ気持ち悪くなっているのに何故彼だけが大丈夫だというのか。そこに何か解決の糸口があるのだろうか。

解らないままだと実習が大変なことになってしまふのだ。ゲロリンしながら実習なんてものは御免被むひりたい。凄く気になる。

緊張しながら待っていると彼から思わぬ答えが返ってきた。

「俺が今それを撒き散らしていないからだな」

なんと。

「……押さえられるんですか？」

「寧ろ、出そうと思わなければ出ることはない」

何ということだ。アレは出し入れ可能だというのか。そしてそれを敢えてあいつらは撒き散らかしていたというのか。なんて傍迷惑な。

この荒ぶる殺意をどうしてくれよう。

「……っ！うぐっ」

わぁー、吐きそう。

驚愕の事実思わずガバツと思い切り身体を起こしてしまったのだ。それによりまた眩暈を起こして後ろに倒れる。今度は素晴らしい弾力を誇る敷布団が私を優しく受け止めてくれたので打撃ダメージはない。ありがとう、素敵敷布団。

だが眩暈によるダメージを免れることはできない。

「………気持ち悪……っ」

私を中心に世界が回る。 勿論視覚的な意味で。

目を瞑ってもぐるんぐるんと回り続ける。

気持ち悪さは最高潮である。

堪えるために目を閉じてうーうー唸っていたら額に何かが触れた。目を開けると彼の手が当てられている様が見える。……熱はないと思っただが。

相変わらず彼の顔に心配する色は見られない。何がしたいのだろうか。

「………楽にしてやる」

え？殺される？

それはただけないと暴れようとした寸前、吐き気が治まるのを

感じたので慌てて止めた。本当に言葉通り楽にしてくれたようだ。頭痛も治っている。

繰り出そうとした蹴りを途中で止めたので右足が少しベッドから浮いている……気付かれぬようそつと元に戻した。

……疑ってすみません。いや、でも悪魔に真顔でそんな言葉を吐かれたら誰だってそういう意味で受け取るのではなからうか。

「……ありがとうございます」

そして疑ってすみません。

勿論言葉として出していないが心を込めて相手に伝える。

「……毒気を抜いただけだ」

毒気とはフェロモンの事だろうか。

確かに悪魔が撒くものだし、回収も容易に出来るのかもしれない。私のもう一度礼を言つと短く「ああ」と返事が返ってきた。……

視線が右足に行っているのは気のせいではないだろう。どうやらバレだったようだ。

私が思わずははと引き攣った笑いをすると彼は微かに笑った。笑ったといっても口角が少し上がった程度なのだが。

何だか貴重なものを見た気がしてマジマジと見てしまう。だが、それはすぐに無表情に戻ってしまったのでほんの一瞬しか見ることはできなかった。

私を得した気分になっていると、彼は壁に掛けてある時計を確認して「そろそろ行く」とだけ告げ、立ち上がって出口に向かった。そして何か思い出したかのように立ち止まる。

どうしたのだろうかと見ていたら彼は頭だけ振り返って口を開いた。

「……口元を拭いておけ」

口元？

……。

………忘れてた。

私は親切にも指摘された今だ口元に残っている涎を手の甲で拭いながら、ガラガラと扉を開けて保健室を出ていく彼をベッドの上から見送った。

008 零れる字はそのままに（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださると有難いです
、
（
、
・
・

009 摩訶不思議な保健室（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「何処行つてたのよ」

教室に戻って聞かされた第一声がそれだった。……そして何か睨まれてるし。

今、私は自分の席に着きながら仁王立ちしているサカキに見下ろされている。

保健室で彼を見送ってから自分も教室へ戻ると昼休みが終わりかけているところだった。

先程まで吐き気に悩まされていた私だが、有り難いことに彼が呆気なく取り去ってくれた。よって、吐き気もたらす問題は解決されたのだが、今度はまた別の問題が浮上してしまったのである。

ハラヘリ。

そう、私は今、物凄く腹が減っている。

今日の朝は、ギリギリまで惰眠を貪っていた。それはもう朝食を抜かなければ間に合わないほどに。……つまり私は昨日の晩から何も口にしていない。

そして朝から七面倒くさい奴の相手もした。私は心身共に疲弊し切っている。疲れ、則ち本日のエネルギー消費量は朝っぱらからうなぎ登りで、私は現在エネルギー欠乏状態。身体からは直ちにエネルギー補充をしろとブーイングが飛び交っている。胃に食物を詰め込めと腹がぐるぐる喚き叫んでいる。

早く、早くこの三大欲求の一つを満たさなければとロッカーに仕

舞つてあつた鞆から弁当箱を引つつかみ、着席した。時計を見遣ると残り時間は僅か5分。迅速に事を運ばなければ昼休みが終わってしまう。ハラヘリのまま授業なんて受けてたまるものか。

そう意気込んで弁当の包みを外したところでサカキに取っ捕まつたのだ。

そして冒頭にあつた言葉が投げ掛けられた。

何故私が怒られているのだろうか。寧ろこつちが文句を言いたいくらいなのに。理解に苦しむ状況である。

目の前には蓋がまだ開けられていない状態のタチバナさんによるお手製弁当、その先には眉間にシワを刻み込んだ仁王立ちのサカキ、そしてその彼女を着席したまま見上げる私。まるでお預けを喰らつたわんこのような構図だ。

この状況を迅速に打開すべく、私は彼女に対する文句を全て飲み込み、彼女の問い掛けに答える事にする。最優先するべき事項は、さつさと食い物を投下しろと悲痛な叫びを上げている空っぽの胃を満たすことなのだ。兎にも角にも腹が減った。事態は一刻を争っている。

「保健室だよ」

答えたよとばかりに私は弁当蓋の解除に取り掛かる。早く輝かんなばかりの銀シャリと面会を果たしたい。

「嘘っ！」

そう声を上げながら彼女が手を掴んできた。

何するか。この邪魔な手を迅速に離しなさい。私には時間がない

んだ。

しかし嘘とはどういう事だろうか？

私は彼女の言葉の意味が理解できず、首を傾げて見上げた。

「ペア発表が終わった後、私イズミ先生に聞いて保健室に行ったの」

来てくれていたのか。いつの間に。

多分私が寝ていたときなのだろう。サカキが来てくれたという記憶はない。

しかし、来たなら何故に嘘だと言われるのだろうか？寝ているところを見つけただろうに。

彼女の言葉に益々首を傾げながら次の言葉を待つ。

「でも、あんたいなかったじゃない」

……へ？

今、さぞかし私の顔は間抜けになっているだろう。

彼女は今、私はいなかったと言わなかっただろうか？

訳が分からず呆然とする私を他所にサカキの言葉は続く。

「体調が物凄く悪そうだったって聞いたから心配して急いで行ったのにいないってどういう事よ！休み時間になる度にずっと探してたんだからね！？やっと見つけたと思ったらピンピンしてるし……っ！私の心配を返しなさいよ！」

言葉を切らさず一気に浴びせられる。よく見ると彼女の瞳はうつすらと潤んでいた。どうやらかなり心配してくれていたらしい。

……なんだこのツンデレのお手本みたいな娘は。にやけるではないか。

にやにやする私に恨みがましい視線を投げ掛けるサカキ。ごめん

「ごめんとはいつつもにやけ顔は抑えられない。

……痛っ、殴られた。何だこの可愛い生き物は。

「それで何処行つてたのよ？」

彼女の言葉にそうだったと思い出す。にやにやしている場合ではない。

確かに私はずっと保健室で寝ていた。それは事実なのに何故彼女は発見することができなかったのだろうか？

「うーん、おかしいなあ」

「何？本当にいたの？」

「いたよ」

「……まさかベッドの下とかで寝てたとか言うんじゃないでしょうね？」

「いやいやいや」

確かに床にぶつ倒れたが不思議君がベッドに運んでくれたし……

……あ。

そうだ、あの人が、不思議君がいたのだ。

「……サカキ、保健室に中んでもなく美形な悪魔いなかった？」

美形に目がないサカキさんである。もしも万が一私を見逃すようなことがあれども、あれほどの美形を彼女が見逃すはずがない。

「中んでもなく美形な悪魔？中まで入ってベッド全部調べたけど保健室には誰もいなかったわよ？……というか悪魔は皆美形じゃない」

彼らの姿を思い出したのかウツトリとどこか違う世界へ意識を飛

ばしているサカキは放っておくとして。
いなかったとはどういう事だろうか？
彼は確かにいたというのに……。

……え？まさか幽霊とかそういうオチじゃないですよね？

「……」

このよく解らない事態に混乱する私。
そこへ昼休み終了のチャイムが鳴り響き、講師が教室へ入ってきた。

………何かとても重要な事を忘れていている気がする。

「……ハッ！」

—— 弁当——……っ！！

009 摩訶不思議な保健室（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださると有難いです
(、・・)

010 止むを得ない食事情（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

午後の授業が始まり、講師が教壇で熱弁を振るっている。科目は数学、ひよろりと背丈が長く、少し長めな灰色の髪を携え、やはりというかお約束というか眼鏡を掛けた色白男性教師、イヌイ先生だ。彼の見た目はやしの様で、なよなよしてそうだなというイメージを持たれがちだが実際の中身は真逆だ。困っている生徒を見つけると助けずにはいられない、情熱溢れるちよい悪な熱血教師なのである。

特別顔がかっこいいわけではないが不細工でもない。そんな彼は密かに生徒の人気を集めている。

「……で、ヒイラギはずっと保健室にいたのね？」

「ん、ほほんほへへはへほ……むぐむぐ………んおお、このグラタン美味ス……っ！」

「……何言ってるのかさっぱりよ」

「『殆ど寝たけど』……むぐむぐ………んー、ひははへー」
「……」

イヌイ先生の熱弁をBGMに私とサカキは講堂から教室に帰ってくるまでの一連の経緯のことで話をしていた。サカキはヒソヒソと小声で話し掛けて来るが、私は普通に喋る。更に言うと、教科書の代わりにお弁当広げてルンルンとお食事タイムを満喫中である。因みに私が先程最後に喋った言葉は「んー、幸せー」だ。腹減り後の食事は五臓六腑に染み渡る。

食べながら喋る私へ、隣の席から「ちゃんと口の中の物がなくなっってから話さないよ」というサカキの注意が飛んで来る。

この台詞だけを聞くと正論だ。サカキが正しいように思える。……だがしかし、よく考えてみて欲しい。私は今、食事の真っ最中である。食事中に話し掛けてこなければ良いのだ。食べ終わるまで待ち切れなくて話し掛けてきているのはサカキの方なのである。ましてや食べるのが今になってしまった原因はサカキが邪魔して昼休み中に食べられなかったからであって断じて私のせいではない。

私はこの美味スなグラタンを口に運ぶのに忙しい。取り込み中なのだ。話はこのタチバナさん特製弁当を平らげてからにして欲しい。私の目の前には神々しく佇む弁当の中身は洋風な料理で制作された愛らしい動物達がずらりと並んでいる。所謂キアラ弁である。以前、キアラ弁の話をしたらタチバナさんがハマってしまってここ最近私の弁当はファンシーなものとなっている。

私はウズラの卵で創作された愛らしいヒヨコさんを摘む。わざわざ黄身と白身が反転させてあるのでちゃんと黄色いヒヨコさん……

……タチバナさん、朝からどんだけ手の込んだ事を……。

タチバナさんのこだわりを感じつつそれを口の中へ運び、咀嚼した。何やら食べるのが勿体な………うまひ。

思わず表情筋も緩む。

私は、今幸せの真っ只中だ。

「……つとと」

机の前に立て掛けてある本がよろよろと倒れそうになり、慌てて片手で支える。

私の食事タイムを邪魔させないよう壁の役目を果たしてくれているのは『死神大全』。入学時にもれなく生徒全員に配られる本だ。

死神の心得など死神視点で書かれた倫理的な内容が長々と600ページほどに渡って綴ってあるらしい。

私は今日初めて開いた。ロッカーの奥底に放置したままだった彼は、とにかく嵩張^{かさば}るので邪魔だしいい加減捨てようかと思っていた。

しかし、本日彼を見つけた私によってこの壁という役職に大拔擢。現在進行形で懸命に与えられた任務を遂行してくれている。

分厚く程々にデカイ彼は壁に持つてこいだと思ったのだが、実際に使ってみるとそうでもないらしい。自身が重すぎて少々安定性に欠けている。ズルズルと少しずり落ちていくのだ。期待ハズレである。……やはり即刻解雇処分を言い渡すべきであろうか。

「……ヒイラギ、今更だけどその本って何か意味あるの？」

「うーん、支えるの面倒になってきたし食べ辛い。あんま意味ないかも」

「……いや、そうじゃなくて、そもそもそれ自体が逆に悪目立ちしてるって言うてんのよ。イヌイ先生さつきから青筋立ててあんたをガン見してるわよ？」

「ん？あー、知ってる」

「知ってるじゃないわよ」

数学の授業に全く関係のないそれを片手で支える私にサカキが問い掛ける。

私は別にこんなもので弁当を食べているということ自体を隠し通せるとは思っていない。この壁は弁当を隠すものではなく、イヌイ先生の視線を遮るためのものなのである。見られながらは食べ辛く、美味い弁当も心なしが味が落ちてしまふ。せつかく美味しいのだから美味しく食べたい。

……そう思っただけで立て掛けたのだが、現段階でイヌイ先生の火傷しそうな熱い視線よりズルズルとだらし無く崩れ落ちては情けなくも私に支えられるこいつの方が気になってきた。

「……私、知らないからね？」

「んー……むぐむぐ」

「……」

「むぐむぐ」

「……………話戻すけど、ヒイラギを見つけれなかったっていうのはおかしい話だわ。何も覚えてないの？」

気のない返事を寄越す私にこれ以上何をいっても無駄だと感じたのか、話を戻すことに決めたようだ。やはり彼女は私の扱いを少しだけ心得ている。

因みにあの『抱き枕事件』の件はくだりごっそり抜いて一連を話してある。話したら物凄く煩そうだ。しつこく聞かれて絶対面倒なことになる。彼女には保健室に行ったら黒学の生徒が一人いたとだけ説明してある……………断じて嘘は言っていない。

「うーん、私は寝てたから……………むぐむぐ、はんほひへはひ」

「……………」

「…………『何とも言えない』」

何言ってるのか分からないのよと言いた気な視線を受け、飲み下してから言い直す。……………何度でも言うが、食事中に話しかけてくるサカキが悪いと思う。

「……………夢遊病とかあるんじゃないの？」

「……………ない」

……………多分。

何せ意識がないときの自分の行動など自分自身では確認の仕様がない。だが今までそんなこと誰にも言われたことがないので私はそうではないのだろう。多分、絶対。

「……………ヒイラギッ！！」

「ふあい」

「これの答え!!」

突然サカキではない低い声が私の名前を怒鳴るように呼んだ。
少し前から解雇処分が下された彼を閉じて床に置き、既に堂々と
弁当を頬張っている私へ、遂にイヌイ先生が質題という名の注意を
仕掛けてきたのだ。

彼の後ろに幻影の般若が浮かんでいるのが見える。相当ご立腹な
模様である。

「ちよつ、どうするのよっ」

……何故サカキが慌てるのだろうか。よくわからん娘だ。

どれどれと前の黒板を見てみると途中式を書くだけでも面倒臭そ
うな式が長々と連なっていた。……陰険先生と呼んでやろうか。

私はそれを眺め、鮭のムニエルを咀嚼しながらうーんと首を捻り、
嚥下してから口を開いた。

「多分、1」

「多分って何よ」

答えた私にイヌイ先生ではなくサカキが素早く突っ込んで来る。
何って、多分は多分だ。

苛立たしそうにこちらを睨み付け、組んでいる腕を指でかつかつ
させていたイヌイ先生の指が止まる。

私を除くクラスメイト全員が息を呑み、しばしの沈黙が流れた。

「……さつさと食べ」

「ありがとうございまふ……むぐむぐ」

「……………うそ……………」

チツと舌打ちをしてまた熱弁を始めるイヌイ先生。もうあの火傷しそうな光線を放って来る事はない。

どうやら許可が下されたようだ。私は礼を言って食事に戻る。

「……どうして分かったの？」

サカキが驚いたような、不思議そうな顔をして聞いてくる。同じ疑問を抱いているのか、他のクラスメイトもサカキと同じような表情をしてこちらを向いている。

テストの学年順位で毎度最下位を独占キープしている私が先程質問された難題の正解を答えられたのだ。不思議でたまらないのだから。

「むぐむぐ……んー、勘？」

「何で疑問形なのよ……」

脱力するサカキとクラスメイト達。その様子が何だか可笑しくてあははと笑う。

「おら、お前ら授業に集中しろ!!」

私に注目していた生徒達がひいっと悲鳴を出して慌てて前を向く。

「ヒイラギ、お前もさっさと食べ!! 取り上げられたいのか!？」

「ふひはへん」

イヌイ先生の怒号が飛ぶ。

それは勘弁と私は即謝罪し、黙々と食事を再開した。

口に入れたまま喋ってしまったのでちゃんと伝わったかどうかは分からないが、何も言われないのでまあ良いだろう。

しかしよくもあんなひよろい身体で馬鹿でかい声を出せるもんだ
なと失礼なことを考えながら最後の一口を頬張ってしばし味わい、
ゆっくり胃へと流し込んだ。
ご馳走様でした。

010 止むを得ない食事情（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

011 殖え続ける悩みの種（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「——ということがあったんよ。タチバナさん、どうして分かるっスか？」

「んー」

授業を終え、学校を後にした私は家に帰って早々、リビングの椅子に腰掛けて優雅にペンを走らせていたタチバナさんに今日の出来事を話した。勿論抱き枕云々の件は省いて、だ。タチバナさんに知られるのは、私にとって親に知られるのと同じようなものなのである。あのような醜態、話せる訳がない。

タチバナさんは少し考える素振りを見せ、何故か嬉しそうに話し始めた。

「悪魔の魅力が通じないのはー、多分ヒイラギが無意識に抵抗してるからだと思うー」

「……抵抗っスか」

「そそー。彼らは元々美形でしょー？そこへ更に魅力を振り撒くからねー。それって強烈な麻薬みたいなものだからー」

「ふむふむ」

「ヒイラギはー、常に無意識下で抗生剤を打ちまくってる状態ってわけー。吐き気やらは副作用みたいなものだと思うー……できたー」

できたーという可愛らしい声と共に紙からペンを離すタチバナさん。覗き込んで見てみるとそこには立派なお城が佇んでいた。写真を簡易化したような出来のそれは私が帰ってきたときから彼女がずっと描いていたものだ。恐らく昨日私が教えた一筆書きであろう。

この人、地球にある物を私が教える度に面白がって再現するのだが、毎回完成度が高すぎるのだ。

何ていうか再現というより最早私の知識を元にして新境地を拓ひらいている。私はもう驚く事にも飽きてしまった。最近では彼女が何をしようが「タチバナさんだから」で納得してしまう自分がいる。

そんな風に私が考えているとも知らず、彼女は今日も気まぐれで新境地を開拓している。彼女にとってそれはただのお遊び、遊戯なのである。……末恐ろしい御人ぞ。

「うふふー」

開拓者タチバナは今しがた出来上がった、一筆書きと呼ぶには躊躇ちゅうわれる最早立派なモノクロ絵画を上機嫌で眺めつつ言葉を続ける。

「まあ、普通はそう簡単にいかないんだけどー」

「そうなんスカ？」

「そだよー。頭で抵抗しなきゃとか思ってたもー、身体が勝手に相手に魅了されちゃうはずー」

しかし、私の場合オートで抗生剤投与をしていると言ったのはタチバナさんだ。

矛盾過ぎるその説明に疑問符を浮かべていると彼女は私が何を考えているのか察したのだらう。ニツコリと笑って説明を続けてくれた。

「悪魔の容姿はー、大抵は少なからずとも好意を抱くハズー。綺麗なものってよっぱどの変わり者でない限り皆好きだしー」

「確かにそうっスね」

「うんー。でねー、その少なからずの好意がー、彼らの使う魅惑で勝手に増長されちゃってー、あっという間にメロメロになっちゃう

っていうわけー」

「……なるほど」

確かにそれに抗うのは難しいだろう。

好意なんてものは本人の意志に関わらず勝手に沸き上がって来るもので、殆どが無意識下の感情なのだ。それを消そうと思っても中々上手くいかないはず。

「対抗するにはー、惑わされなくらいの強固な意志とかが必要なわけなんだけどー。死学の生徒さんとかまだまだひよっ子だからー。難しいんだねー。」

……それであの講堂の惨事という結果か。激しく納得した。

しかし、なら何故私は大丈夫だったのだろうか？

私から見ても悪魔の容姿は綺麗だと思う。

首を傾げて考えるが……さっぱりわからない。

どこかに欠陥でもあるのだろうか？……何か有り得えなくもないのが悲しい。

「いやいやー、ヒイラギに欠陥があるとかじゃないからー」

私の思考を読んだかのようにタチバナさんが違う違うと手を振りながら言う。

……どうして考えていることが……いや、何も言つまい。相手はタチバナさんである。考えるだけ無駄なのだ。

「ヒイラギの場合はー、確かに綺麗なものは人並みに好きなんだろうけどー」

「……けど？」

「んー……多分それと同時にー、『だからどうした』っていう気持

ちも同じくらいあるみたいー。綺麗なものはそれなりに好きだけどー、興味もないー。簡単には見た目に惑わされないのだよー」

そうなのか。

欠陥品ではない事に酷く安心する私。

まあ確かに私は彼らを美形だなーとは思ったが、見るからに胡散臭く感じた。その上、実際に鼻血垂れみたいな輩もいたのだし……当然だろう。

いくら美形でも鼻血が付属されれば台なし、百年の恋も冷めるつものである。いや、恋なんぞしてないが。そしてその鼻血の原因は……まあ隅っこにでも置いておくのだ。私は悪くない。断じて悪くなどない。原因が何であれ鼻血は鼻血なのである。

「……まあそれだけじゃないんだけどー」

「……へ？」

「んー、まあそれはそのうち分かるからー……大変になると思うけどー、まあヒイラギなら大丈夫ー」

「……え？」

思案していた私にタチバナさんがポツリとそう言った。

それだけじゃないって？大変って何が？

今日の私は疑問符だらけである。

私の説明プリーズな様子に気がついてるだろうに、それ以上は答えるつもりがないらしいタチバナさんはそれを笑顔でスルーしながら話を変える。

「あと保健室の件だけどー」

彼女は一旦言葉を切り、私を見遣る。私の訳が分からないという訝し気な瞳とタチバナさんのこちらを探索するような瞳が合わさった。

そこからしばらく何も言わない彼女に不思議そうに首を傾げながら言葉を待つ私。どうしたというのだろうか？

待ち切れなくなって私が言葉を掛けようとしたその時、彼女は珍しく不適に笑った。

悪魔なんて目じゃない。そこらの男共を一気に魅了し、膝まつかせそうなその神々しいお姿。その、なんて言いますか、あれです……物凄く怖いです、はい。

「そこつてー、本当にヒイラギが目指してた部屋なのかなー……？」

……それってどういう意味だろうか？

まさかタチバナさんまで私が夢遊病者だと言うのだろうか？

はは、まさかぁ、まさかね。

……。

……。

「……私つてもしかして夜中、徘徊とかしちゃったりしてるん
スか……？」

「うふふー」

固まって問い掛ける私に意味深な笑みを向けるだけで何も言ってくれないタチバナさん。え、ちよいとそこは否定してください。

何だ？私は夜な夜な徘徊をしているのか？そして目覚めるときにはきちんとベッドに入っているのか？だから自分では気が付かないのか？

そうならば本当に私は自分が夜中、何をしているのか分からないということに。

……怖いな。

「あの、タチバナさん……」

「うふふー」

「私って徘徊癖とか……」

「うふふー」

「もしくは夢遊病とか……」

「うふふー」

「もういつそ両方とか……」

「うふふー」

「タチバナさ」

「うふふー」

私の問い掛けを全て「うふふー」の一言でスルーし、ご機嫌にスキップしながら自室へと消えるタチバナさん。

いくら問いただしても彼女はそれ以上何も答えてくれなかった。

011 殖え続ける悩みの種（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださいと有難いです
(
、
・
・

012 個人的な忍耐修行（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「……サカキ、私は夢遊病者で徘徊者かもしれない」

「今日は珍しく早く来たと思ったら何よ突然……ってか、恐ろしく暗いわね」

朝登校して、いの一番に私の口から出たのがその台詞だった。自分でも物凄く暗い顔をしているのがわかる。だって怖いではないか。今日は登校時間の計算どころではなかった、というか寝ると自分が何か仕出かすのではないかと一睡も出来なかったのだ。

クマを付属させた死んだ魚のような眼で時計をチラリと見ると始業15分前を針が指していた。普段では有り得ないことである。

「まさか昨日私が言った事を気にしてるの？あれ冗談だからね？」

「……………冗談……………」

彼女は冗談でこんな爆弾を落としてくれたというのか。

ごめんごめんと彼女は謝りながら今日も櫛を片手に私の寝癖を直してくれる。だが今更彼女が否定してもさして意味はない。彼女の知らない場所で発動している可能性も否めないのである。唯一私の夜中の様子を知るタチバナさんが否定してくれない限り私の夢遊病、徘徊説はバッチリ有効なのだ。タチバナさんは肯定をしてはいないが否定もしてはいない。まだどちらが正しいのかわからないのである。

私は席に着き、机に突っ伏した。

「それより今日は早速実習じゃない。ヒイラギはペア発表のときい

なかったけどちゃんと誰と組むか聞いた？」

「……聞いてないよ。ペアとか、ほんとどうでもいいし」

それより昨日から発生している問題の真実が知りたい。

因みに昨日私を苦しませたフェロモン酔いの問題は既に解決済みだ。拳で説得、つまり殴って脅してフェロモンなど出させなければ良い。只それだけだ。

男だろうが女だろうがそれは変わらない。私は男女差別などしない主義なのである。

いくら言葉が伝わらない奴だとしても拳は世界を越えても共通語なハズ。そう私は信じている。余計な言葉は要らない。全ては拳が語ってくれる。

「どうでもいいって……3年間一緒なのよ？代えられないのよ？」

ため息混じりで尚サカキが私に問いかけてくる。寝癖を直し終えたのかサカキは私の背後から隣にある彼女の席へと腰を下ろした。それを名残惜しく見送りながら先程の彼女の言葉を思い出す。

3年間か……確かに長い。どうでも良いといっても不快な奴とは流石に勘弁である。出来れば少し脅した程度で従ってくれる小心者が良いのだが……。

私の頭をふとよぎる昨日の不快な出来事、滴る赤い液体。無意識に苦虫を噛み潰したような顔になった。……アイツは絶対嫌だな。

「……んじゃ鼻血垂れ以外なら誰でも良い」
「誰よそれ」

首を傾げるサカキ。あれだけ派手にやったというのに、やはり彼女は気付いていなかったのか。

悪魔のフェロモンが凄いのか、はたまたサカキの周りが見えなく

なるほど美形に夢中になれることが凄いのか。

私が講堂を出たときの状態のままだったならばサカキの隣で間抜けに鼻血を垂らして転がっていたはずなのだが、流石に移動したのだるか。思い出すだけでも腹立たしい、あの性格、あの声、あの顔……顔………？

「……………黒髪に赤目の男」

「……………ねえ、それってわざと言ってるの？」

確かにそれではただ単に黒学の男子生徒と言っているようなものだ。

しかし、私の中であいつの顔など最早へのへのもべじ程度にしか記憶に残っていない。『べ』の半濁点部分は言わずもがな、鼻血である。

覚えていないものをどう説明しろと。

「あれ？イズミ先生」

まだ始業ベルが鳴る前だというのにイズミ先生が教室に入ってきたらしい。サカキが思わず呟く。

私は未だ机に突っ伏したままなので聞こえてくる声に耳を傾ける。

「皆さんいますか？ヒイラギは……いますね。じゃあ大丈夫ね」

いつもベルと共にピッタリと教室に入ってくる私がいるから大丈夫、皆いるだろう。言外にそう言っている言葉をイズミ先生が零す。我がクラスの生徒達は実に真面目だ。皆、始業開始20分前には教室にいますと以前サカキから聞いたことがある。対して私は本当にギリギリで到着するという事は周知の事実だ。

軽く皮肉を言われたような気がしないでもないが、スバリ当たっ

ているので私に異論はない。

「これからペアと合流して一緒に講堂に向かってもらいます。移動してからだと時間がかかるので……とりあえず皆さん着席してください。着席したら入ってもらいます」

イズミ先生の言葉に従いガタガタと着席するクラスメイト達。黒学の生徒と聞いてか、そこかしこでヒソヒソと話し声がし、浮足立っているのがわかる。

当然サカキも例外ではない。何やら纏う雰囲気がお花畑だ。ルンランランしている。……見なくとも分かるとか……ちよつと浮かれ過ぎではなかるうか。

「ねえねえ、黒学の生徒が直接ここに来るって……！」

「……っ！」

突然背中にジンジンと痛みが駆け巡り悶絶する私。

嬉しいのは結構なのだが私の背中をその怪力でバシバシと容赦なく叩くのは止めて欲しい。絶対背中が赤くなっていることだろう。

……後で覚えていやがれ、サカキ。

「……では入ってもらいます……くれぐれも惑わされないように」

どうやってサカキに仕返ししてやるうかと思考を巡らせていると、皆が着席したのを確認したイズミ先生がそう告げた。『くれぐれも』という部分がかかなり強調されていたが……まあ昨日の様子ではそうもなるだろう。イズミ先生の言葉が耳に入らなかったのか忠告を受けても生徒達は騒いでいる。

これはマズいんじゃないかるうか。

そう思ったときには前方からどす黒いオーラを感じた。空気がピ

リピリと張り詰めて肌を刺激する。……伏せていて良かった。彼女が今どんな表情をしているのか……。おお、想像しただけでも悪寒が。美人が凄むと迫力がハンパないというのは本当なのだ。

流石にイズミ先生の無言の圧力に気づき、慌てて黙り込む生徒達。その様子を見てイズミ先生は深い溜息をついた。それと同時に張り詰めていた空気が消える。……どうやらギリギリでお咎めは免れたようだ。

しんと静まった教室にガラガラと扉を開ける音が響いた。

「う……っ」

気持ち悪い。昨日と同じく吐き気が一気に込み上げ、慌てて鼻と口を両手で押さえる。

奴らはまたもや大量のフェロモンを撒き散らしているようだ。扉が開いた途端、フェロモンが一気に教室へと流れ込んだらしく私は一瞬にして気持ち悪くなってしまった。

油断していた私も悪いのだが、先ずはお前ら害あるものを撒き散らすなと声を大にして言いたい。こんなもの公害でしかないというのに。

拳で説得すれば良いとはいえ、それは一対一の場合である。それに今はイズミ先生が近くにいます。昨日は見逃してくれたが今日も見逃してくれるという保証はない。全員を殴るわけにもいかない。

考えた結果、私は伏せたまま耐え抜くことを選択した。この鬱憤は後で晴らすことにする。勿論、今から来るだろうペアに、だ。

肋骨3本くらいなら許されるだろうか？いや、許さなくてもやるけど。3本折れてもまだ半分以上残っているし、うん、大丈夫、問題ない。

ああでもないこうでもないと思さ晴らしの方法、基、ペアをボコする方法を考えて気を紛らわしながら私はじっと時が過ぎるのを待った。

012 個人的な忍耐修行（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださいと有難いです
(、・・)

013 全てを超越する者（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「キヤーツ！」

「ヤバイ、カッコイイ……っ！」

「あ、今私に手振ってくれた！」

「ちよつと違うつて、私にだってば！」

「^{ちげ}違い！俺だし！」

「はあ！？」

「あんたは黙つてなさいよ！」

あれだけイズミ先生が忠告したにも関わらず黒学の生徒が入室してきた途端に教室は色めき立った。何だ此処は。ライブ会場か？

アイドル並に熱烈な歓迎を受ける彼らは手を振っているらしい……ああ、苛々する。この疼く拳をさつさと解き放つてしまいたい。

私の様子なんてお構い無し……いや、寧ろ気付いてすらないクラスメイト達は続々と登場する美形集団を前にしてどんどんヒートアップしている。煩くてかなわない彼らの黄色い声は直接私の脳にガンガン響き、容赦なく頭痛を起こしてくれた。もう少し静にしてくれないだろうか……頭がかち割れそうだ。

「ちよつ、大丈夫？！」

机に伏せたまま口元を両手で覆い、顔色が恐らく真っ青であろう私に唯一気が付いたサカキが声を掛けてくれる。このフェロモン酔いを昨日話したおかげか今度はちゃんと気が付いてくれたようだ。

今、友情はフェロモンを越えた。感無量である。

私は大丈夫だという主旨を伝えるため、チラリと彼女を横目で見

た。

「大丈夫なの?!」

「……」

視線の先にいたのは、口では心配の意を表すくせに顔を真っ赤に染めて前方を凝視するサカキがいた。

やはり友情など恋の前……いや、フェロモンの前ではとても儚い存在のようだ。サカキの友情と書いて薄情と読むのだろうか。

……いや、分かっている。分かっているのだ。これは生理現象といっても過言でない事は。悪いのは悪魔どものフェロモンでサカキが悪いわけではない。……だが実際こうなると面白くないのも事実である。

私がジト目になるのを認めたサカキが慌てて弁解をする。

「や、ごめんっ！心配してるのよ!？」

……うむ、全く以って説得力がないな。

そのままじとーっと私はサカキを見る。しばらく「違っの」とか「体が勝手に」とか言い訳をばろぼろと零すサカキ。もういいやとまた机に突っ伏してそれをはいいいと聞き流していたら急にサカキが黙り込んだ。……虐め過ぎたか？

チラリとまた横目で隣を見ると、彼女は顔といわず全身を真っ赤にしたままボーっと呆けていた。

口が半開きだ。……飴でも放り込んでやろうか。

カバンに片手を突っ込み、手探りで飴玉を漁っているとふと気が付いた。そういえばあれだけ煩かった教室もいつの間にか静まり返っている。……何故だろうか。

私が疑問符を浮かべながら彼女を見ていると今度は呆けていた顔が驚きの表情に変わり、大きく目が見開かれていった。……こここ

る表情が変わって忙しいな、サカキ。

彼女の視線は先程からずっと前に向けられたままである。一体何に驚いたのだろうか。

……イズミ先生が変顔でもしたとか？

……。

……いやいや、まさか。

……。

……。

……何かドキドキしてきた。

是非に拝見したいです。

私は逸る^{はや}気持ちを押さえながらサカキの視線の先を追おうとゆっくり前を向いた。

「……あれ？」

目に映ったのは残念ながらイズミ先生の変顔ではなかった。寧ろ見えない。何も見えない。……何故か目の前に広がっているのは闇だけなのである。

眩暈が悪化したのだろうかと一瞬思ったが、体調はそこまで酷くないので直ぐ様違うと判断を下す。

原因は現在進行形で私の顔の上半分を覆っている何かだろう。

なんじゃこりやとカバンに突っ込んでいた右手をそれに持っていてき、ぺとつと触ってみた。冷たい。……これは手だろうか？

……手？何故に手？

所謂あれか？「だあゝれだ？」とか言って相手の目を塞いで自分が誰だか当てさせるやつか？

懐かしい。そういや幼少の頃はその遊びを何度も熱心にやったものだ。皺がまだそれほど刻まれていないつるつるな脳みそを懸命にフル回転させて考えたフェイントやら小細工やらを駆使して皆でフイーバーフイーバーしていた。今では何故飽きもせずあれだけやつ

ていたのか謎だが、まあそこは子供が故ということにしておく。子供が故。なんて便利な言葉だろうか。一種の免罪符のようだ。

そんな今となってはくだらない遊びがこちらの世界にも存在していたとは。別に驚く事はないが妙に感心してしまう。

しかしこの手の持ち主は誰であろうか？

このままでは何も出来ないので自らの手を動かし、これが誰の手か確認してみることにした。

当てたら何か奢ってもらおうかな――

「ちょっと！」

「離しなさいっ！」

「キヤーッ！」

「イヤーッ！」

……え、何事？

私を手を動かしした瞬間、何故か周りが騒がしくなった。頭にぐわんぐわん響いて意識が軽く遠退く。

あまりの騒がしさに手を離して触るのをやめてみた。……途端に先程までの騒がしさが嘘のように再び静寂が訪れる我が2・C教室。

……。

……。

もう一度触ってみた。

「キヤーッ！」

「イヤーッ！」

「その汚い手を離しなさい！」

「殺すわよっ！」

……わぁ。

頭にかなり響く。物凄い大合唱である。そして恐ろしく息がピッ

タリ…… お前ら仲良しさんだな。打ち合わせなんていつしたのだろうか。

悲鳴は死学の生徒、罵倒は聞いたことのない声なので黒学の生徒のものだろう。知りもしない奴に何故殺意が込められた罵倒を浴びせられるのかさっぱり分からない。触っただけで殺すとかどんなだよ。

そして何だ？ 悲鳴が出るとか、手だと思ったこれは実は手じゃないのか？ ゲテモノの部類なのか？ いつの間にだーれだ遊びから物当てクイズへ移行したのだろうか。

しかし、このままではちがあかない。悲鳴と罵倒の襲撃により頭はかち割れそうな勢いで痛いがここは無視して探ることにする。

…… なんだかゴツゴツ。そしてデカい。そろそろと辿っていくと長いものを5本確認することが出来た。

これはゲテモノではない。やはり明らかに手である。より詳しく言えば男の手。

その手が私を目隠し…… というよりは顔の半分を驚掴みしている。力はそれ程入っていないので痛くはないが…… これは何という技だっただろうか？

…… ああ、そうだ。あれだ。

「アイアンクローか」

「…… 相変わらず思考がぶっ飛んでいるな」

アハ体験でスッキリした拍子に思わず声に出してしまっていたらしい。売れっ子声優も顔負けな良い声で返事が返ってきた。

…… 気のせいではなければバタバタと人が倒れたような物音が幾つか聞こえた。マジかよ。凄えな。悩殺ボイスとはよく言うが、リアルに人が倒れるなんて聞いたことがない。

低くてよく通る音が私の鼓膜を振動させる…… 何だろう。何かこの声聞き覚えがあるような気がするのだが。そういえばこの手も知

っているような気がしないでもない。

「……治してやるのか？」

また私に話し掛けて来る心地好い声音。

あ、と思ったときにはあの忌ま忌ましいフェロモン酔いは跡形もなく消え去った後だった。

私はこの人を知っている——当然だ。

毒抜きをしてくれたその手は、用を終えたとばかりにスッと静かに離れていった。私の視界が徐々に開いていく。

「保健室のだきま……黒学の生徒さん」

……危ねえ。

うつかり抱きまくらと言っちゃった日にはどんな目に合うことか。想像力豊かな皆さんであれやこれやと噂は変な方向に向かうこと間違いないだろう。相手が悪すぎる。女の妬みや嫉妬……想像するだけでも面倒臭い事この上ない。

目の前には昨日保健室で会った超絶美形悪魔が無表情でこちらを見下ろしていた。

013 全てを超越する者（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださいと有難いです
,
(
,
.
.

014 支配と従属そして例外（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

いつの間にか静まり返った教室。

その中で視線は全て私の目の前にいる恐ろしく顔が整った黒学の生徒へ集まっていた。

その視線は様々だ。

顔を真っ赤にして呆けている死学の生徒達からは良い意味でこの世のものとは思えないものを見る視線を、頬を染めている黒学の生徒達からは崇拜するようなうつとりとした視線を――そして唯一ズミ先生だけが探るような視線を彼に向けていた。先生のその視線においては私にまで及んでいる。……え？何で？

彼に視線を戻すと、すっかり顔色が良くなった私を無表情で見下ろしていた。……この悪魔は何者なのだろうか。

ふと思ひ浮かぶ昨日考えた一つの説。私は若干心拍数を上げながらゆっくりと、だが着実に視線を下げていく。

……あつた。

視界には嫌味かという位やたらと長い足が2本入っている。どうやら幽霊ではないらしい。

そついや昨日見たときも足はバッチリ付いていたなと思い出しながら再び視線を彼の顔に戻す。

あまりにも整いすぎて造り物みたいなの顔は相変わらずの無表情だ。何を考えているかさっぱり分からない。

彼の正体は物凄く気になるが、そんなことより先ずはお礼を言わなければならない。お礼は先程の毒抜きをもらった事に対してのものである。今はイグランド在住で生粋の日本人とは言えなくなってしまうが、元日本人として仁義は忘れてはいけな

「……かたじけない」

……何だか武士のような言葉遣いになってしまった。日本人らしくとは思ったがこれでは日本人味が溢れすぎている。ついでに漢氣かんきも溢れてしまっている。きっと何だか知らんが現在進行形で張り詰めているこの空気のせいだ。

少し間を置いて「ああ」という短い返事が返ってきた。彼は細かいことは気にしない性質たちのようだ。良かった。

そんな彼を見つつ、先程毒気を抜いてもらったおかげで体調がすこぶる良くなった私はへらりと笑う。悪魔は嫌な奴らだが、皆が皆そうではないらしい。今の所この目の前にいる悪魔は良い奴だというのが現時点での私の見解である。何せ2回も助けてくれたのだ。そうやってただ笑っただけなのだが私を彼はイズミ先生と同様、探るように目を細めて見てきた。

え、何？間抜け面が見るにも耐えなかったのか？……だったら少しショックなのだが。

そんな私を他所に教室中の視線を集めている彼はゆっくりと口を開く。

「お前がヒイラギか？」

名前を尋ねられた……というよりは確認をされてしまった。

彼の予想外な投げ掛けに私は驚いて目をぱちぱちさせる。

昨日名乗った記憶はない。それなのに何故私の名前を知っているのだろうか？

「ヒイラギですけれども」

取り敢えず返事を返しておく。私は確かにヒイラギだ。サトウさんでもスズキさんでもない。

私の返事を聞いた彼は「そうか」と呟いたまま私をじっと見つめて動こうとしない。

彼は一体何がしたいのだろうか。

読心術スキルなんてものを習得してない私には彼が考えていることなど分かるはずがない。言いたいことがあるならさっさと吐いて欲しい。

全く理解できない彼の行動に私は首を傾げ、無意識に眉を顰^{ひそ}めた。一方、教室は我に返った生徒がちらほら出てきたらしく、少しザワザワとしている。そして今にも射殺すとはかりの鋭い視線が私に向けられていた。黒学の女子全員と黒学の男子の半数ほどが私を睨みながら静かに言葉を投げ付けて来る。

――何、あの女

――調子に乗んじゃねえよ

――何であんな女に

――キリユウ様に近づくな

キリユウとは私の目の前に立っているこの黒学の生徒の事だろうか？

ちよつと触れて言葉を交わしただけで一気に狂気とも言える程の嫉妬を向けられるとか、ほんと何者なんですか。様付けなんてされちゃってるし。

私は彼をじっと見た。

寸分の狂いもなく整っている顔に装飾されている赤い瞳が私の平凡顔に付属されている明るい茶色の瞳とかち合う。視界の端にはサラサラと流れる襟足が少し長めの艶のある黒い髪……いつも寝癖をそのままにしている私の髪とは大違いだ。そして肌は白い。そういやサカキが色白の悪魔は珍しいと言っていたような気がする。

私は彼から視線を外し、ぐるりとクラスを見回した。クラスに入ってきた悪魔の中でその部類に入るのはどうやら彼だけのようであ

る。他の黒学の生徒の肌は色の濃さこそ疎^{まば}らだが、皆揃って色黒さんだ。

彼に視線を戻すと昨日とは若干違和感を覚えた。何となしに見ていると服装が違う事に気が付く。昨日とは違い、彼は黒学指定のブレザーを着ているのだ。

少し着崩された黒いブレザーには赤色のラインが入っていた。年齢までは流石に分からないが、どうやら彼は私と同じ学年だということが判明した。まあそうでなければ彼が今このクラスにいる理由が分からない。

「ヒイラギ」

無遠慮にしげしげと観察していると突然イズミ先生が私を呼んだ。考え事をしていたところへ急に名前呼ばれたので反応が遅れる。私は返事を返すのを忘れたままイズミ先生を見た。

イズミ先生はそんな私の様子を気にすることもなく言葉を淡々と続ける。

「彼は2年D組のキリュウ……あなたのパートナーです」

ああ、そうかこの人が私のパートナーか。

……。

……… パートナー？

私は思わず彼を二度見してしまった。

014 支配と従属そして例外（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(. . .)

015 最適で不適なパートナー（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

『あなたのパートナーです』

先生がそう告げた瞬間、教室の騒がしさが最高潮に達した。

もう完全猫を取っ払った黒学の生徒の中傷と死学の生徒の羨ましがる声が教室中に飛び交う。煩い。もの凄く煩い。そしてお前らやつぱり仲良いな。息がピッタリだ。……ところでさっき私の事を豚と呼んだ奴、後で覚えてろ。最近体重が少しばかり増加中な私は現在非常にデリケートなのだ。

そういえばいつも煩いサカキの声がしない。先程の悩殺ボイスでやられてしまったのだろうか。そう思っ隣を見ると彼女はキリウさんと私を交互に見ながら鯉のように口をパクパクさせていた。彼女は何か生き残っていたようだ。そしてどうやらこのあまりの展開に追って行けてないらしい。……気持ちはよく分かる。本人ですら追って行けてないし。

視線を戻すと綺麗な赤い瞳と合った。

あれ、もしかしなくともずっと見られていたのだろうか。……その行為は信者共を煽るだけなので是非とも止めて頂きたいのだけども。しかし彼はそんなことこれっぽっちも考えてはいないのだろう。視線が外れる様子はない。

そついや彼、キリウさんは顔と合致はしていないようだったが私の名前を知っていた。昨日のペア発表のとき彼は私と同じく保健室にいたのに。前もって自分のペアを先生にでも聞いたのだろうか。それに対して私は顔どころか名前すら知らなかった訳なのだが。ペアなんてどうでも良いと思っていたが、まさか彼だったとは……。拳で語る必要はもうなさそうだ。実習は思ったよりスムーズにいき

そうなので思わず頬が緩む。

「えーと、ヒイラギです。宜しく願いします。……………キリュウ、さん？」

「……………ああ。呼び捨てで良い。敬語も使うな」

呼び捨て御所望とは、彼は見た目に寄らず気さくなようだ。

少し上から目線な物言いをするので、何処ぞのお坊ちゃんなのだろうかと少し考えたが、まあ今はどうでも良い。細かいところは気にしないでおこう。話を通じるというだけで私は他に何も言うまい。先程彼から得た『呼び捨て』と『敬語なし』の許可は気を使わなくて良いから私はOKなのだが、それを聞いた黒学の生徒はそうもいかないらしい。私に向ける彼らの睨みや中傷が更にキツくなった。うわぁ、うるさ……………また私を豚と言った奴、明日の朝日を拝めなくしてやろうか。

「そか。んじゃ改めて宜しく、キリュウ」

「……………ああ」

取り敢えず周りは無視してこれから3年間お世話になる彼に挨拶をしておいた。思ってもみなかった言葉が返ってきたので少し驚いたが、意外と気さくな彼とはうまくやっていけそうなので安堵する。話を通じる相手って本当に良い。

そんな私たちを見ていた黒学の生徒達からは遠慮なく中傷やらなんやらを私へと投げ続けられている。……………だから何なんだお前は。どうやらキリュウは過激な信者を沢山お連れのようだ。

私がウンザリしていると不意にキリュウが顔だけ振り返り、彼らに一瞥をくれた。こちらから彼の表情は窺えないが、息を呑む生徒達の様子が見える。

さながら飼い主に叱られた犬状態である。あれだけ騒がしかった

信者共が一瞬で黙りこくった。凄え。心なしか彼らの頭と尻に垂れた耳と尻尾が見える。……何だか少し可哀相になつてき………いやいや、私を豚と呼んだ奴らだ。情けなど無用である。

わんこ信者共は崇拜するキリユウに従順なようで、まだ文句を言い足りないと言いた気な物凄く悔しそうな顔を私に向けていたが、口をつぐんでもう言葉を発する事はない。怨みをしこたま込めた視線が私に突き刺さるだけだ。

キリユウはそれを見届けて、またこちらを向く。

「……言っておくがお前の為ではない」

「ああ、うん。知ってる」

何せベッドに運んでくれた理由が邪魔だったから、だ。それに彼が止める義理もない。只単に煩くて耳障りだった為にわんこ信者共を止めたことは分かっていた。

しかし私も彼と同じく煩いと感じていたので助かった事には変わらない。

「でもありがとう」

当然礼は言うべきと思い言ったのだが、彼は少し驚いた表情を見せた。

「結果的には助かったし」と漏らせれば彼は少し間が空いた後「そうか」と呟いたので私はまたへらりと笑う。

「……はい、では皆さんペアになりましたね。では一旦講堂へ移動してください。そこで今回の実習について説明があります」

今まで黙って事の成り行きを見ていたイズミ先生はクラスが落ちていたのを見計らい声を掛けた。一瞬目が合った気がするが、直ぐ

にそらされ、そのまま彼女は教室を出て行く。……知らぬ間に何か悪い事でもしてかしたのか、私。

「……ヒイラギ、大丈夫？」

うーんと唸っていたら隣からサカキが心配そうに声を掛けてきた。大丈夫とは嫉妬やらなんやらで針の筵状態むしろになっている事だろうか？それとも体調の事だろうか？

どっちにしる大丈夫だ。毒気はキリユウに抜いてもらったし、私は自他共に認める図太さを持っている。嫉妬やは面倒臭いが、生憎傷つくようなハートなんて持ち合わせてはいないのだ。

「大じょ……………」

うぶ。

私は最後までその言葉を口に出ることが出来なかった。そのまま固まる私をサカキがひょっこり覗き込んでくる。

「ヒイラギ？……物凄い顔になってるわよ？」

「……………デメエ」

そりゃ物凄い顔にもなる。

私は今苦虫を噛み潰したような表情をしていることだろう。

「え、あ！お前……………っ！！」

今まで口元を手で覆って机に突っ伏していたので私も相手も気が付かなかったらしい。

私が睨んでいると、今相手も私が誰だか気が付いたようでこちらを指差して驚いている。

サカキの後ろにはあの鼻血垂れ、へのへのもべじ野郎が立っていたのだ。

「え？何？ヒムロ君と知り合い？」

「いや、全然」

「おま」

「全く」

何か言おうとした鼻血垂れに被せて言う。耳障りなその声なんぞ聞きたくない。

名前も知らない。知りたくもない。

私は今しがた聞こえた奴の名前を脳細胞から即デリートした。

こんな奴『鼻血垂れ』、もしくは『へのへのもべじ野郎』で十分である。というか呼び名があるだけ奇跡なのである。

こんな奴がサカキの後ろに突っ立っていると目障りで仕方がない。

……。

……ちよつとまで。

何か凄く嫌な予感がする。

「……サカキ、まさかコイツって……」

最後まで言い切れない私を不思議そうに見つめるサカキ。

その先は言いたくない。多分当っているけど言いたくない。そして聞きたくない。

そんな私の心情なんて知らないサカキが可愛く首をかしげながらあつさりと言ってくれた。

「私のパートナーよ？」

..... やっぱりかつ。
私は思わず頭を抱えた。

016 慮外千万鴨葱ペア（前書き）

少しばかりの流血表現があります。本当に少しばかりですが。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

よりによって鼻血垂れ……。

確かに私のパートナーはコイツではなかった。それはとても喜ばしい。

だがしかし、だからといってサカキのパートナーで良いとも思わない。コイツは最低な野郎だ。そんなやつが友達のパートナーだなんて受け入れられるものか。

今思い出しても腹立たしいことこの上ない。蹴りは入れたが私としては本来あれくらいじゃ足りないくらいなのだ。それこそ顔の原形が分からなくなるまでぶっ飛ばしたいくらいなのに。

震える拳を何とか押さえ、私はサカキに聞こえないよう奴に近づき、少しばかりドスを効かせた声で奴に優しく忠告をしておいた。

「……テメエ、サカキに何かしてみる。次は鼻だけで済むと思うなよ……全身血まみれにしてやる」

「……っ……やれるもんなら」

私の忠告に一瞬怯んだもののすぐに立て直し、いっちょ前に挑発をしてきやがった。

ちょ、生意気。鼻血垂れのくせに生意気。この馬鹿に分からせる為にはやはり圧倒的な力の差というものを叩き付けなければならぬらしい。

私は半目で指を順にパキパキと鳴らしていき、仕上げに首も傾げて一発バキッと小気味よい音を鳴らす。準備運動完了だ。

その様子を見た鼻血垂れは慌ててサカキの肩に腕を回した。うわ、人質取るとか卑怯臭い。これでは中々手を出せないではないか。

鼻血垂れのそのいきなりの行動にサカキは顔を真っ赤にしておた
わたしている。こら、目を覚ませサカキっ。

手を出さない私を見て鼻血垂れは口に嫌な笑みを浮かべながらサ
カキの耳元で囁いた。

「ねえ、サカキさん……ああ、さん付けっていつのもよそよしい
よね。パートナーなんだし。サカキって呼んで良い？」

「えっ、あつ、構わないけど……っ」

「サカっ……っ！」

今正にサカキは奴の毒牙にかかっている。……サカキさん、いく
ら何でも簡単に攻略され過ぎやしませんかね？

口を開いてサカキを止めようと思ったのだが鼻血垂れがフェロモ
ンを振り撒きやがったらしく吐き気が込み上げ、私はとっさに両手
で口元を塞いだ。小癩こしゃくな真似を……後であれだ、サンドバッグ。そ
う、サンドバッグのごとき拳を叩き込んでくれる。

鼻血垂れは私がそのようなことを考えているとは露知らず。サカ
キを盾にすると私が手出し出来ない。そしてサカキはちよるい。そ
の2つを知り、奴は私の最大の弱みを握ったつもりになっているの
だろう。余裕な表情でサカキを口説き落としていく。

「サカキって美人だよね」

「えっ!？」

「反応も可愛いし」

「へっ!？」

表面上甘ったるい笑顔をサカキに向け、砂を吐きそうな台詞がポ
ンポンと奴の口から出てくる。聞いているこっちはもう耳からも砂
が溢れ出そうな勢いだ。

イケメンは何をやっても様になると聞いたことがあるが、あれは

真っ赤な嘘だ。目の前のコイツは一応イケメンの部類に属するが、何をやっても薄ら寒く感じられる。ここは最早極寒地帯と化した。コート、誰かコートをおくれ。

こんな鳥肌モノな、そしてテンプレな口説き方をされているというのにサカキはもうノックアウト寸前らしく、湯気が出そうな勢いで顔が真っ赤だ。この純情少女はイケメンにとことん弱いのだな。こんな鼻血垂れでもサカキフィルターにかかるとしつかり良い男に映ってしまうらしい。サカキフィルター、凄すぎる。

私が変な所に感心していると鼻血垂れがスツとサカキの腰に手を回した。それを見た私は頭の中の何かがブチ切れ口元を押さえていた手を離し、振り上げる。このとき、フェロモンの事など頭から吹き飛んでいた。

私の拳が奴の顔面に減^めり込む直前

「キヤーツ！」

サカキの張り手が奴の顔面を直撃した。

どすこい。

私の脳内に某格闘ゲームのSEが木霊^{こだま}した。

正にお相撲さんバリな見事な張り手である。いや、お相撲さん以上に見事な張り手である。

鼻血垂れは予想もしていなかった攻撃に受け身も取れず、まともに喰らったようだ。

サカキの張り手が決まった瞬間、奴の身体は宙に浮き、そのまま机と椅子を幾つか薙ぎ倒しながら教室の隅まで吹き飛ばされ、壁へ強かに叩き付けられた。昨日は床で今日は壁。奴は見る度、何処かしらに張り付いている。その様を見ていると窓に張り付くヤモリを思い出した。

……そういえば先程首が変な方向に曲がっていた気がするが生きているのだろうか？

「え、あれ？ヒムロ君！？どうしたの！？大丈夫！？」

サカキが慌てて駆け寄り、呼び名に相応しく大量の鼻血を垂れ流している奴を力の限りガクガクと揺さぶっている。容赦のないそれは私の目にはトドメを刺している様にしか見えない。出血量は増加の一方を辿っている。いいぞ、やれ。もっとやれ。

しかも『どうしたの』と言っている彼女の様子からどうやら自分の所業ではないかと思っっているようだ。自分の張り手が決まったことすら気付いていなかったというのだろうか……恐ろしい娘。

耳を澄ますと蚊の鳴くような声で「やめ……っ」「死ぬ……っ」と聞こえてきているのでどうやら死んではないようだ。正にゴキ並な生命力である。殺虫剤なら効くかもしれない。是非とも今度は用意しておこう。

それにしても良い飛び具合だった。馬鹿力だとは兼ね兼ね思っていたがまさかここまでとは。壁がなかったら何処まで飛距離を稼いでいただろう。兎にも角にも私が直々に手を出す必要は全くなかったようだ。ビバ、純情。ビバ、馬鹿力。つまりはビバ、サカキ。

やはり心配は無用であった。

瀕死な鼻血垂れを見て一人満足していると視界がぐるりと回転した。フェロモンをまともに喰らったせいだ。私は踏ん張り切れずそのまま床に崩れる。

ああ、情けない。

016 慮外千万鴨葱ペア（後書き）

誤字・脱字などあれば報告してくださいと有難いです
、
（
、
・
・

017 藪から棒な予防法（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

廊下に出て長い螺旋階段を上り講堂を目指す。全クラスが同じ行動をとっているのでぎゅうぎゅう詰めになるかと思われたが私たちの前方はポツカリと道が出来ていた。リアルモーゼの奇跡なるものを私は初めて見た。この分だとラブレターは勿論、バレンタインにはリアルに下駄箱からチョコがどさどさと出てきて足元に小山を作るに違いない。是非に見てみたいものである。まあこの世界にバレンタインなんてものは存在しないのだが。

——そんなことをいついつい考えて思考を散らす。面倒臭い、とても面倒臭い事態になった。

今私は周りの殺意と好奇の眼差しを一身に浴びながらユサユサと揺られている。目の前に映る上り終えた階段が次々と流れては視界の端に消えていく。目線を変えると広い背中が逆さまに映った……どうしてこんな事に。

現状をズバリ言ってしまうと、私は今キリュウ氏に担がれている……言葉通り米俵のごとく肩に担がれているのだ。

何故こんな おかしな 状況になっているかという、話は10分程前に遡る

さかのぼ

「……またか」

「……申し訳ない」

教室でフェロモン酔いが悪化し床に崩れた後、今まで傍観に徹していたキリュウが面倒臭そうに後ろから声を掛けてきた。私が身体

を拭^{よじ}って後ろを振り返り彼を仰ぎ見ると予想通りどこかつたるような空気を醸^{かも}し出している彼の姿が映る。

まあ、そうもなるだろう。つい先程毒抜きをしてもらったのにまたこの有様だ。面倒臭いパートナーで本当申し訳ない。……いやいや、よく考えたらお互い様ではないか？ 私はわんこ信者共から理不尽な仕打ちを受けているわけだし。

一人で自問自答していると私の頭にぽんと手が置かれた。吐き気やらがみるみるうちに失くなっていくのがわかる。空気清浄器の様な魔法の手……私も欲しい。

「ありがとうございます」

「……気をつける」

仕事を終えて私の頭から去っていく彼の手を見送りながらお礼の言葉を述べると、お礼に対して初めて「ああ」以外の言葉が返ってきた。やはり一々毒抜きをするのは面倒臭いのだろう。はい、気をつけますとも。

しかしフェロモンは色が着いているわけではないので視覚で察知出来るものではない。吐き気がして初めてフェロモンが撒かれている事が分かるのだ。そんな状態でどう対処できるというのか。

「移動しないのか」

やはり物理学的に無理ではないだろうかと結論を出したところへキリウが声を掛けてきた。そういえば実習の説明を授けるため講堂に移動しなければならぬ。サカキを見るとまだ鼻血が止まらないらしい瀕死状態の鼻血垂れに付き添っていた。そんな奴放っておけば良いのにサカキはパートナーだからそんな訳にはいかなんと言う。……ペアって面倒臭いな。

仕方ないので私はキリウと二人で先に講堂に向かうことにした。

彼女の事は先生に伝えておけば良いだろう。

教室を一步出ればササツと全員が道を譲り人垣が開いていく。そこへ「マジか」と引き攣った顔で言葉を一つだけ零し、足を踏み入れていった。

私はその原因である超絶美形を見上げた。このVIP待遇をさも当然だと言わんばかりに気にすることもなく歩いている。私は物凄く嫌なのだが。

彼は無表情ではあるが何処か気怠げな空気を纏いつつ階段を上っている……一段飛ばしで。嫌味なくらいに長いそのコンパスをちよつと分けてはくれないだろうか。日本人には羨ましい限りなその足をじとーつと見ながら私はちょこまかと忙しく足を動かし、一段一段階段を上っていく。これは軽く筋トレになりそ――

「遅い」

「……タツパが違えばコンパスも違うのだよ」

敢えて自分が短足だとは言わない。意地でも言うものか。

キリユウが立ち止まり、振り返って零したその言葉について言い返してしまう。その瞬間周りから物凄い殺意が込められた視線がぐさぐさと私を貫いていた。何故か集中砲火を浴びているが私は悪くない。どう考えてもキリユウが悪い。でもそれを言うとなりの過激な皆さんがヒートアップされるのが見て取れるので口には出さない。

パートナーが話の通じる相手なのは良いが、こつも周りの反感を買ってしまうと微妙な気がしてきた。プラマイゼロといったところか。まあマイナスよりは良いのだが。

また前を向いて階段を上っていくキリユウの後ろをとことこと追

いていく。……心持ち速度が下がった気がした。
やはり良い奴ではあるようだ。

「……うぐっ」

「……」

また急に吐き気が込み上げフェロモンが撒かれたことを悟る。両手で口元を覆い、立ち止まる私。きつと私を自分に引き付けてキリユウから引き離そうとでも考えたのだらう。……もう嫌だコイツら。どんだけキリユウ大好きなんだよ。

キリユウもそんな私の様子が気が付き、立ち止まって振り返る。……いや、そんな目を向けられても。やはり無理なものは無理なのだ。解決策を見出せる気がしない。

私は体重を支えるのも辛くなり壁に身体を預けながらキリユウに言った。

「……ごめん、先行ってて」

「……」

私の言葉を聞いたキリユウは黙ったまま眉間に皺を寄せた。……何でだ。

そしてそのままこちらへゆっくりと近づいて来る。いや、先に行ってくれと言っただらう。毒抜きをしてもらってもまた同じ事が繰り返されるのは想像に容易い。それだったらいつそのこと拳で語った方が手っ取り早いと思った故の発言だった。

「えっ」

いきなりの浮遊感。ふわりと身体が宙に浮いた。そして次の瞬間には私の腹部に圧迫感が襲った。「んえっ」と女としてどうかと思

われる奇声を上げてしまったが仕方ないだろう。奇襲に対して可愛らしく悲鳴を上げられる女の子は少数だと私は思っている。……いや、今そんなことはどうでも良いのだ。

私は混乱しつつも状況把握に努めた。何だ？何が起こった？

「……」

しばし私の時間が止まる。

私は目の前に広がる広い背中を見て全てを悟った。自分、もしかなくとも、わっしょい担がれていやしませんか。

キリユウに。

「……あー……キリユウ？」

「この方が手っ取り早い」

何が何だか分からないが取り敢えず話し掛けると淡々とした返事が返ってきた。

いや、確かにそうだけれども。キリユウの手はずっと私に触れているので、もうフェロモン酔いに悩まされる事はない。

……しかしだな。

「……担ぐ必要ないよね？」

ないだろ。

腕でもなんでも掴んでくれれば解決するのだ。

彼の理解出来ない行動に疑問を投げ掛けた。

私のその疑問に対して返ってきた彼の答えは至極簡単であった。

「この方が早く着く」

……はいはい、足短くてごめんなさいねっ。

私はもう色々諦め身体力を抜いた。ダラリと伸びる私の身体を軽々と担いだまま歩き始めたキリユウ。重くないのだろうか？重いと言われ現実を突き付けられたら大ダメージを喰らってしまうので聞かないけれども。

キリユウは見た目は細そうに見えるのに筋肉はしっかり付いているようだ。流石男だけはある。

しかしその逞しい筋肉を所有しているのならこの扱いは如何なものか。私は一応これでも女だ。これはない。この担ぎ方はナシだろ。こう、もつと格調高くお姫様抱つことか……。

「……」

ないな。ナシだ。前言撤回だ。

お姫様抱っこをされる自分を想像して盛大に眉間に皺を刻む私。有り得ない。いや、本当に有り得ない。

そしてあれこれ馬鹿なことを考えている所で冒頭へと戻る。

017 藪から棒な予防法（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(・ ・ ・)

018 真相解明に伴う無罪放免（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

キリユウの肩に担がれ2人共無言のままユサユサ揺られ続けている私。後どれくらいで着くのだろうか。

私の腹にキリユウの肩が食い込んで結構苦しいわけだが今はそんなことを気にしている場合ではない。一度は諦めたがやはりこの曝しものになっている現状を打破しなければ――

――そう考えているうちに到着してしまった。

我が21C教室から講堂までのこの道程は兼ね兼ね長いと思っていたが、今日ほど早く着いてほしいと思ったことはなかった。まあ彼の存在感と長い足の効力で思ったよりかなり早く目的地に着いたわけだが。

講堂にはちらほら着席している生徒たちがいた。そこへ足を踏み入れた瞬間彼らから殺意と好奇の視線が向けられ私に突き刺さる。私の身体はもう穴だらけだ。蜂の巣状態だ。……何かもうそれらの視線にはこの短時間で慣れてしまった。

キリユウは講堂に入ると入り口から反対に位置する一番後ろの席に私を下ろした。次いで自らも私の隣へ座る。

やっと足を地に付けることが出来た。私は担がれた事によって地味にダメージを受けた腹を摩りながら安堵の溜息を吐く。頭に上っていた血が下がり暫しボケーっとしていた。

キリユウと出会ってからの二日、とても濃い時間を過ごしている気がする。まだ2日なのに……これからの3年間が物凄く長く思えた。

フェロモン酔いに抱きまくら事件。あれはやらかしてしまっただな
と思ったが彼は気にしていないのだろうか。……できれば記憶から
消し去って欲しい。これからもどんどん問題は増えていくのだろうか？
まさかの夢遊病説まで上がってしまったし。……夢遊病？
そこでふと思い付いた。保健室の謎。あれはキリユウに聞けば解
決するのではなからうか。何せ彼も保健室にいたのだ。私が寝てい
るとき私がどうしていたのか尋ねれば良い。

「キリユウ」

「ヒイラギ」

それだ、と意気込んで尋ねようと彼を呼んだのだが同時に彼も私
を呼んだ。変な沈黙が二人の間に流れる。こういう空気って妙に気
まずい。

「……お先どうぞ」

やはり私は憤み深き日本人。保健室の事は物凄く気になるが発言
権を彼に譲ることにした。

彼は私から発言権を渡され先に私へ質問を投げ掛ける。

「……昨日何故あの場所に来れた？」

あの場所とは保健室の事だろうか？どうやら彼は私と同じく保健
室の事で気になっていることがあるようだ。……それにしても『来
れた』とはどういう意味だろうか？私はこの生徒だ。しかも2年
生。よっぽどの方向音痴でなければ単純な造りのこの校舎で迷うは
ズがない。

私がどう答えていいものか分からず首を傾げていると彼は私にち
ゃんと通じていないことが分かったのか、キリユウが補足をする。

「あれは黒学の保健室だ」

「……え？」

黒学の？

どういうことだ。

全く意味が分からない。混乱する私を他所に彼の説明は続く。

「昨日俺がここの保健室と黒学の保健室の空間を繋げた。入っても俺以外は普段通りここの保健室に着くよう細工をして、だ。俺と同じく空間魔法を使い、更に仕掛けた罠を潜らなければ黒学の保健室へ来ることはできなかったはずだった。……だがお前は何でもないかのように黒学の方に来た」

わあ、凄え。キリユウがいつぱい喋っちゃってる。ちょっと感動……じゃなくて。

なんと。

驚きの真実が判明した。

昨日の保健室での出来事を思い出してみる。そういや彼は『何故ここにいる』と私に言っていた。あの質問は入れるはずのない場所に何故私がいるのかという意味だったらしい。

あの時は死学の保健室だと信じて疑わなかった、というより別の部屋だとは考えもしなかった。知らぬ間に黒学の保健室に飛ばされていたのか。ということはあの素敵寝具は黒学の……。

ガックリ肩を落とす私を見つめたままキリユウは更に続ける。

「……そして俺が出て行く前、繋げていた空間を切った。扉を開ければ普通は黒学の廊下に出る。……だがお前はまた死学へと帰って行った。空間魔法は悪魔と天使にしか使えない。死神には使えないはず………お前は一体何をした？」

私を深く探ろうとする赤い瞳。
それを綺麗だなと見つめながら私は答えた。

「いや、別に何も」
「……」

キリュウの目が細まる。どうやら疑っているようだ。
そんな目をされても何も答えられない。だって本当の事だし。
私はそのまま言葉を続ける。

「扉を開けたら勝手にそこに辿り着いただけだよ。今キリュウに言われて初めて黒学の保健室だったって知ったし」

「……本当に何もしていないのか？」

「うん」
「……そうか」

まだ納得してなさそうだったが諦めたのかキリュウはそれきり質問をして来なくなった。私の言葉に嘘は一つもないのだが。あの時は体調が最悪で只安息の地、ベッドを求めていただけだ。

「……」
「……待て。待てよ？」

私が黒学の保健室に行っていたならば、サカキと鉢合わせしなかったのはそのせいではないか。私は黒学の、彼女は死学の保健室に居たのだから。

すれ違いでも何でも無い。場所自体が違うのだから会えるはずがなかったのだ。

「……希望が見えたぞ。」

「……キリュウ、私って寝てる間歩いたりしてた？」

「いや。寝言なら言っていたが」

その言葉を聞いた私は無言で両手の拳を天高く突き上げた。
さよなら夢遊病説つ。

おめでとう、私つ。

私の夢遊病説はかなり白に近づいた。当事者が違うと言ったのだ。
この発言の効力はかなり高い。

タチバナさんのあの反応は今でもよくわからないが……今日帰っ
たらもう一度問いただしてみよう。

……しかしまた一つ問題が浮上しなかったか？
寝言って何言っただ、私。

018 真相解明に伴う無罪放免（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

019 眠りへ誘う魔法の手（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

夢遊病説がほぼ白に染まり、安心した私は机にだらりと伸びた。一気に眠気が私を襲い、瞼が鉛のように重くなる。そっぴや昨日は寝られなかったのだった。

私はそれに逆らう事もせず目を閉じた。もう寝言とかどうでも良い。どうせどうでもいい事を喋ったのだろう。そんな事より今は睡眠を取る方が大事なのである。

私の大好きなまどろみの時間。うとうととその幸せな時間を堪能していた。

……うん、やっぱり良いね。寝られるって幸福な事だ。

「うぐ……っ」

幸せを堪能していた私は突如盛大に眉間に皺を寄せる。……誰だ。私の憩いの時間を邪魔しやがったのは。

吐き気と頭痛。原因はあの憎きフェロモンである。

私のこの幸せな時間を邪魔するなんて絶対ただでは済まさない。私はその愚か者の顔を脳内に刻み込む為、顔を上げようとした。しかし不意に頭にかかってきた心地良い重みにそれは叶わなかった。

「寝てろ」

隣から聞こえるキリュウの声。何処か安心するその声に逆らわず、私は身体力を抜いた。吐き気と頭痛はもうない。あの魔法の手が毒抜きしてくれたのだ。

残ったのは眠気と心地好い重みだけだ。最初はぼんと乗っかっていただけのそれは今では何故か頭をゆっくり撫でている。……何これ、ヤバイ、気持ちいい。

先程まで私の中を蠢いていた殺意は跡形もなく消え去った。代わりに訪れる強烈な眠気。

私はその手に誘われるように素直に意識を手放した。

黒学の生徒と教師が驚愕の表情でこちらを見ていたのだが眠っている私は知るはずもなく、ただゆらゆらと揺れるような心地良い波にのまれていた。

「そろそろ起きろ」

「……んあ？」

間抜けな声を発しながら私は眠りから覚めた。顔を上げると超絶美形の顔が視界に入る。……寝起き様にこの顔は駄目だ。眩しくて目がちかちかする。

私は目をしばたかせながら口元に手をやった。……よし、今回は垂れてない。

セーフセーフと安堵しているとやけに静かな周りに気が付く。不思議に思い見回してみるとそこはもぬけの殻となっていた。広い講堂内に寂しくポツンと二人だけ座っている私とキリユウ……何故？ 皆は？ というか今何時だ？

部屋中央に鎖に繋がれ垂れ下がっている大きな水晶玉を見る。時計である。この時計はどの角度から見てもちゃんと針が見えるスグレモノだ。構造はよく分からないが恐らく魔法が施されているのだろう。魔法って本当に便利。

因みに時間軸、季節なども不思議なことに日本と同じ。こちらとしては大変助かる。太陽らしきものも月らしきものもちゃんとある

のだ。此処も太陽系と同じ様な構成をしているのかもしれない。全く違うところといえば西から上って東へ沈むということだけだ。某アニメソングと同じである。自転が逆なのだろうか？

そんなことを考えながらぼーっと時計を見ると針は12時40分を指していた。12時40分………12時？

「……昼？」

「ああ」

私が思わず呟いた言葉にキリユウが肯定の言葉を零す。マジか。昼か。寝始めたのが9時頃だったから3時間半ほど私は眠っていたことになる。ちよいと寝過ぎたかもしれない。

此処に誰も居ないのは昼食を食べに行ったからであろう。

「……実習」

眠っていたので何も聞いていないし何もしていない。もしかして寝ている間に終わってしまったのだろうか。

「……13時からだ。5分前に第二塔校門前に集合」

まあ良いかと思っていたらキリユウが隣から淡々と答えてくれた。

……何だ終わっていないかったのか。面倒臭い。

この講堂に現在私以外で唯一いるキリユウに目を遣る。彼は私が起きるまでずっと待っていてくれていたのだろうか？別に放っておいても良かったのに。

そこでふと頭に思い浮かぶ朝聞いたサカキの言葉。

パートナーだから？別行動は良くないと？……ペアってホントに面倒臭いものだと思う。

まあ何にせよ私はまた彼に迷惑をかけてしまったようだ。

「ごめん、キリユウ。迷惑かけた。……あ、ご飯食べた？」

「……いや、俺はいらない」

「何で？」

思わず首を傾げて尋ねる。

昼食を抜くとは不健康な。健康の為に出来る限り三食きちんと取るべきだ。

まさかキリユウが色白なのは不健康だからなのか？……それはないか。

……。

……昼ご飯をケチらなければならぬくらい貧乏だとか？

「……悪魔は基本的に食事を取らなくても大丈夫だ」

私の考えていることが分かるのだろうか。キリユウは若干怪訝な表情でそう言った。

思わず読心術のスキルがあるのではないかと疑ってしまう。

「……言っておくが心は読めんぞ」

「……いや、あるだろ。読心術スキル、バッチリあるだろ。」

私が疑いの眼差しをキリユウに注いでいると彼は小さく溜息をついた。

「そんなことより昼食はいいのか？」

「あ」

時間を見ると12時45分。ヤバイ。

実習先に持って行くという手も考えたが荷物が増えてしまふ。と

いづか流石に没収されるだろう。皆手ぶらな中私だけが荷物持ちとが目立ち過ぎるし。実習には手ぶらで行くことがルールなのだ。

下りであれば教室まで走って2分ほどだが食事時間は5分と少ししかない。いや、待てよ。全力疾走した直後にご飯とかキツ過ぎる休憩を入れれば実際5分もないだろう。……くそう、もっと味わって食べたかった。

いやいやいや、悔しがっている場合ではない。こうしている間にも時は無情にも一刻一刻と過ぎていくのだ。急がねば。

「ごめんキリユウ、先に行くよ」

「待て」

走り出そうとした私の腕を掴み引き止めるキリユウ。頼む、用な
ら後にしてくれ。私をタチバナさんお手製弁当が待っている。

懇願の意を込めて彼を見上げても一向に離してくれる素振りはない。何だ何だ。私の昼飯の邪魔をするとか、いくら恩があれども許さんぞ。……ここはやはり拳で語るべきだろうか。

「弁当か？」

この緊急事態にどうでも良い質問ありがとう。

私は早く行かないといけない。昼抜きとか考えられない。捕ま
れた腕を早く放せとばかりにガン見しながら頷く。

「何処にある」

……だからさっきから何だというのだ。

早く行きたいのに何故か足止めを喰らい思わず眉間に皺が寄る。
本当に時間がない。

「机の横に引っ掛けてある鞆の中だよ。だから早く」

放せ。

後続く言葉は口から飛び出す事はなかった。ついでに握りしめた拳も。

目の前には見慣れた箱。そう、私のお弁当箱だ。それがいつの間にかキリユウの手にちょこんと乗っかっていた。え、何これ？ 凄くないですか？

「コレか？」

ポカーンと口を開けて間抜け面を晒している私に向かってキリユウが尋ねてきた。私は突然現れた弁当箱を凝視しながら何度もコクコクと頷く。

「時間がないんじゃないのか？」

ハッ。そうだった。

不思議がるのは後から幾らでも出来る。現在の私の中での最優先事項は弁当を空にすることだ。

私はキリユウから弁当箱を受け取り、礼を言ってからご飯を胃に詰め込む作業に取り掛かった。

019 眠りへ誘う魔法の手（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(・ ・ ・)

020 トレードマークは赤い帽子（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します（・・・）

020 トレードマークは赤い帽子

現在時刻は12時55分。

私とキリユウは時間ピッタリに集合場所へと到着し、既に列を成している生徒たちの最後尾に並んだ。走るところか歩いてすらいない。ワープしてきたのだ。お蔭様で 私は残りの時間を全て昼食に回すことが出来た。空になった弁当箱はというと出してくれた時と同様キリユウが再び元あった鞆の中へ返してくれた。渡した瞬間フツと消える様子はマジックとしか言いようがない。思わず歓声を上げて拍手まで送ってしまった。マジ便利過ぎる。

キリユウが言うにはこれが空間魔法というものらしい。空間を切ったり繋げたりすることが出来る超便利魔法だ。空間魔法自体はそれしか出来ないが、応用次第で昨日の保健室のように空間を歪める事も出来れば、先程の弁当のように遠くの物を取ったり自分自身がワープすることも出来る。位置を特定しなければならぬため、知っている場所でないと失敗してしまうらしいが。

この魔法は悪魔と天使にしか使えないと講堂でキリユウは言っていた。惜しい。実に惜しい。それが使えれば朝もつと惰眠を貪れるというのに。

因みに死神が使える魔法は、光と闇を除く火、水、雷、地などの自然魔法だ。光は天使、闇は悪魔しか扱うことは出来ない。

まとめると、死神は火、水、雷、地など光と闇を除く自然魔法を、悪魔は闇と空間魔法を、天使は光と空間魔法を扱う事が出来る。

死神が扱える自然魔法は火や風などを起こすことができる。小さいものであれば薪など生活面の補助として、大きいものであれば攻撃や防御に使えるとても便利なものだ。……私は空間魔法の方が断然良かったが。

あと魔法と言えるかは分からないが死神特有の力が1つだけある。それが転魂である。狩った魂を転生させる力だ。転魂は魂が弱り切っている生き物を死神が鎌でぶった切るだけで発動する。切るといっても切れるのは肉体と魂の繋ぎ目なので身体に傷が付く事はない。この方法以外で他界した生き物は転生することは二度とない。

また、余談ではあるが死神の戦闘スタイルは魔法の他に定番の鎌を使う。死神の鎌といえば身の丈程ある金属製の巨大なものを思い浮かべると思うが私たちの使うものはそれとは少し違う。

確かに大きさは身の丈程あるのだが、原料は金属でなく魔力なのだ。基本、火属性が得意な者は火属性、水属性が得意な者は水属性、とまあとにかく自分が得意な属性の魔力をぎゅっぎゅと固めて鎌を生成する。鎌の見た目は属性に伴い、燃えていたり水で出来ていたり何属性か分かりやすい。鎌の強度は魔力が大きければ大きいほど上がり、そしてコントロール出来れば出来るほど体感的な鎌の重さは軽くなるので扱いやすくなる。自分が得意な属性で生成する理由はこちらにある。

同じ攻撃力の武器だとしても扱えなければ意味がない。下手をすれば鎌を生成したは良いが重過ぎて持つ事が出来ない、最悪生成する事すら出来ないということも有り得るのだ。

勿論鎌は魔力で作るので出し入れ自由、手ぶらで移動できてとても便利……なのだが。

「皆さん、揃いましたね。まずは……ヒイラギ、来なさい」

「へ？……ああ」

イズミ先生にいきなり名前を呼ばれ、間抜けな声を発しながら顔を上げて彼女の方を見る。何事かと思ったが、視界にあるものを認め自分が何故呼ばれたのか瞬時に把握した。

私は「はい」とやる気のない返事を返し、生徒の間を「ちよつとごめんよ」と言いながら縫い進む。そんな私をキリユウは無言で

見送っていた。

途中殺気をそこかしこから感じたが気にせず一歩一歩前へと足を運んだ。何人か私の足を引つ掛けて転ばせようとする輩やからがいたが、私はよいしょとそれらをかわし、そのお行儀が悪い足を逆に思いつ切り踏ん付けてやった。オマケとばかりに捻ねじりも加えて。

その度に「う…ッ！」やら「い…ッ！」やら悶絶する声上がるが自業自得である。わんこの躰に手を抜いてはいけない。どちらが上かハッキリさせることが大事なのである。しかし、どいつもこいつも無駄に足が長い……躰の際に少々強く踏んでしまったのは御愛嬌だ、うん。

赤い帽子を被った中年太りの某髭オヤジが茶色い最弱の敵を踏み潰していくかの如く前こへ進んで行く。脳内では「トウーン」というSE付きだ……ああ、BGMまで流れてきた。てててーてててーてんつ。

懐かしみながら躰をしているうちに先生の前まで到達してしまった。結局奴らは足を引つ掛けようとする以外何もして来なかった。つまらん奴らだ。

私がイズミ先生の前に立つと彼女は眉根を少し寄せ、持っているものを私に渡した。

「……無理はしないように」
「ありがとうございます」

私がイズミ先生から受け取ったもの。それは身の丈程もある金属製の鎌だった。

受け取った私は礼を告げそのままそれをよっこいしょと肩に担ぎ、踵を返してキリュウの元へ足を進める。途中感じる視線は殺意から好奇のものとなっていたがスルーした。行きと違い、帰りは先程の躰の効果で噛み付いてくるおバカなわんこはいない。

「……ヒイラギ、まだ出来なかったの？」
「うん」

戻るとそこにはいつの間にか移動してきたサカキがいた。……ついで鼻血垂れもくつついているが視界に入れはしない。私の中で奴の存在を抹消した。

片手で顔を覆い溜息混じりで聞いてくるサカキに肯定の返事を返すと彼女はより一層深い溜息を吐き出す。いや、だって出来ないものは仕方ないではないか。

「……それは？」

サカキと私のやり取りを見ていたキリユウが尋ねてくる。視線は私がつっている金属製の鎌に釘付けた。……これ結構重いんだよ。

ズルズルとずり落ちそうになるそれを私は担ぎ直しながら答えた。

「私専用武器。私、鎌を生成出来ないんだよね。魔力で」

キリユウが物凄く驚いた表情をした……気がした。

020 トレードマークは赤い帽子（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです（ ・ ・ ・ ）

021 万年最下位のタイトル保持者（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

先程までちらほら私語が交わされていたのだが、今では私が投下した衝撃の事実に関心を中心とする周りだけシーンと静まっている。

あははと何でもない事のように笑う私を見るのは呆れ切った様子のサカキと今ではもう表情を読み取ることは出来ない真顔のキリウ、驚きすぎて間抜けな面を晒^{さら}している鼻血垂れ、そして私達の会話が聞こえていた周りの生徒達。周りの生徒に関しては、黒学の生徒は信じられないものを見る目を、死学の生徒は哀れむような目を私に向けている。私のこの出来の悪さは筆記テストで毎回最下位のポジションを陣取っている事と共に死学の生徒達にはかなり有名な話である。まあテストについては筆記だけでなく実技も最下位なのだが。……今更だが私、かなり出来の悪い落ちこぼれ問題児だな。

「……はあ！？マジかよ！？」

「ホントよ。魔力は有るようなんだけどね……」

静寂を破ったのは我に返った鼻血野郎だった。それに対し律儀に答えるサカキ。サカキ、無視して良いんだよ。そんな奴。そしてそんな奴相手に頬を染めるでない。

鼻血垂れの言葉をきっかけにザワザワと周りが騒ぐ。聞いていた生徒から聞いていない生徒へとあつという間に話が広がったようだ。あちらこちらから様々な視線が注がれて鬱陶しい事この上ない。私はモノクロ調の観賞用動物様ではないというのに。

まあ彼等が驚くにも無理はないのだけれども。

「……前代未聞だな」

「うん。死学始まって以来らしいよ」

キリユウの言葉にあっけらかんと返す私。なんと私みたいな奴は今までいなかったそうだ。どんなに魔力が小さかろうがコントロールが下手だろうが鎌を生成出来なかった生徒はいなかったと以前聞いた事がある。

何度やつても出来ない私にイズミ先生は頭を抱え、苦肉の策でこの鎌の使用許可を出してくれた。これは少し特殊な鎌で魔力を注いでも多少持ち堪えるように出来ている。まあやはりというか原料が金属であるので魔力で作られた鎌と比べるとかなり脆い。でも何も無いよりはマシ。横降りの雨の中、傘をさすようなものである。

またもやずり落ちてくる鎌を担ぎ直す私を何故か探るような目で見てくるキリユウ。確かに前代未聞なら信じられないかもしれないが……疑っているのだろうか？

「……今できるか？」

うむ、バツチリ疑っていたようだ。

まあ仕方ないか。

私は「いいよ」と軽く返事をし、担いでいた鎌を地面にドスツと突き刺した。そして空いた両手をキリユウに向かって突き出す。

やり方は実に簡単。ただイメージするだけである。

私は一つ深呼吸をし、魔力を手の平に集めるイメージを浮かべた。すると次第に手の周りが淡く光り出す。……ここまでは順調。いつも通りだ。問題は次の段階である。

私は慎重にその魔力を固め、鎌の形に形成していく。光がぐにやぐにやとしながらもゆっくりと鎌の形に変わっていく………が、もう少しの所でそれは飛散し、パラパラと光が散っていった。勿論私の手の中に鎌は存在していない。見事に失敗である。

「ほらね」

「……」

私が手をぶらぶらさせながらキリユウに見せると彼は目を細めてそれを見た。そして、何か考える仕草を取る。目の前でやったというのにまだ疑うか。信じられないだろうが本当に出来ないものは出来ない。

「何度やつても固める段階で飛散しちゃうんだよね。そもそも魔法自体あんま使えないみたいだし」

「他人事みたいに言ってる場合じゃないでしょうが」

私のやる気の無い言葉にすかさずサカキの説教が飛ぶ。私は「はいはい、頑張りますよー」と適当に返し、それをサラッと流した。いつもの事である。

「……戦えるのか？」

訝しげにキリユウが私に問い掛けてくる。彼が言っているのは魔物の事だろう。

この世界には死神、悪魔、天使の他に魔物というものも存在している。現在私たちがいる此処は人間の領域から隔離された死神の領域だ。同じイグラントに存在するのだが人間が住む大陸から海を跨いでかなり離れた所に存在する結構デカイ大陸なのである。魔法で姿を隠してあるので人間に発見されることはまず無い。結界も張り巡らしてあるので魔物も侵入不可能だ。

そんなこんなで死神の領域に魔物は存在しないが一步外に出ればうじゃうじゃとそれらがいる。魔物は魔力を持った獣のような存在で、気性が荒いものは誰彼構わず襲い掛かってくる。だから人間の領域に行くには戦闘が余儀なくされるのだ。

因みに悪魔と魔物は違う種族だ。魔物は獣型が殆どで理性がほぼ無く、本能のままに生きる存在なのである。稀に魔力の高い魔物は理性を持ち、人型にもなれるらしいが。

そんな場所へ行こうというのにパートナーである私ということこの有様。確かに足手まといになるかもしれないと心配になるだろう。

「あー、大丈夫。足は引つ張らないようにするから」
「……」

訝しげな視線は変わらず私に注がれている。うーん、信用無いなあ。まあ今日会ったばかりで信用もクソもないのだが。

「……あの」

まあ別に良いかと思いついていたら突然サカキがキリウウに話し掛けた。彼女を見ると、まるで今から告白しますといわんばかりに顔が真っ赤だった。手が細かくカタカタと震えている。加護欲をそそりにそそのその様は何だか知らんがつついっぴい応援をしたくなってしまう。

頑張れサカキ。負けるなサカキ。

私は心の中で彼女にエールを送った。

サカキは意を決した様に引き結んでいた口を開く。

「ひ、ヒイラギは大丈夫です。か、彼女、結構強いですから……心配は要らないかと……」

彼女の雰囲気からガチで告白かと思ったのに、まさかの私へのフオーだった。

デレた。サカキがデレた。顔を真っ赤に染めながら小さく話す彼女に思わずニヤついた私を誰が責められようか。まあ顔が赤いのは

キリユウが原因だろうけれども。

サカキの気遣いがとても嬉しい。

「らしいよ？」

私は笑ってキリユウにそう言った。

021 万年最下位のタイトル保持者（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(・ ・ ・)

022 イケランの文明的文明の利器（前書き）

本日でもどうぞ宜しくお願い致します。

「静かに。では今から人間の領域へ移動します」

未だざわつく生徒たちへイズミ先生が注意し、前から順に移動するよう促した。

移動先は第二塔校門と第三塔校門の間にある人間の領域へ通じるゲート、クリスタルゲートである。それはその名の通りクリスタルで出来ている綺麗なゲートだ。横に10人並んでも余裕で通れるくらい大きなこのゲートは死神の領域のあちこちに設置してある移動機関らしい。人間の領域へ行くゲートは無色透明、悪魔の領域へ行くゲートは赤色、天使の領域へ行くゲートは青色をしていると以前サカキから聞いたことがある。今回は人間の領域へ行くので無色透明のゲートを使用する。

クリスタルゲートを使用するには電車の切符のような外見の通行手形というものがある。江戸時代にあつたそれとは違い身分証明書やパスポート的な役割はない。ただの切符的役割をするものである。それを持ち、ゲートを潜ると目的地まで一瞬でワープさせてくれるのだ。

行き先は通行手形に記憶されているところへ飛ばされるので本当にただ潜るだけで良いし、帰りは通行手形を破けばこれまた一瞬で潜ったゲート前まで帰ることができる。通行手形を失くさない限り帰れないということはないのだ。もしもすっかり破いてしまったとしても死神の領域へ帰ってくるだけであるし、緊急時には破れば一瞬で戻ってこられるので安全面でも非常に優れている。

因みに通行手形には名前がしっかりと書かれている。他人が破いても通行手形に記憶されている人物のみ有効なので誰がそれに記憶

されているのか分かるようになっていたのだ。でないと、もしそれが入れ代わってしまったている事に気が付かずに破いて自分ではない誰かが飛ばされてしまう事態が起こってしまう。通常の通行手形には行き先も書かれているが、実習のものはそれが書かれていない。行き先を事前に知られることはないのだ。これは多分、臨機応変、柔軟な対応を取ってみるという事だろう。今回の移動先も人里か山かそれとも海か、全く分からない。行き先を知るのは教師のみなのである。

周りを見るとそれぞれ通行手形を確認しているようだった。……あれ？そういえば私、持ってないぞ？

「……ヒイラギ」

「ん？おお、ありがとう」

流石キリユウ。読心術スキルは相変わらず健在のようだ。

彼は私に私の名前が書かれた通行手形を差し出してくれた。きっと私が講堂で爆睡している時、代わりに受け取ってくれていたのだろう。何だか目玉焼きに醤油をかけようとしたがそれを見つげられず、机を見回しているところへ妻がどうぞと醤油を手渡してくれたような……そんな何とも言えない微妙な気分を味わった。キリユウ、お前は嫁の鏡か。

私は嫁から……ではなく、キリユウからそれを有り難く受け取り、ポケットの中へ突っ込んだ。

それと同時にイズミ先生の声が響き渡る。

「それぞれ人里へ行くようになっていたので危ない地域へは飛びませんが魔物には十分注意して下さい。戦闘はペアで協力すること。最後にもう一度確認をしますが、今回の実習は視察のみです。魂を狩る必要はありません。2時間経ったら必ず帰ってきて下さい。……では前から順に潜って行って下さい。気をつけて」

おお、そうだったのか。

今更ながらに実習内容を把握する私。何せ保健室へ行ったり爆睡していたりで説明を一切聞いていなかったのだ。仕方ない。うん、不可抗力というやつだ。

「……何よその今知りましたっていう顔」

「うん？ いや、正にその通りだから」

「……」

「……」

「……」

その視線は文字通り三者三様ではあるが、揃って無言で私に目を向ける三人。

呆れたといった様な視線を向けて来るサカキに始まり、やっぱりかと言いた気なキリュウ。……鼻血垂れはイラッとしたので強めに蹴りを入れておいた。明らかにその目がコイツ馬鹿か？と物申していたのだ。蹴りを喰らった鼻血垂れは「ぐっ……！」という呻き声を発し、うずくまって痛む脛を抱えている。この駄犬は私に盾突くとうなるかということはまだ理解できていないらしい。

うずくまっている鼻血垂れに「大丈夫？」と声を掛けて心配するサカキ。だからそんな奴心配しなくて良いって。サカキの心配が減ってしまう。

「次、早く行きなさい」

いつの間にか順番が回ってきていた。ゲートの前でイズミ先生がこちらを向いて急かしている。

「あっ！ すみません！ 今行きます！」

注意を受け、サカキは慌ててそう先生に返し、今だ脛を抱えて動けない鼻血垂れの襟首をガシツと掴んでそのままズルズルと引きずりながらクリスタルゲートへと向かった。大の男相手だというのに、彼女のその淀み^{よど}無い動作は全く重さというものを感じさせない。言っておくが決して鼻血垂れが軽いわけではない。サカキが怪力なだけだ。

潜る手前で立ち止まり「じゃあ後でね」と言って手を振る彼女に私も笑顔で振り返す。

サカキさん、サカキさん。首、良い感じに絞まってるよ。
勿論敢えてそれを言うことはしなかった。

少し緊張顔のサカキと色黒なのに顔が青い鼻血垂れがゲートを潜って消えるのを見届け、私とキリユウは最後になった。私も潜ろうと足を進める。

これを使うのは初めてな私。一体どんな感じなのだろうか……強い浮遊感がないことを祈る。実は絶叫マシーンが苦手な私は結構ドキドキものである。

「……キリユウ？」

私は、先程まで隣にいたキリユウがいつの間にかいなくなっている事に気がついた。キョロキョロと見回した後、振り返ってみると立ち止まって動かない彼を発見。私が声を掛けると彼は少し間を空けて「ああ」と一言返しこちらへ歩いて来た。どうかしたのだろうか？

彼が追いついたところで私も止めていた足を動かし、一緒にゲートを潜る。

「ッ！」

潜る直前、鋭い視線を背後から感じた。

まるでナイフを突きつけられたような鋭い視線。黒字の生徒から
のものとは違う……あんな生温いものではない。

一体誰が？

私は咄嗟に振り返ったのだが眩い光に包まれ、その姿を確認する
ことは出来なかった。

022 イグランド的文明の利器（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

023 至高の時を齎す毛玉（前書き）

少しばかりグロテクスな敵が出て来ます。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

移動は本当に一瞬で終わった。

ゲートを潜ると一瞬強い光が射し、眩しくて思わず目を瞑ってしまった私。目をやけに刺激するその光はすぐ収まり、そろそろと瞼を上げると風景がガラリと変わっていたのだ。体感はキリユウが空間魔法を使ってワープしたときと同じだった。あのゲートにもきつと同じような空間魔法が施してあるのだろう。

まあそんな感じであつたという間に飛ばされてきたわけだが、行き先は知らない。私はどこへ飛ばされたのか、まず現在位置把握をすることにする。移動する直前に向けられたあの鋭い視線……気にならないと言えは嘘になるが、考えないようにした。今そんな事考えても仕方がない。また後でじっくり考えようと私は脳内の隅にそれをぽいっと放っておいた。

私は辺りをぐるりと見回し、周りに何があるか確認をした。私の正面には天を貫かんばかりの大きな木が佇んでいる。右を向くと、これまた先程のものにも負けなくらい大きな大きな木が。そして左を向くと樹齢はいくつかと思わず考えてしまう先程のものに負けず劣らずな……。

……。

「……………森？」

「ああ」

ですよね。

分かつてはいたが一応キリユウに確認を取ってみた。案の定、肯定の言葉が返ってくる。どうやら私の勘違いではなく現在地は森で

確定のようだ。

私の視界いっぱい埋め尽す緑という緑達。さぞかし目には優しいことだろう。しかし何故に森？イズミ先生は人里に着くと先程言っ
てはいなかっただろうか？

「……誤作動かな？」

「……」

静かな森にポツリと私の声だけ零れ落ちる。それに対しキリユウは何も答えず、また何やら考えているようだった。

私はもう一度周りを見渡してみた。

太陽の光は背の高い木々達に阻はばまれているようでまだ昼だというのに薄暗い。人気のないそこはやけに静まっていた。鳥の囀なげりすら聞こえない。生き物の気配が全く感じられない。

私とキリユウが飛ばされてきたこの場所は、かなり不気味な雰囲気
を醸し出している。何だ此処は。草の影からお化けとか出て来そ

「ッー！」

ぼけーっと見ていた草の影からいきなり何かが飛び出してきた。
ガササツという音と共にこちらへ飛んできたそれを咄嗟に身体を捻
って避ける。

ビックリした。物凄く心臓に悪い。今ので寿命は何年縮んだのだ
ろうか。……まあ多少縮んだところで気にしない程長寿になってし
まったのだが。

避けた後、私はパツと振り返り飛び出してきたそれを確認する。

「……」

「……」

「……………」
「……………にゃあ」

そこには一匹のうさぎさんがいた。

私はマジマジとそのうさぎさんを見る。……今、もしかしくとも「にゃあ」って鳴かなかったか？

思わず目を擦ってもう一度確認してみたが、やはり目の前のそれは何処からどう見てもうさぎさんだった。少し毛足の長い体毛は黒色。それに埋まるようにこれまた黒いクリツとした大きな瞳が伺えた。ピヨコンと出た長い耳とちょこんと見える短い足、そしてふわふわの真ん丸な尻尾。身体を縮めて怯えるようにプルプルと小刻みに震えている。

……ヤバい。これはヤバい。殺されそうな可愛さである。いや、もうこの子になら殺されても良い。死因は勿論、萌え死である。実に間抜けだがこの上なく幸せな死に方だ。

「ふにゃあっ！」

私は手に持っていた邪魔な鎌を放り投げ、そのけしからん可愛い生き物をギョツと抱きしめた。

「わああああ何この子っ！かあいっ！え？うさぎ？猫？どっち？もつどつちでも良いけど。ああああヤバイっ！もふもふ最高……っ！」

抱きしめると想像通りのふわふわの体毛が肌に触れ、幸せが広がる。ニヤニヤが止まらない。止めるつもりもない。

かあいっ！めちゃくちゃかあいっ！ヤバい、犯罪級にかあいっ！

もふもふには目がない私である。

かあいいかあいと連呼しながら小さい生き物に一方的に戯れる私。いつにないハイテンションっぷりを披露する私にキリュウが少し驚いている。だが知らない、気にもしない。もふもふの前にはそれ以外のものなどどうでも良い。今私の目には可愛らしいもふもふうさぎさんしか映っていない――

「ッ！！」

ガササツという音と共にまたもや草の影からいきなり何かが飛び出し、私の背後へ着陸した。もしかや二匹目のもふもふか！？

私は喜々として勢いよく振り返り、その姿を確認する。

「……」

……結果を言うと、テンションがガタ落ちした。

飛び出してきたのはもふもふではなく骨のような犬……というより、肉がほぼ剥がれ落ちて骨になってしまっている犬のような生き物だった。ホラー映画に出てきそうな感じのゾンビ犬である。

きつと魔物であろう。こんなものが動物にカテゴリ分けされているのならビックリだ。肋骨やら頭蓋骨が丸出しのそれはこちらに向かってグルグルと唸り、涎だか血だか分からないものを大量に垂らしている。ばっちな。

先程まで私の腕の中で元気良く暴れていたうさぎさんは、今ではまたその小さな身体を更に縮めてプルプルと小刻みに震えている。どうやらコイツから逃げていたようだ。

「わっ」

ゾンビ犬がいきなり噛み付こうと飛び掛かってきたので私はうさぎさんを抱えたまま後ろに跳んで避けた。口から垂れる涎の量がハ

ンパない。どうやら私もコイツの捕食対象として認識されたようだ。私を食べたところでさして美味くもないと思うのだが。そもそもその前にコイツは骨のくせして食べたものを何処へ貯蔵するつもりだというのだろうか。……食べる意味ないだろ。

カプカプと口を開閉しながら尚も飛び掛かってくるゾンビ犬をかわし、ついでに先程放り投げた鎌を拾う。武器確保だ。流石にアレには触れたくないし。

先程までもふもふ天国を味わっていたのに……邪魔しやがってこの骨犬めが。許さん。

「うさぎさん、ちょっとここで待っててね」

私は惜しみながらももふもふうさぎさんを安全な場所へ下ろした。流石に片手ではこの鎌を扱えない。本当に重いのだ、この鎌は。

そういやキリユウは何をしてるんだ？

チラリと横目で確認すると、彼は少し離れた場所でお花摘みに興じていた。

え、何してんのキミ。

023 至高の時を齎す毛玉（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

024 漆黒の森に住まう魔物（前書き）

少しばかりグロテクスな敵が出て来ます。

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「わわっ」

キリュウの思いがけない乙女な行動に思わず目が釘付けになってしまっていた。そんな私に向かってゾンビ犬は口から勢いよく火の玉を吐き出してくる。ちょ、森が焼ける。火事になるって。

私は咄嗟に鎌の刀の部分で受け止める。森が炎上してしまったら私も危ないし、何よりもふもふうさぎさんが危ない。それだけは頂けないのである。

慌てて火の玉を受けたは良いが、それが刃の部分に触れた瞬間飛散し、周りにパラパラと降り注いってしまった。四方八方に飛び散ったそれらを全部受けられそうにない。ヤバイ。着火してしまう。

あんなにもふもふしているのだ。火事になってしまったらそのふわふわで燃えやすそうな毛皮を身に纏っているうさぎさんが逃げるのは困難だろう。私は火事を阻止するため、水をぶっかけようと魔力を練り上げた。

——しかし、それを放つことはなかった。

「……あれ？」

ここは緑が沢山、というより緑しかない。枯れた葉っぱなども散っていたので火の粉が触れればあっという間に炎上してしまうと思っただが……。

燃えていない。何も燃えてはいない。

確かに火の粉は草や木に降りかかったはずなのに触れた瞬間弾くように消えてしまったのだ。何だこれ。

「……漆黒の森」

「ん？何？」

キリユウがポツリと言葉を零す。お花摘みはもう堪能したのだからか。

多分今彼が言った漆黒の森とは此処の事だろう。

「漆黒の森では木や草が燃えることはない」

「へえ」

「……知らないのか？」

うん、全然。

私は尚も飛び掛かってくるゾンビ犬を避けながらキョトンとした顔でこくりと頷いた。それを見たキリユウは眉根を寄せる。

え、何？そんな有名な場所なのだろうか？日本でいう琵琶湖とかそついった感じの観光地？

「……これを見る」

私が首を捻っているとキリユウは自分の右手に持っているものを見せてきた。

彼の手には小さい百合みたいな真っ黒い花が握られている。先程摘んでいたものだろう。

言われた通りそれをジーツと見つめる。勿論その間にもゾンビ犬は飛び掛かってくるのでそれをかわしながら。

いくら見てもただの花。それが何なんだというのだろうか。

それ見たまま何も言わない私の様子にキリユウは微かに眉間に皺を寄せる。いや、だから何。

「……この花は此処にしか咲かない貴重な花だ。魔力を吸い取り、そしてその量、質によって色が変わる。因みに黒は魔族、赤は悪魔、青は天使、白は魔力を吸い取る前の状態だ。一度染まれば色は変わらない」

「へえ」

先程、キリユウはお花摘みをして遊んでいたとばかり思っていたが、勘違いだったのか。どうやら彼は周りを観察して現在地を調べてくれていたようだ。……疑ってスマン。

キリユウの話を聞く一方で、私は飛び掛かってきたゾンビ犬の鼻っ面に水属性の魔力を纏わせた鎌の根本を叩き込んでやった。ゾンビ犬はキャンキャン鳴きながら前足で鼻を仕切りに掻いている。火属性の彼は予想通り反対の属性である水が苦手なようだが……。

「うわぁ……」

思わず顔が引きつる私。叩き込んだ鎌には想像通り涎だか血だか判別不能なものがべっとりと付着していたからだ。ドロドロと鎌を伝い地面に垂れている。……汚い。

鎌を振るたびにきつとそこらに飛び散ってしまう。そのうち自分にも……ひいつ。

それは勘弁と私は急いで水魔法を発動し、それがベツタリ付いた鎌を洗い流した。綺麗になった鎌を眺めて一人うんうんと満足する。キリユウはというと手伝う気は更々ないのか、ゾンビ犬には目もくれない。おま、手伝えよ。

私が恨みがましい目で見ても気にせず彼は口を開く。

「……これは漆黑。人間の間では高価格で取引されていると聞く。何故だか分かるか？」

そう言いながらキリユウは花をペイツと捨てた。え、ちょ、今高価格とか何とか言わなかったか？いくらくらいするのか想像つかないがそんな扱いで良いのか？なあ、良いのか？

貧乏性な私には花が気になって仕方ない。あれは札束を捨てたようなものではなからうか？そんな真似私には絶対出来ない。

しかし何故かと言われても分からない。真っ黒なただの花だ。栽培が難しいのだろうか？

私が首を傾げているとキリユウは話を続けた。

「採取が困難だからだ」

困難？

見る限り普通のこの花を摘むのが？

先程キリユウが摘んだときも楽に摘んでいた。彼はそのとき特に何かをしたわけではない。花自体も毒など特別害があるわけではなさそうだ。本当にただの花なのだろう。

そういやゾンビ犬がじゃれついて来なくなった。不思議に思っただけでみると何だか怯えた様子でジリジリと後退し、そのまま踵を返して逃げてしまった。急にどうしたのだろうか？

キリユウは気にするでもなく更に言葉を続ける。

「この花の色は魔力が強ければ強いほど色が濃くなる。……つまり」

キリユウはそこで言葉を切って私の後ろを見据えた。

——直後、何か羽ばたく音と共に突風が吹き、私の髪を舞い上げた。次いで木々が薙ぎ倒される轟音が響く。何か物凄く大きな生き物が降り立ったようだ。

キリユウは私の背後にいるそれを少し目を細めて見遣る。

「この近くに強い魔力を持った奴がいるということだ。……因

みにこれは周知の事実だ」

私は突然出てきたそいつを振り返って見上げた。

……ああ、うん、なるほど。

理解した。

024 漆黒の森に住まう魔物（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

025 万年最下位対合成獣（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

けたたましい咆哮が響く。

空気をビリビリと大きく震わせるその振動は肌にまで感じられる程。まるで打ち上げ花火のようだ。

奴の真正面にいた私は鼓膜の直撃を避けるため、咄嗟に手で耳を覆った。支えを失った鎌がドサリと柔らかい草の上に落ちる。塞いでも十分に響いてくる咆哮。直に喰らえば鼓膜が逝ってしまうかもしれない。……ちよつと気合い入れすぎではなかるうか。

私はもう一度そいつを見た。基本は獅子だが山羊の角と龍のような翼が生え、後ろ足は蹄ひづめになっている。獅子と山羊と龍……多分キマイラだろう。神話のキマイラと言えば獅子の頭に山羊の胴体そして龍だか蛇だかの尻尾が特徴だった気がする。少々それとはずれているがこれは多分キマイラで間違いない。何せこちらのバナナはオレンジ色をしているなど、微妙に地球のそれらとはずれている所がある。基本は同じなのに不思議なものだ。味噌に醤油、そして米だつてあるというのに。私は日本人の食料における三種の神器といつても過言ではないそれらがこの世界に存在することを知った時、咽むせび泣いて万歳三唱をした。以前読んだ小説やらなんやらでは異世界では決まってそれらが無いが、又は自力で一生懸命探している主人公が描かれていた。期待していなかったものが此処には最初から文化としてあったのだ。これは喜ばずにはいられない。私が人生で初めて神を信じた瞬間であつた。神様、実は素敵な奴だつた。良い仕事しやがつてこの野郎。感謝してやる。……あ、また思考が逸れてしまった。

私はもう一度キマイラを見上げる。……あれ、キマイラってこんなにデカかつただろわか？見ただけでも10mは裕にある。

「デカイね」

「ああ」

同じく見上げるキリュウは少し苦い顔だ。多分このキマイラは通常よりデカイのだろう。

しかしこのキマイラカッコイイなーとか考えつつぼーっと眺めていたらパチリと目が合った。敵と認識したのか唸り声を上げて睨み付けてくる。

睨まれたので私も負けじと睨み返す。ムムムとしたその表情は睨むというより不機嫌面になっているだろう。いきなり降り立ったりしてうさぎさんが踏み潰されたらどうしてくれるんだという念を込めているからだ。……ハッ！うさぎさん！

素早く視線を走らせると斜め後方で耳を完全に垂れさせ、プルプルと体を震わせているうさぎさんがいた。へっぴり腰になっている。どうやら腰が抜けて逃げられなくなってしまったようだ。やべえ、かあいいい。

「おわッ！」

ズダンツと地面に減り込まんばかりの力を込めてキマイラがネコパンチならぬキマイラパンチをかましてきた。うさぎさんのあまりの可愛さに気を取られていた私は反応が遅れ、すんでのところで横に跳びそれを回避する。いくら寿命が延びて魔法が使えるようになったからといっても身体が鋼のように頑丈になった訳ではない。身体自体は以前のままだ。アレを生身で喰らっていたら骨が折れるどころかミンチになっていたに違いない。……危ない危ない。

「……妙だな」

私が安堵していると難しい顔をしてキリユウがポツリと言った。
疑問符を浮かべながら彼を見ると続けて説明してくれた。

「キマイラは知能を持った大人しい魔物だ。通常突然襲い掛かって来ることはないはず……」

「え？でも現に攻撃されてない？」

しかも私単品で。何故か私単品で。

現在進行形で私だけを睨み、グルグルと唸り声を上げているキマイラを見上げる。何だ何だ？私は何か機嫌を損ねることでもしたか？それともこれがキマイラ流のじゃれ方なのか？随分アグレッシブというかこっちは命がかかったものではあるが。……マタタビでも付いているのだろうか？思わず自分の身体を見回すが普段と何ら変わらない。

「……とにかく気を付けろ。さっきの犬とは格が違う」
「了解」

注意を促すキリユウの言葉に了解と言ったは良いが……どうするかな。チラリとまたうさぎさんに目を遣るが相変わらず動けないままのようだ。あんな所においては危ない。そのうち踏み潰されてしまう。

私は地面を蹴ってうさぎさんの所まで走り、素早く拾い上げた。

「ごめんね。頑張って逃げてね」

私はうさぎさんにそう言うや否や振りかぶってぽーんと彼女を思い切り放り投げた。そういえばアリエルを助けたときも投げたなと思いつつ綺麗な放物線を描く黒い毛玉を見送る。うさぎさんは猫ではないので着地は難しいかもしれないが辺りにはフワフワの草が

覆い繁っている。クッションの役割をして優しくうさぎさんを受け止めてくれるだろう。

キマイラに向き直るとまたキマイラパンチを仕掛けてきていたので横に跳んで避ける。避ける際、地面に転がっている鎌が目に残った。アレを回収しなければどうしようもない。

私は着地と同時に鎌に向かって走り出した。無事に辿り着き拾い上げると既に目の前まで迫ってきているキマイラの前足が視界一杯に広がる――読まれていた……ッ！

「……ッ！」

拾った鎌に風属性の魔力を込めてこれを受ける。鎌に纏わせた風魔法で押し返すようにしているのだが僅かながらにもズルズルと押し負ける私。……この風魔法、2メートルくらいなら余裕で遠くまで吹き飛ばせるというのに。とんだ馬鹿力である。

因みにこれが私の魔力の限界だ。私は戦闘では風魔法以外使えたもんじゃない。火はチャッカマン程度、水はバケツをひっくり返した程度、雷は特に酷く静電気程度なのだ。その上、不安定で今こそ鎌の付加スキルで安定させてくれてここまで風魔法が使えるが、鎌無しだと扇風機の強程度しか風を起こせない。他の属性においては不発という有様だ。何とも情けない。

キマイラはこのままでは無理と判断したのかも一方の前足を振り上げた。ちよつと待て。ヤバい、これはヤバい。

喰らうわけにはいかないので私は受け止めていた前足を鎌を傾けて流し、その場を離れる。直後ズダンッと響く轟音……キマイラが脚を退けると地面にクレーターが出来ていた。

……。

………うん、帰ろう。

イズミ先生も無理はするなと言っていたことだし、この魔物、絶対2年生レベルが戦える相手じゃないと思う。

そう判断した私はポケットに手を突っ込む。目当ては勿論、通行手形だ。今使わずしていつ使うというのか。いや、実習終了時に使って帰れば良いのだがこのままコイツの相手をして無傷で帰れるとは思えない。寧ろ帰れるかどうか怪しいものだ。

「キリュウ」

「何だ？」

「帰っても良いよね？」

「……そうだな。これは7年生でもキツイ」

すぐ後ろにいたキリュウに問うと予想以上の返答が帰ってきた。そうだったのか。強いわけだ。

誤作動とはいえこんなものがある所へ飛ばしてくれるとは……うっかりでは済まされない。

さあ、さつさと破って帰ってしまおう。そして先生に文句を言うのだ。

私は通行手形を求めてポケットに突っ込んでいた手をまさぐる。

……。

「……キリュウ」

私は至極ゆっくり後ろを振り返りながらキリュウの名前を呼ぶ。

彼は何だといったように黙ってこっちを見遣り、そのまま次の私の言葉を待っている。

私は引き攣った笑顔で口を開いた。

「……通行手形がない」

彼の眉がピクリと上がった。

……ま、誠に、かたじけなひ。

025 万年最下位対合成獣（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

026 行方知れずな通行手形（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

ポケットというポケットをひっくり返しても出てくるのは紙は紙だが飴の包み紙くらいで通行手形は出てこない。ハハリハハリと舞い落ちて私の足元に広がるそれら。……そろそろごみ箱へ捨てに行かねば。サカキに見つかったら「アンタは幼児か」とまた叱られてしまう。

まあそれは良いとして、確かに私はキリユウから受け取ったそれをポケットに突っ込んだはずだ。しかしいくら探しても見つからない。こうなりや全部脱いで調べるべきか？……いやいや、ここにはキリユウがいるのだった。ただでさえ彼には痴女紛いな事をやらかしてしまっただけにその上ストリッパーだなんて思われては私はもう自分で穴を掘ってそこに大人しく埋まるしかない。却下だ却下。

ポケットにないのならばうつかり落としてしまったのだろうかと周りを見回してみたのだが何処にも落ちてはいない。え、あれ、おかしいな。

私達はクリスタルゲートを潜ってから全く移動をしていない。考えられるとしたら私が先程風魔法を使ったときに飛ばされてしまった、という事態だ。もしそうだとしたら見つけるのは困難。風に乗って遙か彼方まで飛ばされてしまったかもしれない。

私がそうやってごたごた考えているうちにもキマイラからの攻撃はしきりに繰り出されてくる。勿論私単品に。何故だ。あっちにも黒い標的がいるというのに。

前へ後ろへ横へとかわしながら、そして散乱した飴の包み紙を拾い集めながら私は周囲を観察した。本当に何処かぼろっと落ちていないのだろうか。草に紛れているとか。

キマイラパンチの一撃一撃は強い上、あの身体のサイズから繰り

出されているとは思えないくらい速い。気を抜かないようにやつの攻撃を避け、目的のものを探す。

ない、ない、ない……何処にもない。何処に行った、私の通行手形さん。

「……此処にはない」

次々と繰り出されるキマイラパンチから逃げ回りながらも視線をあちこちさ迷わせて通行手形を探している私に向かってキリュウがそう言った。ない？ないですと？

ではやはり先程の風魔法でぶっ飛んだか。

「……風魔法を使った時に飛んではいなかった。恐らくこの森をどれだけ探しても見つからない」

私の思考に対し、読心術スキルレベルMAXのキリュウ氏から否のお言葉が即返ってくる。何かもう心を読まれる事には諦めたというか慣れてしまったというか。それにしてもまたこの男は突然意味の分からないことを……。説明が足りなさ過ぎて私にはさっぱりだ。断じて私の理解力が足りないわけではない。

この森自体にないだと？じゃあ何処にあるというのだろうか。まさか足が生えて走って逃げたとか羽が生えて飛んで逃げたとか言う訳ではあるまいな？

そんな事を考えながら目を細めてジトーツとキリュウを見たのだが今度は反応無しときた。きっと余りにも馬鹿馬鹿しい考えに返す言葉もないのだろう。そんな事は自分が一番分かっている。ほっとけ……いや、やっぱりほっとかないで。私にも分かるように説明をぷりーずだ。

私の心の声が通じたのか、キリュウの口が開いた。

「……………アイツ……………」

否、通じていなかった。

アイツって誰だよ。今回の件に関係あるのか？

眉間にシワを寄せてまた考え込んでいるキリユウ。様子を見るに
どうやら彼は訳知りのようだ。が本人そっこのけで自分だけ考え込ま
ないで欲しい。こちらは気になって仕方がないというのに。

「キリユウ……………」

彼の名前を呼ぼうとしたのだが、私の隣にある茂みからガサリと
出てきた黒い毛玉に気が付き、中途半端な所で途切れてしまった。
私の横には先程逃がしたうさぎさんがこちらを見上げてちょこんと
座っている。うおっ、か、かぁいい……………じゃなくてっ。逃げたので
はなかったのか？

ハッと前を見ると踏み潰すのを諦めたらしいキマイラが今度は炎
のブレスを吐き出しているところだった。広範囲なこの攻撃は逃げ
ようにも間に合わない。

私は迫り来る炎に向かって風魔法を纏わせた鎌を有りったけの力
を込めて薙^ないだ。

ホームランっ！ホームランですっ！

私の中の実況さんが机をバシバシ叩き、マイクを握り締め、中腰
になりながらそう絶叫する。我ながら良いスウィングであった。

鎌が重い為、反動でヨロヨロと身体がよたついたが踏ん張って何
とか持ち堪える。

迫っていた炎は私が薙ぎ払った所からスパツと両側に割れた。鎌^{かま}
鼬^{いたち}はそのままキマイラへ向かうがキマイラパンチに踏み潰され、ダ
メージまでには至らない。……………これで私の魔法はキマイラに効か
ない事が判明した。ダメージを負わせるには直接切り付けるしかない
らしい。

それを見届けた後、急いでうさぎさんを見た。火の粉は降りかかっていないだろうか。身体をぐるりと見回しても怪我はなさそうだったのでホッとす——ハッ。

き、キリユウっ。

炎は先程彼がいた場所に直撃していた。彼は大丈夫だろうか。

バツとそちらを見た……が、彼がいない。え、まさか灰になった？
噓。え。マジで？え？

「……此処だ」

タラタラと汗をかきながら固まっていると上からキリユウの声が降り注ぎ、同時に私の目の前に何かが降ってきた。これは……羽根？

ヒラリ、ヒラリと舞い降りる一枚の羽根は綺麗な綺麗な闇の色。

私は目を見開き思わず魅入ってしまった。まるで何者にも侵おかされないような澄み切った黒。こんな綺麗な色は初めて見た。

フワリと地面に落ちたその羽根を拾い上げ、私はゆっくりと声を上げた方を見上げる。

——そこには闇色の翼を広げたキリユウが私を見下ろしていた。

026 行方知れずな通行手形（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

027 粗悪品という名の命綱（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

バサバサと羽ばたく見事な闇色の翼を見ながら、そっぴや彼は悪魔だったなと今更ながらに思い出した。悪魔ならば勿論翼が生えている訳で。そして立派な翼があるならば勿論飛べるという訳で……。私はさも不満といわんばかりに眉根を寄せる。

「ずるい。それ寄越せ」

ズビシツと翼を指差し、しかめっ面で私が不満を零した。ずるい。ずる過ぎる。私が地上でちまちま頑張って逃げているというのに、キリユウはその翼でいとも簡単にフワリと浮いて回避できるのだ。代われ。翼があるならお前が標的になれ。

その不満たらたなら私の様子を見たキリユウは何故か少し驚いた様子だったが、すぐ真顔になり、「無理だ」と一言だけ言った。

私はチツと舌打ちをする。やっぱり取り外し不可能だったようだ。アレはマジで背中から生えているらしい。私も気合いを入れればによきつと生えてくるだろうか……。こっそり背中に力を入れて頑張ってみたが生える気配は微塵もない。

因みに彼等が背中に力を入れて翼を出現させるかどうかは謎だ。やってみたのは何となくそうすれば生えてくる気がしたからである。無理だったが。

私も魔法か何かで飛べたらもつと楽なのだが……。他の生徒ならば風魔法かなんかを上手く使用し、飛行も可能ではないだろう。しかし、落ちこぼれの私には無理な所業だ。やったとしてもコントロールが上手く出来ず何処かへ吹っ飛ばされるのがオチである。

そっぴやって馬鹿な事や考え事をしているうちにキマイラの炎のブ

レス第二弾が放たれていた。いかんいかん、一瞬キマイラの存在を忘れていた。

私は先程と同じように鎌鼬でぶった切ろうと再度風属性の魔力を纏わせた鎌を構えた――が。

「あ」

……何てこった。

構えた鎌はメキツと嫌な音を立てて折れてしまった。

刃元から見事にポツキリいつてしまったそれは無情にも地面に突き刺さる。

……前々から思っていたが、やはりこの鎌は脆もろくなろうか。下ろしたばかりにも関わらず途中で壊れる武器とか……大問題じゃなかろうか。

実は私、実技などでこれを使用する度にぶっ壊している。半ば使い捨て商品だ。いつもはもう少し持ち堪えてくれるのだがキマイラのプレスが効いたのだろう。予想より早く使い物にならなくなってしまった。この鎌は根性つてものが足りない。腑抜けた鎌なのである。

まあ折れてしまったものは仕方がない。……そんなことよりヤバくないか？

視線を戻すと迫り来るプレスが容赦なくこちらへ向かってくるのが見える。

……ハッ！う、うさぎさんっ！うさぎさんがっ！

私はもふもふ至上主義を掲げながらうさぎさんを拾い上げ、またもや遠くへぽーいと投げた。「にゃー」と鳴きながら綺麗な放物線を描く毛玉を見送る。ごめんねっ！

鎌のない私が風魔法を使っても所詮は扇風機の強である。キマイラのプレスに敵うはずがない。

私はギョツと目を瞑った。

「　　ッ……？」

覚悟したのだが炎が私を撫でることはなかった。

私を襲ったのは想像した熱さではなく腹部への圧力と軽い浮遊感。何故か足は地についていない………浮いているみたいだ。

そろりと目を開けると先程いた場所が見下ろせた。腹部には腕。視線を上げると予想通りキリユウが私を見下ろしていた。………眉間に若干皺が寄っている。

「……死ぬ気か」

「……すみません。そんなでもってありがとうございます」

全面的に私が悪いので素直に謝った。お礼も忘れずに言う。

それにしても彼には助けられてばかりだ。……いや、今まで私が戦っている間彼は傍観に回っていたのだし、これくらいは当たり前と考えるべきだろうか？うーん。

複雑な表情を浮かべながら今度は腹に回っている腕を見る………全体重がかかって地味に苦しい。今回は肩でなく小脇に抱えられている。相変わらずの荷物扱いだ。まあお姫様抱っこよりはマシだが。

……また想像してしまい私はげんなりとした。

「……で、どうする」

「うーん」

キリユウの話によればキマイラは普段大人しいらしい。それが今、敵意を剥き出しにして襲い掛かってきている。……私にだけ。

私はキリユウに抱えられたままキマイラをジーツと見下ろした。

……出来ればもふもふさせて欲しい。あのでっかいもふもふの身体に埋もれたい。だがこの調子じゃ叶いそうもない。何だか嫌われて

いるっばいし。……あ、自分で言っただけ何か悲しくなってきた。黒学の生徒に嫌われようが嫉まれようがどうでも良い私だが、もふもふに嫌われてしまうと心が痛む。

何もしていないのに嫌われるとか……それとも何か理由があるのだろうか？しかしそれがさっぱり分からない。

先程のキリュウの質問に答えると、逃げるか倒すかなのだが……倒すとか私には無理だ。力云々の前にもふもふに手を上げるなんて出来っこない。そんなことしたら自分を自分が許せない。

かといって通行手形がない今、簡単には逃げられない。……そういえばキリュウは通行手形を持っているのだろうか。

「キリュウ、通行手形持ってる？」

私がそう尋ねるとキリュウは「ああ」と応え、内ポケットを探りキリュウの名前がバッチリ書かれた通行手形を見せてきた。

自分が帰れないとばかり焦ってよく考えていなかったが、キリュウは帰ることが出来るのか。

何だ、そうか。

一人うんうんと納得して私は一言キリュウに言った。

「先、帰りなよ」

予想もしていなかった台詞だったのかキリュウが驚いた……気がした。

……表情筋をもっと鍛えると良いと思う。

027 粗悪品という名の命綱（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

028 蒼黒の異端者（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

淡々と言う私にキリユウは少し驚いた後、眉間に皺を寄せた。それを見るとサカキを思い出す。つい先程別れたばかりだというのに妙に懐かしい……でなくて。

いや、だって巻き込むわけにはいかないだろう。通行手形を失くしたのは私だけだ。持っているなら帰れば良い。何もキリユウまで危険に晒される必要はないのである。

「……お前はどうするつもりだ」

怪訝な顔でキリユウが問い掛けてくる。

確かに私は今、武器が壊れてしまった上に魔法だって満足に使うことが出来ない。先程より格段に弱くなっている事だろう。

だが今そんな事を言っている場合ではないのだ。

「私は何とかして逃げ回りながら此处で待ってる。だからキリユウは悪いけど戻って先生に連絡してくれないかな。そしたら通行手形の再発行なり何なりしてくれるでしょ」

「……」

何とかして……無理だろ。

細まったキリユウの目がそう私に告げている。わあ、私信用されてないな。

といっても、私も今のままではどうなるかは分からないと思っている。否定はしないが。しかし今はそれしか方法が思い付かない。私は何とかして逃げ回りながら待つしかないのだ。どれくらい時間

がかかるか分からないが、出来るだけ早く迎えに来て欲しい。……
いや、もう、ほんと、切実に。

是非ともマツハでよろしくお願い致します。

「ほら
」

早く。

そう付け足そうとした所でキリュウの周りの空気が変わったことに気が付き、私は思わず言葉を飲み込んでしまった。今まで穏やかだったそれが、徐々に張り詰めてピリピリとしたものへと変わっていく。一体どうしたのだろうか。

「……キリュウ？」

彼に声を掛けてみたがピリピリした空気は変わらない。……何だか嫌な予感がある。私は無意識に眉を寄せた。

そんな私を気にすることなく、キリュウは何でもないかのように言葉を紡いだ。

「……そんな面倒なことは必要ない。…… 要はアイツを殺せば良いだけだ」

私は目を見開いた。

酷く、酷く冷たい声。キリュウのこんな声は初めて聞いた。

まだ彼とは会ったばかりであるのにこう言うのもおかしいかもしれないが、彼がこんな声を発するとは思わなかったのだ。今までは温かいと言いが難いが冷たくもなかった……彼の声に安心すら覚えたこともあったというのに。

私が驚き固まっているとキリュウは空間に闇を出現させ、片手をそこに突っ込んだ。その闇の先には何も無いんだろうなと何となし

に考えながらただただその動作を眺める。キリユウが闇からゆつくり手を引き抜くとそこには得物が握られていた。

深い闇色のダガーナイフ。

手に握られているそれが彼の武器なのだろう。死神の鎌に比べたら随分と小振りではあるが、何だか名刀の様な独自の雰囲気を感じている。……断言しても良い。これ、絶対に切れ味抜群だ。

きつと触れるだけで切れてしまう。某三代目怪盗映画に出てくる名刀のように鉄をもスパスパと切ってしまう……そんな気がした。

キリユウは得物の感触を確かめるように危な気なく数回クルクルと手で回した後、パシツと音を立てて逆手に持ち替えた。

……ヤバイ。キリユウは本気でキマイラを殺^やる気だ。恐らく彼はそれが出来るくらい強いのだろう。

「……捕まってる」

「ッ！ー！やめっ ツ！ー！」

慌てて彼にストップをかけようとしたのだが、私の制止の言葉は最後まで言い切れずに途切れてしまった。キリユウが私を抱えたまま物凄いスピードでキマイラに突っ込んで行ったのだ。強い浮遊感が私を襲う。ジェットコースターがかなり苦手な私は息が詰まって言葉を発する事が出来ない。悲鳴なんてものは余裕がある奴が上げるものである。あまりの恐怖に泣きそうになる私。キリユウ、てめっ、後で覚えてろ。

私は歯を食いしばり、ぶっ飛びそうな思考を何とか再開させる。こんな状態では、制止の声なんて掛けられない。口を開いた瞬間にそこから魂が飛んでいく自信がある。力づくで止めようにも圧倒的に力が及ばない彼に私が何かしても無意味だ。

このままではあのキマイラが殺されてしまう。それはダメだ。きつとあのキマイラは何も悪くない。何か事情があるはずなのだ。

……あと、何となくキリユウには血を流させてはいけない気がし

た。

止めなければ。

何としてでも。

今、此処にいる、私が。

「……………ッ！」

あー、もー、くそっ！

私は自分の首に着けているチョーカーに手を掛けた。黒い帯に一つだけ付いている小さな丸い透明の石がころりと揺れる。

迷っている時間はない。

……タチバナさん、ごめんなさい。

——約束、破りますよ。

私は力任せにそれを引き千切った。

その瞬間、眩い光が辺りを包む。

「……………ッ!？」

光が収まると同時にガキンッ!と固いもの同士がぶつかるような音が響き渡った。

私の目の前には驚いて目を見開き固まっているキリユウ、後ろを振り返るとグルグルと唸るキマイラがいた。キマイラが無事なことを確かめた私はふう、と安堵の溜息をつく。どうやらギリギリ間に合ったようだ。

「……………ヒイラギ……………お前は……………」

—— 一体、何者だ。

言外にキリユウがそう問い質^{ただ}してくる。

…… まあそうもなるだろう。私は思わずははと苦笑した。
私とキリユウの間には闇色のダガーナイフともう一つ。闇色の得物と交差し、それをしっかりと受け止めている無色透明の鎌があった。

そしてキリユウの視線の先…… 私の髪と目の色彩はいつもの明るい茶色ではない。

彼の瞳に映っている色は——

—— 闇のような黒と深い湖のような蒼。

028 蒼黒の異端者（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

029 擬態の理由と約束事（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「ただいまー。さてー、ヒイラギ、髪と目の色変えようかー」

タチバナさんに頼まれていた薪割りを終える頃にはもう日が沈みかけていた。へろへろになりながら薪割りに使っていた斧を片付けて家へ入り、一杯の水を飲んで一息ついていた私。ああ、重労働後の一杯の水は身体に染み渡るなーとか考えていると、何処かへ出掛けていたタチバナさんが御帰宅された。玄関のドアを勢い良く開いて開口一番の彼女の台詞が冒頭のものである。

いきなりそのようなことを言われポカーンとする私。その私をニコニコしながらタチバナさんは見ている。……えーっと、何だっけ？ああ、髪と目の色か。

でも何故に？

「……おかえりっす。突然どうしたんスか？」
「ヒイラギ明日入学試験でしょー？」

小首を傾げながらタチバナさんはそう言った。いや、まあ確かに今日の昼食時、突然思い出したかのように彼女から死学とやらに行けと言われたが。……明日入試だったのか。今知ったぞ。

入試っていつでも何をするのかすら分からない。……しかも明日って。

……。

………まあ何とかなるだろ。

明日入学と判明しても勉強なんてするつもりもない。今更焦っても仕方がないのだ。中間テストじゃあるまいし、一日完徹でどうこう出来るものではない。そもそも教材自体が無いのでどうしようもない。……ああ、また思考がぶっ飛んだ。いかにいかに。

えーと、タチバナさんは入試だからと言ったが……それとカラーリングとどう関係あるのだろうか？

「このままじゃ駄目なんスか？」

自分の髪を摘み、首を傾げながらタチバナさんへ問う私。彼女は少し困ったような笑みを浮かべながら答えてくれた。

「んー、綺麗だしその色私は好きなんだけどー、そのままだとちょっと目立つちゃうー」

目立つと言われた私の髪と目の色は黒と蒼。日本人特有とは言えないものだが自前である。母方の祖母が西洋系の外国人なのだ。どうやら彼女の目の色彩を受け継いだらしい。私は所謂クォーターというやつである。

しかし目立つといってもタチバナさんに比べたら幾分地味な配色だと思ふのだが……イグランドではこっちの方が目立つのか。

何か理由があるのだろうかと考えていたらタチバナさんが説明を補ってくれた。

「死神って髪と目の色が皆それぞれ同じなんだよー」

ああ、なるほど。

確かにそれは目立つ。

どうやら私は毛色が変わった死神だったらしい。まあ異世界出身だし色彩が違ってくるくらいでは特に驚きはない。寧ろこのファンタジー

な日常自体が驚きだ。

そこで私はタチバナさんを見る。彼女の配色は金髪に碧眼だ。髪と目の色が違う。

「じゃあタチバナさんは死神じゃないんスね？」

謎が多いタチバナさん。今までただの……いや、ただのではないな。色々と規格外なお姉さんだとは思っていたが何者であるかまでは知らない。

私のその問いに彼女は「うふふー」と笑っただけだ。はぐらかされてしまったが彼女が何者であっても私の恩人である事には変わらな。私にとってタチバナさんはタチバナさんなので何者であろうとも気にしないし、それに彼女が言いたくない事を無理に聞くことはしたくない。これ以上の追求はしないでおく。

「まあとにかく悪目立ちしちゃうからー、染めちゃおうかー。ヒイラギも突っ掛かれるの嫌でしょー？」

「お願いするっス」

彼女の助言に私は即、了承の意を示した。

悪目立ちとか勘弁だ。面倒臭過ぎる。今まで染めたことはなかったが、この色彩にこだわっている訳ではない。只単に髪を染めたりカラコンを付けるのが面倒臭かったただけだ。

しかしこの色彩のせいで面倒事が転がり込んで来るならば私は喜んで周りに擬態しようではないか。

「でもどうやってするんスか？」

イグランドにもカラーリング剤やカラコンといったものがあるのだろうか？

私が首を傾げているとタチバナさんはポケットから黒いリボンみたいなものを取り出した。それを「ちよつとじつとしてー」と言いながら私の首にぐるりとまわす。何これ？ チョーカー？

疑問に思いつつも大人しくジーツとタチバナさんの手を眺めていたが、彼女がそれを装着した瞬間眩い光が目を刺激し、思わず私は目を瞑った。

「はい、出来たー」

彼女のその言葉を聞き、私はゆっくり瞼を上げる。

出来たって何が？

そう尋ねようとしたのだが、視界に入る明るい茶髪を見てその答えを知ることが出来た。凄え、髪染まっちゃってるよ。 チョーカー着けただけなのに。

「目の色も大丈夫ー」

私がマジマジと自分の髪を摘んで眺めているとタチバナさんがそう言いながら鏡を持って来てくれた。覗き込むと髪と同色の瞳をした自分と目が合う。首には黒い帯に丸い透明の小さな石がちょこんと垂れ下がったチョーカーが装着されていた。これの構造は全く以って理解出来ないが……まあ魔法だろう。何でもありだ。

「おー、凄えー」と感嘆の言葉を発しながら鏡を食い入るように見る私。マジ凄え。

「髪色変えたただけなのに何か別人っスね。そういえばこの色にした意味あるんスか？」

「一番その色が多いー」

「へえー」

割りと明るい色だがまともだ。以前、赤だの緑だのとカラフルな頭をした方々を見たことがあったので少しドギマギしたのだがその配色でないことに心底安堵した。あそこまでいくと私的にはコスプレの域である。

「あー、それとー、魔力に制限かけたからー」

何故に？首を傾げるとタチバナさんが簡潔に答えてくれた。

「デカすぎるー」

「はあ」

そうなのか。だがそう言われても自分では良く分からない。まあさして問題はないだろうと思ったので適当に流した。

「でもちよつと調節が難しくてー、制限し過ぎて武器も出せなくなっちゃったかもー」

「……え、それってまずいんじゃない……」

訂正、やはり問題だったようだ。

鎌が出せなくて死学でやっていけるのだろうか？

「大丈夫大丈夫ー。そんなのなくても十分強いしー。それにいざという時には勝手に解除するようにしたしねー。あ、チャージャーが取れても解除されちゃうからー、絶対外さないようにー。私以外には誰にもそのこと言ったり見せたりしないでねー」

「り、了解っス」

にこりと笑うタチバナさんから何だか威圧感というか黒い気配を感じ取り、背中にたらりと汗が伝った。口から出かけた「やっぱり

無理ではないだろうか」という言葉なんて言えるはずもなく……。
それを飲み込んで首を縦に振るしか出来なかったのだった。

029 擬態の理由と約束事（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

030 もふもふに懸ける長年の夢（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

……ああ、バラしてしまった。

後でタチバナさんに怒られるんだろうなと遠い目をする私。あの人の恐さは尋常じゃない。今日は記念日になるだろう……恐怖的な意味で。

先程まではキリユウに支えられていた私だが、今それは必要ない。風魔法を使って少しの間なら飛ぶことが出来る。制御が解除されたので上手くコントロール出来るのだ。鎌も出せる。……ちよつと変わったものではあるが。

私はキリユウをチラリと見た。タチバナさんが言った通りの事態、とてつもなく面倒臭い雰囲気を感じた。まさか異端な色彩をしているだけでここまで驚かれるとは思わなかった。あ、鎌も出しちゃったか……ここはあれだ、見なかったことにでもしてくれないだろうか。

私はヘラリと笑ってごまかしを試みたのだが、キリユウの驚き顔が怖い顔になっただけであつた。顔面一杯に説明しろと書いてある。

あ、はい、すみません。見逃せとか無理ですよね。

私は長い溜め息を吐き出し、諦めてキリユウのご要望に応えようと口を開きかけた……が。

「わあッ！」

急に腕を取られ前につんのめつた。背後からキマイラが噛み付いてきたらしく、キリユウは私が噛まれないように私の腕を引いたのだ。いかん、すっかりキマイラのことを忘れていた。

「……先ずはコイツか」
「ちよつと待った」

キリユウの纏う空気がまたピリピリと張り詰め、武器を再び構えたところでガシツとその腕を掴み、待ったをかける私。キマイラを殺されてしまったら私が決死の覚悟で秘密を明かした意味がなくなるではないか。

大体もふもふに手をあげる事自体が許せん。しかもタチバナさんに怒られ損なんて最低最悪だ。ここで止めなければ全て水の泡と化す。そんな事させてたまるものか。

必死な様子で止める私を怪訝な顔でキリユウは見ている。いかにもさっさと放せと言わんばかりだがそんな顔したって譲らないからな。絶対譲ったりしないからな。

私は彼の腕を放すことなくそのまま口を開く。

「もっと穏便にいこう」

「……殺されかけた奴が何を言っている」

まあ確かにキリユウが言う事も一理ある。私はあのキマイラに圧死、焼死、シヨック死とスペシャルコースで殺されかけたのだし。キリユウに助けてもらわなかったら本当に怪我をする所ではなかったかもしれない。

……だがしかし。

「まだ私死んでないよ」

「……」

私がそう言うときリユウの怪訝な顔が呆れ顔に変わった。いや、だって真実ではないか。私は小さな傷一つ負っていない。すこぶる健康体なのである。

「それに絶対理由^{わけ}があると思う。きっとキマイラ自体は悪くない」

「……根拠は？」

「勘」

「……」

何だその顔は。

今度は呆れ顔が馬鹿にするような顔に変わった。キリュウの質問に私は至極真面目に答えたのだが……まあ確かに逆の立場になったら私も同じ態度になりそうなので黙っておくことにした。

しかし私の勘をナメてもらっては困る。結構当たるのだ、私の勘というやつは。しかもこういう悪い状況だと不思議な事にほぼ当たってしまう。

今回のこの事件は、信じたくないが誰かが仕向けているような気がしてならないのだ。面倒臭い。ほんと面倒臭い事この上ない。

二人、無言での応酬を続けていたのだが、キリュウの方は興奮めしたのか溜息を一つ吐き出し、纏う空気が幾分穏やかになった。どうやらゴリ押しスキルは私の方が上のようなのだ。粘り勝ちした私はキリュウのその様子を認めてから鎌を消し、キマイラへと向き直る。

王道の展開から考えるならばキマイラの子供が近くにいて気が立っているとか、誰かに操られているとか……なのだけれども。札とか何処かに貼ってないかとキマイラの身体を隈なく見回してみた。

……。

………うむ、何処から見ても彼は立派な毛並みをしている。何だあのツヤは。ふさふさ加減は。野性とは思えないほど小綺麗だ。あの綺麗な毛並みに埋もletたい。そして乗ってみたい。リアルもののけのお姫様だ。私はあの映画を見たとき心底羨ましかった。以前は現実にあんなデカイもふもふがいなかったからこそ諦めたが、目の前にその夢を叶えてくれるもふもふがいる。やってみたくてウズズする。据え膳喰わぬは男の恥ってな。……何か色々違うが

まあ良いや。

しかしあれだけデカイのだ。私一人乗ったところで平気であろう。ああ、跨がって首に抱き付いてもふもふ……………ん？

思考を脱線させながらキマイラをキラキラした眼差しで見ていると、首元に何かくっついてるのが見えた。何だ？ゴミか？

綺麗な毛並みにチラリと見えた小さな黒いものが無性に気になった。折角綺麗なのにゴミ付きとは頂けない……………ってあれ、もしか操るための媒体ではないだろうか？

もう一度目を凝らして見てみたがもう隠れてしまったようで見当たらない。

それが本当に媒体かどうかはわからないが、確認してみる価値はありそうだ。

「キリユウ、ちょっと待ってて」

彼の返事はなかったが無言を了解と取り、私はキマイラに自ら飛び込んで行った。

当然キマイラは獲物が態々やって来たので攻撃を仕掛けて来る。

私はキマイラパンチや噛み付きをかわしながら先程見たものを探した。……………確かあの辺りだったような。

ガブリとやられそうになったところを体を捻ってギリギリ横に避け、そのまま首に抱き着く。

「……………ッ!？」

私はその瞬間固まった。

030 もふもふに懸ける長年の夢（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(・ ・ ・)

031 闇の支配からの開放（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「……………どうした？」

「……………いい」

ピクリとも動かない私を不審に思ったらしいキリユウが話しかけてきた。ボソリと言葉を返したがどうやらキリユウには届いていなかった様で、彼は再度「どうした」と問い掛けてくる。

どうしただと？

どうしたもこうしたもない。

私は埋もれていた顔をガバツと勢いよく上げた。

「……………ヤバいッ！キリユウ、もふもふっ！彼、超もふもふでその上サツラサラなのだよ！何この極上の毛並み！堪^{たま}らんっ！」
「……………」

もふもふに埋もれながらだらしのない顔で頬を染め、興奮を露^{あらわ}わに振り返り大声を張り上げて感想を伝える私を彼は何処か呆れた様子で見下ろしている。だがそんなキリユウの態度などどうでも良い。今はこの幸せを堪能するだけである。

止められない。止まらない。某菓子のカッチフレーズが正に今の私の心境だ。もふもふ最高……………ッ！

そんな幸せ一杯、ご満悦で極上毛皮に埋もれる私をキマイラは首を目一杯振って剥ぎ取り作業に取り掛かっている。何やら必死な様子だが、こちらだってこの極上毛皮から離れたくない。私は彼の首に必死にしがみ付いた。絶対に放すものか……………っ！

「ん？」

必死にしがみついていたら何やら指先に毛皮以外のものが触れていることに気がついた。これはもしかやと手を伸ばし、高級毛皮に深く埋め込まれていたそれをガッチリ掴んで引っかく。

……これは――

「……羽根？」

自分の手に目を遣ると、そこには黒い羽根が握られていた。キマイラにも翼はあるにはあるが、竜のような翼なので羽根はない。彼の背中から生えているそれはゴツゴツとした骨格と翼膜で出来ているものだ。となれば別の生き物のものということになるが、私はこの羽根に強い慨視感を覚えた。先程拾ったものとそっくり……しかし同時に違和感も覚える。何だ？

「あっ！」

首を捻って考えていると手からスルツと毛皮が離れてしまった。キマイラに容赦なくブンブンと振り回され、流石にその力と遠心力に片手では勝てなかったのだ。

私のもふもふがつー！

漫画なら間違いなく背景にスポンと書かれたらう飛び具合で吹っ飛ばされてしまった。遠ざかる極上毛皮を名残惜しげに見詰める……などといった余裕は今の私にはない。

「ッー！」

本日二度目の恐怖が私を襲う。強い浮遊感に息が止まり、声にならない悲鳴を上げながら強く目を瞑った。瞼の裏に流れる走馬と……
……いやいやいやいや。まだ私は死にたくはない。

「うわッ!？」

後ろ向きに吹っ飛んでいた私の身体は突然何かにぶち当たり急停止した。軽い衝撃はあったが痛みはない。

後から思えば現在制限解除状態で魔法が使えちゃう事だとか落下する前に体制を立て直さなきゃいけなかった事だとかあれこれ思い浮かぶのだが、恐怖によってそんなものは頭からすぽーんと抜けてしまっていた。もし、あのままだったらどうなっていたか分からないので本気で助かった……未だびっくりな速さで脈を打つ心臓に思わず手をやる。

私が血の気のない顔をそろそろと上げると、そこには予想通り超絶美形の顔があった。眉間の皺というオプシヨン付きで。

彼は何処かに飛んでいきそうになった私を回収してくれたようだ。現在私は彼に後ろから二の腕を掴まれている何とも情けない恰好だが気にする余裕すらない。そしてその掴まれている二の腕がぶよぶよだとしても気に……いや、やっぱ気にする。そういえば先ほどは腹を抱えられていたがそこにも無駄な脂肪が……。彼には確実に私の乙女の悩みがバレたであろう。ダイエットしようにも飽き易い私は三日も継続しそうにない。彼は何も言わないのもうつつそこには触れない方向でいこう、うん。

「あー……ただいま？」

贅な肉が気になりプチ混乱の私は礼をすつ飛ばし、取り敢えずヘラッと笑って挨拶をしてしまった。……益々キリュウの眉間の深くなる。完全に台詞を間違った。

続けて本来最初に言うべきであった「ありがとう」という言葉を告げたがキリユウは渋い顔のまま一向に言葉を発さない。何だこの空気……母親の前で正座させられて、怒られるのを待っているような。気まず過ぎる。

それ以外に何を言ったら良いのか分からず視線を逸らしてははと笑う私。すると今まで黙って見下ろしていた彼から溜息が零れた。

「……何を遊んでいる」

どうやら怒っているのではなく呆れているようだ。しかし私は決して遊んでいたわけではない。むしろ死にかけた。気分的には一回死んだ。

「遊んでないよ、ほら………あれ？」

「……」

私は力無く左手を持ち上げて戦利品をキリユウに見せようとしたのだが——先程まで手の中にあつた羽根が消えていた。

通行手形といい、羽根といい所構わずポンポンと消えていく……一体何だ。私が何をしたというのだ。

「ごめん、何かまた消えた。さっきまで黒い羽根持ってたんだけど

……」

「黒い羽根……？」

今は何もない左手をにぎにぎしながらそう言つとキリユウの眉間のシワが若干深くなった。黒い羽根が引っ掛かっているようだ……何故に？

意味が分からず首を傾げていると難しい顔をしたままのキリユウが口を開いた。

「……多分悪魔の羽根だ」
「悪魔の羽根……」

キリユウの言葉を聞いて、ああやっぱり、と思う。

私も羽根を引っこ抜いて見たときそうではないだろうか考えた。
私が拾ったキリユウの羽根とそっくりだったのだ。

鸚鵡返しをした私にキリユウは「ああ」と一言返し、まだ難しい顔をしながら言葉を続ける。

「悪魔の羽根は魅了の力の塊……アレに触れたものは魅了の力を直に喰らう」

「……つまり、キマイラはあの羽根の持ち主の操り人形って事？」
「ああ」

なるほど。だから様子がおかしかったのか。

そこでチラリとキマイラを見ると確かに様子が違って見えた。やんちゃっぷりは何処へやら、唸り声を発することも無ければ殺気も感じられない。彼はもう私にじゃれついて来ることはないだろう。

これだと思う存分もふもふさせてくれるだろうか。

「……お前はそれを素手で掴んで取ったのか」
「うん」

そうか、とキリユウは呟き一度目を逸らして暫し思案した後また私に目を向けた。

「……すまなかった」
「へ？」

予想もしなかった彼の謝罪に思わず間拔けな声が出た。

031 闇の支配からの開放（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(・ ・ ・)

032 秘密の共有者兼協力者（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

またそんないきなり意味不明な……彼は一体何に対して謝っているのだろうか。

彼に謝られる覚えのない私は盛大に首を傾げる。

「……お前、狙われるぞ」

「へえ………え？」

誰に？何故に？

覚えのない謝罪に続けてキリユウから零れた忠告とも取れる言葉にまたもや間抜けな声が口から零れてしまった。首はもうこれ以上傾げられないといった所まで傾き、大変なことになっている。私は首を元に戻し、代わりに眉間に皺を刻んだ。

もう本当に訳が分からない。彼は本当に言葉が足りない。対キリユウ翻訳器なるものがあれば是非とも欲しいところである。大活躍すること請け合いだ。

「……えーっと、キリユウさん、出来れば順を追って説明して頂けると非常に有り難いのですけれども」

でなきゃさっぱり分かりませぬ。

私の読解レベルを遥かに越えたのでキリユウに詳細を求めてみた。このもやもやを是非に晴らして欲しい。何だか針に糸が通らない時の心境に似ている。私は今、頭を掻き篁りたくて仕方がない。そんな私を見たまま、彼は少し間を開けてから話し始めた。

「……お前は悪魔の上層部の奴らに目を付けられている」

突拍子もない事を告げられ、ピシリと固まる。何だその至極面倒臭そうな事態は。

今、私はきつと豆鉄砲を後ろから一気に5発ほど喰らった鳩みたいな顔をしているだろう。不意打ち過ぎる。

「……あー、うん？私、何かしたかな？」

してないよね？

記憶をいくら辿れども悪魔のお偉いさん相手に問題を起こした覚えはない。当然だ。そもそも私は悪魔自体昨日まで会ったことなかったのだから。そんな奴らに何故私が狙われなければならないのだ。

……まさか鼻血垂れをぶちのめしたのがいけなかったのか？アイツ、実は上層部の奴の箱入り息子とか？

「……言っておくが鼻血を垂らしていた奴は無関係だ」

だよな。

私の思考をバツチリ読んだキリユウが訂正を入れてくれる。

まあアイツはどう見ても雑魚キャラもんな。どう頑張っても重要キャラには見えないもんな。

しかし奴はキリユウにも鼻血垂れとしてしか認識されていないらしい。余程影が薄いようだ。美形なのに。一応。

また思考が脱線している私。それにはもう慣れたらしいキリユウが説明を続ける。

「……原因はペア発表の日、魅惑の力が効かなかった事。そしてそれ以上に目を付けられた原因が、黒学の保健室に辿り着けた事だ」

「あー、空間魔法がどうのこうのってやつ？」

「ああ……それを担任　　上層部の奴に知られた」

眉根を寄せるキリユウ。どうやら彼はその上層部の奴らがあまり好きでないようだ。そして担任、偉い奴なのか。偉い奴らって黒い皮張りのソファで暇そうに踏ん返り返っているイメージがあるのだが。仕事するにしてもポンポンハンコを押したりする書類関係なイメージがあるのだが。まさか教師は副業か？……いやいやいやいや。

またもやぐるぐると思考を回す。そんな私に目の前の男は更に爆弾を落としてくれた。

「……あと探している通行手形だが、あれは俺と担任が揃^すり替えた物だ」

「……………は？」

たっぷり、それはたっぷりと間を開けて言った。は？もう一度言おう。は？

これだけ大騒動に……私は決死の覚悟で正体まで明かしたのに。黒幕がまさかまさかのキリユウだと？

フツフツと湧く怒りを感じながら彼を見る。

「……すまなかった」

「……………」

ふざけんなッ！！

……そう怒鳴ろうと思っていたのだが、彼を見た瞬間怒りがしゅるしゅると縮み、そして消えてしまった。

私はどうかしたのだろうか。幻覚が見える。キリユウの頭にへに

よりと垂れた耳、そして後ろからしよぼりと垂れた尻尾が見える。それほどまでに彼は反省しているようだ。先程前触れもなしに謝ってきたのはきつとこの事なのだろう。

私は溜息を吐き出し、怒るのを諦めた。というより怒れない。幻覚が見える限り無理だ。

「……でもまさか此処に飛ばされるとは思わなかった」

「え？共犯なくせに行き先知らなかったの？」

「……ああ。アイツに『正体を暴きたければこれを使え』と渡されただけだ。消えたのは……アイツが何か仕掛けをしていたのだろうな。キマイラを操っていた悪魔の羽根も俺のものではない」

「……え？何？どういう事？キリユウは私の正体が知りたかっただけ？」

色々気になる事を言われた気がするが、一番そこが気になった。共犯と言うからにはこのまま連行されて人体実験やら何やらされるものだと思っていたのだが、そんな素振りには微塵も見せない。何やら暴露まで始めたし……彼が一体何をしたいのか全く分からないのだ。

頭に疑問符をこれでもかという程浮かべまくった私を他所にキリユウは淡々と続ける。

「……知らなければ隠せないだろう？上層部に告げ口するつもりは端からない」

……ん？何だ？

つまりはあれか？

「庇ってくれるの？」

「ああ」

「……何で？」

「……折角面白そうな奴を見つけたのに上層部の奴らに横取りされるのは気に食わない」

……何だその自分のオモチヤを取られたくないガキンチョのような考えは。

そんなお子様はきりう君か、きりゆ君に呼び方を変えてやる。名札を付ければバツチリだ。恐ろしく似合わないが。

まあしかし助かった事には変わりない。何かよく分からないが協力もしてくれるようだし……。

「ありがとう」

取り敢えずお礼は言っておこう。そう思って言ったのだが、キリユウが驚いた表情を見せた。

え？何？何か変な事言ったか？

「……飽きない奴だな」

「それは褒め言葉と取れば良いのかな？」

私のその問いにキリユウは「……それより」と話を中断させた。

……もう勝手にそう取ることにする。

「……その色、何とかならないか？」

キリユウが言っているのは髪と瞳の色の事だろう。私は解除したきりなので未だ色は自前のものとなっている。……確かにこれを他の奴に見られるのは厄介だ。

私は「了解」と無惨にも引き千切られたままだった黒いリボン状のものをポケットから出した。チョーカーだ。今は小さな透明の丸

い石は付いていない。

それを首に回し、目を閉じて魔力を集めるイメージをする。淡い光が私を包み、目をゆっくり開くと視界にもはや定着している明るい茶色の髪が映った。染色完了である。

先程まで千切れたただの黒いリボンだったそれは、今では復元され、チョーカーとして首に納まり、コロンと小さな透明の丸い石がぶら下がっている。タチバナさん曰く、これ、実は私の魔力の塊らしい。

キリュウはその一連の様子をジッと見て私の髪と瞳が染色された事を確認した後、口を開いた。

「……知らなければ何も出来ない。話してくれるか？」

そんな彼を私は見る。闇色の瞳の奥を覗くようにジッと見詰めてみるが騙しているような様子は見られない。彼はきつと嘘はついていない。

彼は信じていいと思う。根拠は無い……私お得意の勘というやつだ。そもそも良い奴だと私は昨日から思っている。迷う必要はないのだ。

彼には秘密の共有者、そして協力者になってもらおう。タチバナさんは……いいや、今は考えない。後々の恐ろしい情景しか思い浮かばないし。

私はふると頭を振り、意識をキリュウへと戻す。

うーん、話か。

……まあ、取り敢えずは――

「私はヒイラギ……柊湖都^{こと}。改めてよろしく、キリュウ」

自己紹介かな。

私は自然と頬が緩むのを感じつつ目の前のパートナーを見る。

さて、何から話そうか。

「……へえ。蒼黒の死神……ね」

2人が居るところから少し離れた場所。ポツリと静かに声が零れた。

薄暗い漆黒の森に白い羽根がハラリと舞う。浮くかと思われたその色は闇の森に違和感なく溶け込んでいった。

「……面白そうだね」

2人を観察していた一つの影は興味深そうにそう一言呟き、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

032 秘密の共有者兼協力者（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

x x x

おまけ（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

xxx おまけ

「もふもふだーっ、幸せだーっ、私、幸せだーっ」
「…………クウ」

キリュウに話した後、私はデツカイもふもふ——キマイラへ体当たりをかますように突っ込んで行った。…………ヤバイ。やはり彼の極上毛皮は生唾モノだ。だらしのない顔を晒しながらグリグリと頭を擦り寄せる。はぁ……………至福の時。

支配から解放されたキマイラはもう私に攻撃する事はない。彼は支配されていた時の記憶があるのか心なしか少し申し訳なさそうにしているように見える。違う、お前のせいではない。全く以て気になくていい。する必要もない。

そんな思いを込めつつ遠慮なくぎゅうぎゅうと抱きしめる私に彼はされるがままだ。時より漏らす鳴き声が恐ろしくかぁいい。見た目はカッコイイのに…………ヤバイ、これがギャップ萌えというやつなのだろうか。…………堪らない。

「…………そろそろ帰るぞ」

いつからこうしていただろう。今までずっと黙って傍観していたキリュウが声を掛けてきた。

この至福の時の邪魔をするな。足りない。もっともっと、もふもふするのだ。

私はキリュウを無視して頭を極上毛皮に擦り寄せる。

「…………あと10分で時間だ。戻らなければ面倒臭い事になるぞ」

……時間？

……。

……。

……ハッ！

そういえば今は実習の最中であつた。極上毛皮に夢中になり過ぎて忘れていた。

「……クウ」

「……」

どうするー？と脳内に流れるキャッチフレーズ。その某CMのわんこのようなキラキラとした瞳を私に向けないで。確実に負けちゃうから。喜んで負けちゃうから。

うー、と唸りつつ私はなんとか心を鬼にして極上毛皮を手放した。……後ろ髪を引かれまくって禿げそうだ。

だがここで帰らなければ確かに説明やら何やら面倒臭そうなのも事実。私は渋々「また来るからね」と約束をし、今日は一旦戻るところにした。

……。

……待てよ？

戻るって、どうやって？

「……早くこつちへ来い。空間魔法を使う」

ッ！！

目を見開いてキリュウを指差し、パクパクと口を開閉する。

おま、気づかない私も私だが今まで何故それを言わなかった……

ッ！

キリユウはどうやら以前来た事があるのか、この場所をすっかり特定できていたらしい。

「……すまない」

そんな私を見て何が言いたいのかバツチリ分かったのだろう。「正体が掴めるまで使うのを躊躇った」と付け足す彼。開いた口が塞がらない。これは文句の一つも言わなければ気が済まないと彼をギロツと睨みつけるように見た。

「……」

ここは一発ガツンと……。

……一発……。

……。

……無理だ。

はぁ、とガツクリ頂垂れる私。駄目だ、またもや私には幻覚が見えた。垂れた耳と尻尾……どうやら彼にそれを出されると私は何も言えなくなるようだ。

毒気が抜かれた私は力無く一言だけ言う。

「……帰ろうか」

……え？手綱捌きはどうしたって？

……その前に彼の何処にそんなものが付けられるのか教えて欲しい。

X X X

おまけ（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです

（ ・ ・ ・ ）

033 もふもふ故に最下位（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

初実習でキリュウと供に漆黒の森へ飛ばされたのは5月
あれから早くも1ヶ月が経過し、6月へと入った。

此处、死神の領域の気候は私が慣れ親しんでいた故郷、日本とほぼ同じものだ。異世界であるのに妙に日本日本しているこの場所は時折日本にいるのではないかと勘違いを起こしてしまいそうになる程である。日常の道具にしろ日本臭さが滲み出ているし、豆腐やワカメ、そして揚げの入った味噌汁を啜^{すす}っては沢庵をポリポリと齧^{かじ}り、ご飯を掻き込んでいる朝食などはまんま日本の風景だ。寝ぼけて今いる場所が日本だと思い込んでいた事も幾度とある。……まあ毎朝食卓を彩っているオレンジ色をしたバナナが視界に入る度、此处が異世界であることを瞬時に理解させてくれるわけだが。後は登校中、ウェディングケーキの様な校舎が目に入った時だとか。

そのようなことを除き、日本に酷似しているこの場所は勿論四季だってちゃんとある。ただし梅雨の時期である現在、日本ほど雨は降らない。梅雨が苦手な私には大変有り難い事だ。

今まで眠りに誘うほど柔らかだった日差しも段々と攻撃的になり、それに伴って気温も上昇する。今は正に衣更^かえの時期である。斯く言う私も制服を冬服から夏服に替えた――のだが。

チラリと前方を見遣ると、お前は何処の所属の黒子だと言いたくなる様な全身黒尽くめの長袖キリュウさんが視界に入った。………
…暑い。視覚的に暑い。自分が着ている訳ではないのに何故か体感温度が高くなる。何とも不思議なものだ。

しかしこれでもまだマシなのだ。コイツは初め、ブレザーまで着ていやがった。嫌がらせレベルとも言えるその光景に我慢できなくなり追い剥ぎの如くそれを引っぺがしたのは記憶に新しい。……怪

訝な顔をされたが私は悪くない。服を脱がせたといっても上着だけだ。ブレザーを取り払って下が長袖だった事に新たな怒りを感じ、危うくそれも剥ぎ取りそうになったが断じて私は痴女ではない。このくそ暑い時期にくそ暑い恰好なんてしやがるキリユウが悪い。

何故この時期にそんな厚着でいられるかというと、キリユウ曰く悪魔や天使は体感温度というものに物凄く鈍いから、らしい。どれくらいかというと、極寒地帯に居ても少し寒い程度、火口付近に居ても少し暑い程度だとか。これはこれで苦勞すると彼は言っていたが暑さには滅法弱い私にとっては羨まし過ぎるスキルだ。何故死神にもそのスキルが備わらなかったのか。同じ人外な生き物なのだからこちらにだって付けてくれても良いではないか――

「……………それも見逃すのか？」

ウダウダとくだらない事を考えていたらキリユウが声を掛けてきた。因みに只今実習中でどこかの平原へ来ている。初回のあの薄暗い森とは違い、視界を遮るものはポツポツと申し訳程度に生えた木ぐらいなので見晴らしはすこぶる良い。フワツと吹き抜ける風も気持ちが良い。その気持ち良い風を感じながら私は手の平に乗せた毛玉を撫でた。くすぐったそうにもぞもぞと動くそれに思わず表情筋が緩む。

初回は視察だけだった実習も段々難易度が上がり、今では魂を狩る所まで進んだ。

今回の実習の狩魂^{しゅじん}レベルはE。狩魂とはその文字の表す通り、魂を狩るという意味だ。そのレベルはE、D、C、B、A、Sとあり、後者になるほど難易度が高い。現在実行中の狩獵はレベルEなので最低ランクの簡単なものである。

「だって狩る必要性が見出だせない」

寧ろ狩ろうとする奴をめった刺しだ。

そう言外に含ませながらキリユウの言葉に答えると彼は持ち前の読心術スキルを発揮し心を読んだらしく、少し呆れた様子で「そうか」とだけ応えた。

ね？と私が同意を求めた相手はヒヨコさん。私の手の平にちょこんと収まっている彼女は首を傾げて「ちゅん」と鳴いた。……多分雀さんではない。ヒヨコさんだ。見た目はヒヨコさんだから恐らくヒヨコさんなのだ。瀕死だった所を助けて今に至るが彼女が今回のターゲットだったりする。

今までの実習で課題に出された狩魂はこれで10回目くらいなのだが実は私達はまだ一度も狩ることが出来ていない。というか私が狩ろうとしない。

何せEランクの狩魂は今回のような小動物ばかりなのだ。ウサギさんにわんこにハムスターさんに………何これ、イジメ？私に対するイジメ？ならば効果抜群だ。

しかも懸命に助けようと思えば助けられる。決して絶対死ぬというものではない。あくまで瀕死状態なのである。今回のヒヨコさんも親と逸れて餓死しかけていただけなのだ。それを狩るとというのが課題だが………出来る訳がなからう。

私は毎回「やってられるかー！」と叫びながら借り物の鎌を放り出す。今回放り出した獲物もキリユウの足元に転がっている………あんなもの要らない。要るのは救急治療道具セットだ。今回もキリユウに頼んで空間魔法で取り寄せてもらった。相変わらずの便利っぷり。一家に一台、キリユウさままである。引き出しから突如出現する青狸の腹に張り付いている四次元なポケットなど私には不要なのである………彼といるとき限定だけでも。

課題遂行か救命か………そんなの勿論助けるに決まっている。もふもふ至上主義者として。

だが出された課題はあくまでも狩魂。私はターゲットを助けてばかりいるのでそんなもの出来るはずもなく、いつも失敗に終わって

いる。

そんなこんなで実習の成績は勿論

最下位。

まあいつもの事だ、うん。問題ない。

033 もふもふ故に最下位（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(. . .)

034 磐石のもふもふ至上主義（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

手の中にすつぽり収まっているヒヨコさんを撫で繰り回しながら私はキリユウを仰ぎ見た。

実習はペアで行うものであつて単独なものではない。私が最下位……つまりそれはキリユウも最下位という事を表す。

聞くところによると彼は首席様らしい。しかも次席にすら落ちた事がないという。万年最下位な私とは正反対で、彼は万年首席のタイトル保持者なのだ。

そんな彼は現在私とペアを組んだばかりに実習で毎回ドベの常連になつてしまつてゐる。実習の成績は筆記や実技とは違い、定期的にテストがあるわけではない。一つ一つ授業そのものがまるつと反映されるのだ。実習が終わる度、順位の書かれた紙が張り出されている。勿論毎度最下位の欄には私の名前が居座つてゐる………ついでにキリユウの名前も。その事で黒学の生徒達からのやつかみが増えつつあるので鬱陶しくて仕方がない。まあ彼らが実行する嫌がらせは今の所小学生レベルのもので、慣れつつある現在は鬱陶しさ半分微笑ましくすらある。……あれ？私、毒されていやしくないか？

そんな面倒臭い事になつてゐる現状なのだが、それでも私は^{もふ}エラ^{もふ}ンクの魂を狩れる気がしない。この調子では彼の首席は間違いなく引きずり下ろされるだろう。粉う事なき道連れである。

私は別に狩らない事自体は悪いとは思つてゐない。寧ろ良い事だと思つてゐる。

しかしキリユウはそのことについてどのように思つてゐるのだろうか。今回もそうなのだが彼は毎回狩魂をしようとしないうちに狩らないかどうかという事は尋ねて来るが、文句を言つた事は一度としてない。自分でやつておいてなんだが本当に良いのだろうか。

そんな事を考えながらキリユウをジーツと見てみると、不意に彼がこちらを向いた。そして幾許か見つめ返された後、彼は呆れたように口を開く。

「……………何を考えているか知らんが、俺は成績などどうでも良い」

いや、知ってるだろ。

相変わらず見事な読心術っぷりである。

そのことに突っ込んでも今更なので、私は「そっか」と一言だけ返して手の中の毛玉を愛でる事に専念した。うつらうつらと船を漕ぎ始めるヒヨコさん。見ているとなんだかこちらまで眠くなって来る。今日も今日とて欠伸が出る程平和だ。

このような平穏な日々を過ごしているが、以前、キリユウは私が狙われると言った。一応最初は警戒をしていたのだが、あの日から何事もなく今日に至る。最近では警戒するのも阿呆らしくなってきた。警戒の「け」の字も見せない私に呆れ気味なキリユウである。何せこんなに平和なのだ。こうやってふもふとも戯れられるし。危なくなったら彼が何とかしてくれるだろうと他力本願さえ出て来る始末だ。

——あと、恐れていたタチバナさんへのご報告だが、意外にあっさりと事が済んだ。

漆黒の森へ飛ばされたあの日、キリユウの空間魔法を使って死学へと戻ろうとしたら、何処からともなくいきなりタチバナさんが現れた。気配なんて微塵も感じられず、彼女に声を掛けられるまで気がつかなかったのだ。あれは本当にビビった。心臓に氷をぶち込まれたような感覚……生きた心地がしなかった。13日の金曜日でもないのに振り向いたら背後にジェイソンがいた、と想像してもらい

たい。

固まる私に始終ニコニコしているタチバナさんは最強に怖い。「ヒイラギー、バラしちゃったねー？」と軽い調子で言われているのに、それが私には死刑宣告にしか聞こえなかった。それと同時に深まったタチバナさんの笑みは形容し難い。……………敢えて言うならどす黒かった。それを間近で見ってしまった私は明日の朝日は拝めないかもかもしれないと本気で覚悟をした。絶対に容赦なく攻撃魔法をぶっ放されるか、得物で攻撃されると思ったのだ。

しかし、それは杞憂であった。入学前、あれだけバラすなど脅し混じりで忠告していたタチバナさんは何故かそこまで怒っていないかったのである。

攻撃される所か、彼女はよしよしと私の頭を撫でるだけであつた。その後キリユウと二、三言葉を交わし、「じゃあ、先に帰ってるー。今日は肉じゃがー」と台詞を残して呆気なく帰って行つた。何故かご機嫌だつたタチバナさんに対し、キリユウは微妙な表情だつたのだが……………理由はよく分からない。

まあ何はともあれタチバナさんの不興を買うことがなかったので、心底安堵をした私である。

「……………あ、寝た」

いつの間にか手の平の毛玉がスヤスヤと寝始めた事に気がつき、ニマニマとする私。ヤバイかぁいい。やはりもふもふは最高である。癒しの塊である彼女はマイナスイオンをどれだけ発生させているのだろうか。

「……………それをどうするつもりだ」

私が締まりのない顔でヒヨコさんを眺めていたら上からキリユウがそう尋ねてきた。

「うーん」と首を傾げて考える。確かに助けたは良いがこの後の事を考えていなかった。連れて帰る訳にはいかないし、今までみにに治した後、そのまま放っておくという事も出来ない。今までのターゲットは成獣のもふもふばかりだったのだ。しかし今回は幼いヒヨコさん。このまま野生に返してもまた同じ事が起きるだけである。

……となれば選択肢は一つしかない。

「親を探す」

「……」

断言した私にキリユウは一瞬呆れた視線を寄越したが、何を言っても私が意見を曲げないと思ったのだろう。仕方ないなとばかりに小さな溜め息が背後から聞こえた。

流石はパートナー。よく分かっておられる。

私が「ありがとう」と礼を言つと「ああ」といつも通りの返事が返ってきた。キリユウの了解を得ることが出来たようである。

ポケットに入れていた時計を見ると残り時間は3時間と少し。もう少しドラダラと休めるだろう。

空を見上げると大分太陽モドキが移動していた。現在私達は木陰にいたのだが、日が当たる方向が変わり、影が小さくなってしまっている。最早暴力レベルとなっている日差し……これをヒヨコさんに浴びせる訳にはいかない。暑さが苦手な私だって浴びたくはない。後ろの黒尽くめさんは一人涼しい顔をしているのだろうけれども。

……畜生、羨ましいな。

辺りを見渡せば少し離れた場所に大きな木が立っていた。枝も良い感じで広範囲に広がり、影も十分にある。

「あつちに移ってもう少し休もう」

言っが早い私木陰を求めて歩き出した。

034 磐石のもふもふ至上主義（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(. . .)

035 暗影を投ずる白い羽根（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

移動し終えた私は木の幹に背を預け、足を投げ出して座り込んだ。女らしさなんて微塵もないが気にしない。休憩中なのに変に女らしくしては逆に疲れてしまう。そもそも私が女らしくしたところで何の意味も成さない。というか女らしい自分なんて想像するだけで無性にムズムズしてしまう。

少し遅れてキリユウが隣に立った。幹に肩を預けているようだが座る様子はない。……疲れないのだろうか？

「座らないの？」

「……いざという時に反応が遅れる」

うちの番犬は未だに警戒心が剥き出しのようだ。守衛とかやれば天職ではなかるうか。

しかし、そんな常時気を抜かない状態では疲弊しない訳がない。現に彼は幹に肩だけ預けて負担を軽減している。

キリユウ自身が狙われる訳ではないのに、ここまでしてくれる彼はやはり優しいのだと思う。

しかしそれにも限度がある。私は王様なんかではない。パートナーだからといって無条件で守ってもらう義理なんてないのだ。

「ッ！」

私はキリユウの服の裾をよいしょと引っ張って無理矢理座らせた。怪訝な視線を投げ掛けられたが視線を合わす事もなく黙殺する。黙って休んでおけば良いのだ。私だけ休むなんて居心地が悪すぎる。

暫くチクチクとした視線を左横から感じていたが深い溜め息が聞こえたと共にそれは外された。勝者は私、粘り勝ちだ。

諦めたキリユウの様子を横目でチラリと見た後、視線を手の中に落とすとスヤスヤと眠るヒヨコさんが少し身じろいだ。しかし、起きる様子はなく、また眠りの世界へと旅立ったようだ。……かあい彼女のために早く親を探してやらねば。

ヒヨコの親といえば鶏だ。真つ赤なトサカがトレードマークなコケコケと鳴くアレだ。……私の常識では、だが。何せこの世界では私の常識を斜め上に行くことがたまにある。私の想像するものが絶対だとはとも言えないのだ。

私の思い浮かべているもので合っているのならば、羽根を辿ればすぐ見つかると思った。しかし、辺りを見回してもそれが散らばっている様子はない。遠くにいるのか、それとも想像しているものとは別物なのか……もしも後者ならば非常に気になる。

「ん？」

思案しているとヒラリと目の前に何かが降ってきた。地面に到達する前に思わずそれをキャッチする。

何だろうかと持ち上げると手に長さ20センチ程の白く平たいものが握られていた。

「……羽根？」

私は首を傾げてポツリと呟く。

風に飛ばされて来たのだろうか。……まさか、これは鶏のものなのか？

だとすれば私の記憶のものより遥かに大きい。……巨大鶏……鶏の丸焼きはテーブルに乗りそうもない。しかも火が通りそうにないので生焼けだろう。

「あ」

ひらり、ひらり。

私が鳥の丸焼きに思いを馳せている間にも次々と同じような羽根が降って来る。何だこれ……風で飛ばされているというより上から降ってきているような……。

そういえば、とキリュウの方にチラリと目を遣る。彼の頭上にももれなくシャワーの如く羽根が降り注いでいるだろう。

「……キリュウ？」

私は首を傾げて彼を呼んだ。

無関心な彼を想像していたのだが……私の目に映ったのは目を細めて睨みつけるように頭上を見上げている彼だった。私の声掛けにも反応しない。分かったのは彼が見上げているもの、この羽根の発生源があまり喜ばしいものでないという事だ。

「……」

私は覚悟を決めてゆつくりとキリュウの視線の先を辿った。

ひらり、ひらりと舞う羽根が視界を邪魔するが、その間からその姿を伺うことが出来た……人がいる。

そこには緩くウェーブがかかった綺麗な金髪、そして透き通った青空の色を宿した瞳を携えた男性が枝の根本に腰掛けていた。前者はサラサラと風に靡き、後者は緩く細められ、柔らかい眼差しをこちらに寄越している。距離があるので細かい所までは分からないが……多分凄い美形だ。サカキがこの場所にいたら間違いなく顔を真っ赤に染め上げているだろう。そして私の腕なんかを掴むのだ。そ

れはもう力一杯に。……此処に彼女がいなくて本当に良かった。

彼は美形は美形なのだがキリユウとは違ったそれのようだ。与える印象は正反対。キリユウが陰なら彼は陽、キリユウが黒なら彼は白だ。

まあ色に関しては見たままである——彼の背中には大きな白い翼が生えているのだから。

今だにひらひらと降り続けている白い羽根の発生源は彼であった。金髪、青目、そして白い翼。

……彼はもしかしなくとも——

「……………天使？」

疑問形になってしまったが確信はしている。これで妖精なんて言われた時には、もう私は私の中の常識を容易に信じる事が出来ない私がそう呟いて見上げていると、頭上に腰掛けている彼はフワリと笑った。

甘く蕩けるような——

「ッ!？」

——私は思わず目を見開いた。

決して見惚れた訳ではない。それを見た瞬間、何故か物凄い勢いで私の背筋を悪寒が走り抜けたのだ。

思わず腕を見ると思い切りチキン肌になっている。先程まで暑かったのに今は寒い。そのくせ嫌な汗がタラタラと流れて来る……何、これ。

私はもう一度彼を見上げた。

そこには相変わらず微笑んでいる彼がいる……が、その様子を認めた瞬間、治まりかけていたチキン肌が復活した。

.....
え、
何？

035 暗影を投ずる白い羽根（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

036 相反する白と黒（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

一つ分かった事がある。

先程からあった微かな違和感……私の第六感が切々と訴え続けている。

最初は見た目が真逆だと感じたのだが……きっとそれだけではない。

——中身も真逆だ。

これはほぼ確定で良いと思う。キリユウが純粹とすれば彼は不純なのだ。絶対今、二重、三重と重ね着を通り越した、もこもこの厚着で猫を被っている……間違いない。

そして恐らくコイツは私の最も苦手とするタイプだ。でなければ最初の悪寒やチキン肌、あと先程から頭のどこかでガンガンと鳴り響いている警報の説明がつかない。私の危機的状況回避能力がフル稼働しているのだ。これはただ事ではない。

一見柔らかさを与える彼の笑みにドス黒さが今もチラリチラリと垣間見える。

……隠し切れてない、全く以って隠し切れてない。胡散臭くて堪らない。あの笑顔の下で何を考えているやら……いや、知りたくもないが。兎にも角にも禍々しい事この上ないのだ。

私は一旦視線を外し、もう一度彼を見上げた。

「……………」

関わるな、近づくな、全力で回避しろ。

やはり私の脳は切実にそう訴え続けているのだが下手に動いてもまずそうだ。

どうしたものと私は頭上から左隣りへと視線を移した。そうだ、私には頼りになるパートナーがいる。彼に指示を仰ごう。

先程は睨み付ける様に見上げていたキリュウの様子を伺――

「……………」

……うん、見なかったことにしようかな。

私はそつと彼からも視線を外し、前を向いた。

何か無茶苦茶殺気立っているのは気のせい……ではないだろう。

上に気を取られていて気が付かなかったが、いつの間にか彼の周りの空気が氷点下を下回っていた。本日は気温の変化が著しい。しかもかなりの局地で。……あれほど敵視していた木陰の外に燦々さんさんと降り注ぐ強い日差しが今は恋しい。目の前にある筈の日当たりが心なしか遠く思える。

初めから歓迎モードではなかったが悪化し過ぎてこちらにも悪影響を及ぼしている。……キリュウさん、寒いです。私、そろそろ凍ってしまいますが。

「　　こんにちは」

どちらを見る事も出来ず、死んだ魚のような目で押し寄せる吹雪に堪えていると上から声が降ってきた。発信源は勿論胡散臭くて堪らないドス黒天使である。

耳に届いたものは高くもなく低くもないが――艶っぽい。つかエロい。そんな表現がピッタリな声。

そこらの女子おなこがこの声を聞いたら黄色い声を上げて身悶えていそ

うだが、聞いてしまった私はチキン肌が再復活……勿論悪い意味で。誰かあいつの首に機械仕掛けの赤色蝶ネクタイをぶら下げて来てほしい。

眉間にも盛大に皺が寄る。尽く私の苦手なタイプのようだ。この手合いには本気で関わりたくないというのに。

隣を見ると同じく眉間に皺を深く刻んだキリュウがいた。もしかなくとも彼も奴みたいなタイプが苦手なのかも知れない。同士を見つけて少しばかり安堵をする。

「……ちっス」

心の支えが出来た所で挨拶に応えてみた。……何だか不良みたいな挨拶になってしまったが。挨拶は挨拶だ、うん大丈夫。

ふと隣から視線を感じ、そちらを見ると恨めしそうに目を細めてこちらを見ているキリュウがいた。……いや、言いたい事は分かる。物凄く分かる。恐らく「何素直に応えている。関わるな、無視をしる」的な事を言いたいのであろう。私だって好き好んでこんな得体の知れない相手と関わりたくないなんてない。

だがしかし、私は元日本人だ。日本の心を忘れた訳ではないのである。祖国では挨拶されたら返すのが礼儀。初対面で挨拶を無視すると何となく後ろめたいのだ。

「実習中？」

……にこやかに話し掛けられてしまった。

隣を見ると、それ見たことかと言わんばかりに眉間のシワが深くなっている……うん、何て言うかごめん。私が悪かった。日本の心が、とか言ってる場合じゃなかった。猛省します。

「実習中？」

「……っ」

キリユウに向けていた視線を急いで前へと戻す。

私が応えない事に焦れたのか、奴が木の枝からフワリと降りてきて再度尋ねてきたのだ。腰を屈めて私の顔を覗き込んで来る。

私は思わず横にズッツと飛び退いた。左に動いたので私の背中がキリユウの腕と衝突事故を起こす。すまん。

「……そうですけど？」

これ以上パーソナルスペースに侵入されては堪らないと顔を引き攣らせながら渋々言葉を返す。落ち着け、落ち着け私。ここで突っ掛かったりしたら相手は付け上がるに決まっている。それは過去に嫌というくらい経験したではないか。その時は頼もしい助けがあったが、此処ではそれは望めない。自分で何とかするしかない。

そんな私を見て奴は更に笑みを深くした。外見上甘い甘い……甘すぎて吐きそうなくらい甘い笑み、だが私にはドス黒いとは思えない笑みを万遍に浮かべる。

うおおおお、やめろ、チキン肌ががががあああ。

「俺も実習なんだけど暇で暇で。一緒に良い？」

え？やだよ？

それを口にせずとも思い切り引き攣る私の口角。取り繕えてない事は自覚している。表情筋がもう限界だと悲鳴を上げているのだ。

だから、だからね？言いたい事、解るよね？………おい、小首なんか傾げてニコニコ顔で返事を待つな。敢えて空気読まないとかしないで良いから。

チラリと背後にいるキリユウを見ると拒絶のオーラを発している。

援護射撃を要請しようと思ったのだが、そういやこれは私が蒔いた種であった。……同士、私、頑張るよ。自分の尻は自分で拭うよ。

……自信は欠片もないけれども。

私は意を決して負け戦に挑んだ。

「……あー、連れも何だか嫌そうなので他当たって下さい？」

連れ『も』と言う事で、私も嫌だという事を遠まわしに告げる。

何故か疑問形になったとか、残り少ない気力を掻き集めて作った笑顔が相手には笑顔に見えていないだろう事とか、結局キリユウも巻き込む体制に持ち込んでいる事とかはもう目を瞑って欲しい。これが私の勇姿だ。

そんな私の言葉を聞いた彼は徐にキリユウへと視線を移した。

相手の意識が相棒へ移ったことに心の中で盛大にガッツポーズを取る。頑張れ、運命共同体。

「そうかな？そんなことないよね、キリユウ」
「消える」

……ちよつ、今なんつった？

驚きに目を見開いたまま私は2人を交互に見る。

相変わらず黒い微笑みを浮かべたドス黒天使と射殺さんとはかりの鋭い視線を投げ付けるキリユウが対峙している。ホントに両極端だな——じゃなくて。

……何、キミら知り合いなの？

036 相反する白と黒（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです（．．．）

037 傍若無人な会話術（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

奴はキリユウの名前を知っていた。そしてキリユウもそれに対して全く驚いた様子を見せなかった。

つまり、それが意味する事は……………。

「…………えーっと、キリユウ、こんな事いうのも何なんだけどね？…

…………友人は選んだ方がい……………」

「赤の他人だ」

私が皆まで言う前にキリユウは簡潔且つ絶対的な拒絶の言葉を以^もってして私の話をぶった切ってきた。だよね、お姉さん安心したよ。

「他人だなんてヒドイなあ。俺とキリユウの仲なのに」

キリユウの反応にフフッと笑いを零しながらそう不満を零すドス黒天使。キリユウはというと、私が今まで見てきた中で一番というくらいの深くシワを眉間に刻んでいる。…………どうやらドス黒天使の片想いらしい。

しかし関係はどうあれ互いに顔見知りという事は変わらない。まあキリユウの方は様子を見る限り不本意だとは思っけれども。

「俺はホヅミ。ねえ、名前何ていうの？」

ひいつ。

色々思考を飛ばしていたらドス黒天使がいきなりひょいと私の顔を覗き込んで名前を尋ねて来た。何やら自分の名前を名乗ってい

た様な気がするが…… うん、聞かなかったことにしよう。名前なんて呼んでしまったら一気に奴との距離が短くなってしまう。それは回避しなければならない。

まあそれは置いておくとして、現在後ろへ下がりたいのだがすぐ背後にはキリユウがいるので叶わない。早く下がれよとばかりに必死に背中グイグイとキリユウを押しまくる。するとすぐに意思を察してくれた彼がずれてくれたのでドス黒天使と少し距離を取ることに成功した。

そんな私とキリユウの様子を何やら楽しそうに眺めながらニコニコと返答を待つドス黒天使。……とても名乗りたくない。一ミリたりとも奴との距離を縮めたくはないのだ。

「……スズキです」

……気が付けばそう答えていた。
無意識下とはいえサラリと偽名を名乗ってしまったが罪悪感は微塵もない。だって心底呼ばれたくない。

「ふーん？スズキちゃん、ね」

ドス黒天使は意味深にそう呟きながら笑顔を浮かべた。それは、一応黒さを隠しているそぶりの見えた今までの笑みとは違い、黒さを惜し気なく前面に押し出したようなそれだ。……全身にチキン肌が立った。やめてくれ。そろそろ私、チキンどころか河豚ふぐにでもなるのではなからうか。

彼は目を細めて更に続ける。

「嘘だったら」

「スズキ改めヒイラギと申します」

私はドス黒天使の言葉を遮ってハキハキとした声で訂正を入れた。あの続きを絶対聞いてはいけない気がしたのだ。名前は止むを得ず晒^{さら}してしまったがこれが最善策であろう。その証拠にドス黒天使が小さく舌打ちをするのが聞こえた。……危ねえ。

ふう、と安堵の溜め息を吐いていると奴は暫し思案した後、にっこり笑って口を開いた。

「んじゃ、ひいちゃんね」

「……は？」

思わず間抜け面で固まる私。

………コイツは今、何と………？

「ひいちゃん」

私の心を見透かしたようにもう一度繰り返す目の前の男。

何だ、コイツも読心術スキルを取得済みなのか？………いやい

や、今はそんなことどうだって良い。

……呼び捨てを通り越していきなりあだ名だと？

そんなフレンドリーな間柄になった覚えはない。

「……いや、ヒイラギですが」

「うん、だからひいちゃん」

「……ヒイ」

「ひいちゃん」

「………」

そうはさせるかと何度も訂正するが、奴は直す気は更々ないらしい。ニコニコと黒く微笑みながら尽く被せられてしまった。

……いや、聞けよ。お前、ホント聞けよ。耳が腐っているのなら

二つも付いているその目で私の顔をよく見てみる。きつと物凄く嫌そうな顔をしているはずだ。

後ろを肩越しに振り向くと、キリユウはドス黒天使に向けていた視線を一瞬私の方に移したが、また奴を睨みつける作業に戻っていた。……それはあれですか。諦めるという事でしようか。

キリユウからの援護は望めないと踏んだ私は、油の切れたオモチャの様な動作でギギギと首を振って視線をドス黒天使に戻した。

「まあそう睨まないでよ」

そう言いつつも終始ニコニコと黒い微笑みを浮かべているコイツは本当に良い性格をしている。

私とその胡散臭気な様子を半目で見てみると、彼は「あちゃー」と呟きながら空を仰ぎ、片手で頭をワシワシ掻きだした。今度は何だ。

「……………見つかったかな？」

ボソリとそう零す。

その言葉に首を捻っていると彼は「もう少し話してたかったんだけどなあ」と呟きながら頭を掻いていた腕を今度は横に払った。

「ッ」

眩しッ！

私は咄嗟に手を翳して眩い光から目を庇った。

目を細めて見てみると、彼が手を翳した先にポツカリと縦2メートル程の穴が空き、そこから強い光が漏れ出ている。

……………何だあれ。

「今日は帰るね。また今度」

奴はこの強い光に慣れているようで目を庇うそぶりも見せないまま、そう言い残して光の中に足を踏み入れていった。奴の身体がどんどん光に飲まれ、入りきったという所で一層光が強くなった。耐え切れなくなり、思わず目を瞑る。

光が収まった後、チ力チ力する目を擦ってもう一度目の前を見た。

「……いない」

ドス黒天使は消えていた。あれだけ散らばった羽根も見当たらない。

キリユウを見ると渋い顔をして何やら考えている様子だった。

……あのドス黒、また今度とか言っていたな。

……。

——断固拒否する。

037 傍若無人な会話術（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

038 人生至上最強な天敵（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

超大型の台風が去った後、私とキリユウは暫し無言のまま微動だにしなかった。……ああ、空気が美味しい。凄く美味しい。あのドス黒は空気まで^{よど}澱ませていたのだな。歩く災害か公害か……どちらにせよ悪影響を与える存在には変わりない。

「……あのドスぐ………げふんげふん。……パーツは天使っぽい人、キリユウとどういう関係？」

……いかん、思わずドス黒と言いかけてしまった。まだ奴とキリユウとの関係性が分からない今、いかにアレといっても^{そし}謗るような言い方は避けた方が良いだろう。パーツは天使っぽい人、という言い回しが適しているのかどうかときかれれば悩む所ではあるが。

まあそれはともかく、私は落ち着いた所で先程から一番気になっていた事をキリユウに尋ねた。……そう口に出した所で、何やら浮気現場を目撃した彼女が彼氏を問い詰めているような感じになっている事に気が付いたが、まあ気にしないでおこう。

その質問を聞いた彼は眉を潜めて珍しくも露骨に嫌そうな顔をした。奴について極力触れたくはないらしい。……いや、気持ちは物凄く分かる。しかし、奴がまたこちらと接触する事を仄めかした以上、相手の事を知っておいた方が良い。敵を知る事は大切なのだ。作戦だつて立てやすくなる。出来れば私だつてこの話に触れたくはないが対策を練っておきたいのだ。余裕など皆無である。

さあ吐けとばかりに彼をジーツ見ていると観念したのか、彼は溜め息を一つ吐き出してゆっくりと口を開いた。

「……以前、いきなり現れて攻撃を仕掛けられた事がある」

……え。それだけ？

私が思わず訝^{いぶか}しげな視線を向けているとキリユウは続けて補足説明をしてくれた。

「奴とは過去に一度戦った事がある……それだけだ。名前も先程初めて知った」

知りたくもなかったがな、と付け足して呟く彼に嘘をついている様子は見られない。

……え、マジか。それだけであのドス黒は堂々と友達気取りをしていたのか。キリユウの話からすると恐らくそれは只の敵同士ではないのか……いや、どう考えても間柄はそれで正解だろう。

どういった思考でそのような答えを導き出せるのだろうか……

…奴の思考回路はかなり混線しているようだ。一度その頭をかち割って回線を繋ぎ直してもらえば良いと思う。いや、寧ろ中身ごと取り替えても良いだろう。手間も省けるし。一昔前のアンテナが頭から生えているごっついブラウン管テレビよろしく衝撃を与えれば良いのか？石……いや、温^{ぬる}いな。奴にぶつけるなら岩くらい質量がないと駄目か。

「……お前はらしくなかったな」
「ん？」

奴の理解不能な頭の構造についてあれこれ考えているとキリユウが話し掛けてきた。私らしいとは何だろう？私は頭に疑問符を浮かべる。

「いつもなら軽く往なすだろう」

「あー……」

キリユウが言っているのはいつも黒学の生徒達は軽く往なしているのに何故今回はそうしなかったのかという事であるう。

確かに彼らには初実習の日から今日まで、魅惑の力を使われたり、クサイ台詞やナンパな台詞、キザな台詞と様々なパターンのものを投げ付けられたりされたが全て3倍返して返り討ちにしてきた。その私が今回、返り討ちの『か』の字も出せなかったのだ。キリユウが不思議に感じて仕方のない事だろう。

私は少し思案した後、口を開いた。

「明確な目的のない奴は対処に困る」

「……目的？」

「うん。黒学の生徒はキリユウ関係でしょ。どいつもこいつも私がパートナーだからという嫉妬」

そうなのだ。わんこ信者共はどいつもこいつもキリユウ大好きっ子なのである。パートナーだからというだけの理由で何度噛み付かれた事か。まあ成績の足を引っ張っているからという理由もあるようだ……これは合意の上なので口出しされる謂^{いわ}れはない。嫉妬などいつての外だ。

よって私は噛み付いて来るわんこ共を心置きなく言葉や実力行使で黙らせる事が出来るのである。

「……でもあのドス黒は違う。ちょっかい出される理由が分からない……愉快犯的なものかな。そういうタイプはどう対処すれば良いか分からなくなる」

二人の間柄が敵だと分かったので私はもう気にせず奴の事をドス

黒と口にする私。名前など最初から呼ぶつもりもないしこれで十分だ。

「あいつ程ではないけど地球で同じようなタイプの奴に絡まれた事があるね。あれは本気で参ったよ。……まあ助けてくれる人がいたから良かったけど」

そう、いたのだ。そんなツワモノが。

その助けてくれていた人というのは――私の双子の片割れである姉である。

私がそういった輩に絡まれていると、何処からともなく駆け付け、いつも助けてくれていた。今思えば彼女はかなり強かったと思う。

うん、何ていうかアレだ………中身がタチバナさんと相通ずる所があるのだ。それだけで察して欲しい。

実は離れてしまった今でも私は彼女と夢の中でしばしば面会している。

双子の為せる技なのかどうかはよく分からない。面会といっても逢瀬といったようなものではなく、彼女との小さい頃の思い出やらを夢で見るのだ。まあたまに変なものもあるが。……彼女が殿で私が姫の時は本当にどうしようかと。

まあどんな内容であれ、週に2、3回は彼女と一緒にいる夢を見る。彼女と離されてしまった今、会わなくても大丈夫と言えは嘘になるがそこまで寂しくはない。それはその夢のお陰であるう。元々寝るのは好きだったが、こちらに来てからは彼女の夢が見られるという事で益々好きになったのだ。

……おっと、段々話が逸れてしまった。

「あと、基本的にタラシは拒絶反応が出る」

思考を戻し、私は先程のものへ付け足した。

これの良い例が鼻血垂れである。あいつはヘタレだから力技でいかせてもらったが。所詮鼻血垂れだしあんなものであるう。

……まあそれはともかく、今まで挙げてきた苦手なタイプを全部まとめて兼ね備えているのがあのドス黒天使という訳だ。本当に相性が悪過ぎる。私にとってラスボスもいい所だ。

「……お前を助けていたという奴は？」

思い出して顔を顰^{しか}めているとキリユウが興味深そうに聞いてきた。彼が他人に興味を持つなんて珍しいなと思いつつ答える。

「姉だよ」

「……姉？兄弟がいるのか」

その言葉にキョトンとする私。あれ？言ってなかったっけ？

例のキマイラ事件の時に私は彼に地球の事から始まり、現在に至る経緯の全てを話したつもりだったが姉について伝え損ねていたようだ。

この調子じゃ伝え損ねている事がまだありそうだが……そもそも何を伝えられていないのかが分からない。まあ発覚したらその時に説明すれば良いだろう。

私は取り敢えず今のキリユウの疑問に答える事にした。

「いるよ。私の片割れの姉」

「……双子か？」

「うん。依^{いと}都^とつていうの」

「……いと？」

「こそ、柊依都」

そう私が答えると、キリユウは少し思案する様子を見せた後、「いと……」と私の姉の名前をもう一度呟き、難しい顔をして何か考え込んでいる。……何だ？うちの姉の名前がどうかしたのだろうか？

「……糸ラーメンではなかったのか」

「ん？何て？」

「……………いや、何でもない」

声が小さ過ぎてうまく聞き取れなかった。何？らーめ？……………まさかラーメンか？ラーメンがどうした？

やけにスッキリ顔で一人納得しているキリユウの様子に私は首を傾げる。

彼の中で何が解決したのだろうか。

先程の話を整理するとキーワードは恐らく『依都』、そして『ラーメン』……………。

……………。

……………。

考えた結果、僅か5秒で迷宮入りが確定した。
我ながら正しい判断だと思う。

038 人生至上最強な天敵（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

039 小言対専用秘技(前書き)

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

茜色に染まった空。夕日が少しずつ沈んでその姿を隠し、その度にうつすらと闇が広がっていく。その反対側からは地球のものと比べると明らかにサイズが大きな月らしきものがひょっこり顔を覗かせている……今日も静かな夜が皆の元へ平等に訪れるようだ。

燦々と強い日差しが降り注ぐ昼間も暑いが、夕日がじわじわと照り付ける夕方だって昼よりマシとはいえども十二分に暑い。

——なのにコイツらときたら……。

「……暑苦しい」

思わずそう声に出してしまう程には私に影響を及ぼしているその光景。

現在私達はクリスタルゲートの前にいる。終了時間になると全員此処で待機するのが決まりなのだ。終了時間目前の今、この場所は人口密度が恐ろしく高い。

半目で辺りを見渡せば、視界に入り込んでくる黒、黒、黒、黒。

……まあそれは良いとしよう。髪やら肌やらは生まれついたものだし私かとやかく言う権限はない。言えばそれは人種差別以外の何物でもないのだから。

——だがしかし、ブレザーは我慢ならない。しかも色は黒。クソ暑いのだから半袖でもっと涼しそうな色にして欲しい。お前らは良いかもしれないがこちらは視覚的に暑すぎる。何これ、もうあれだよね、嫌がらせ決定だよね………とか思っているのは私だけなのか？なあ、どうなんだ？

ブレザー姿の奴らに囲まれているというのに嫌な顔一つせずに、

寧ろ嬉しそうな表情すら浮かべているとはどういった了見だ。

彼らはこの暑さでやられてしまったのだろうか。それとも感覚麻痺にでもなっているのだろうか。はたまたフェロモンにやられたのだろうか。………十中八九フェロモンだろうな。皆揃って目がハートだし。早く慣れるよ———と言いたい所だが未だに吐き気を抑えられない私も人の事は強く言えない。

ぼん、と私の頭に置かれているキリユウの手。フェロモンが噎せ返しそうなくらい充満するこの場所で、現在吐き気を催す事もなく、こんなにも余裕で周囲を観察出来ているのはこの魔法の手のおかげだ。いやはや、いつもお世話になっております。有り難や有り難や………つて、ちょ———

「……キリユウ」

少し咎めるようにそう呟く私。

頭からスルリと手が滑り、また定位置に戻るのを何度か繰り返していく。……何故か乗せたその手が時折私の髪を撫でるのだ。私はわんこでもにゃんこでもない。

やめてくれないかと斜め上に視線を送るが一向に応えてはくれない。汗をかいてベトベトなそれをあまり触らないで頂きたい。それにほら、そんなことをするとまた面倒臭い事が———

「またアイツ……ッ」

「キリユウ様が汚れる……ッ」

ボソボソとそこから聞こえる悪口雑言。あいつの雑言その予想通りの事態に溜め息が零れた。

そう、面倒臭い事とは勿論わんこ信者共の嫉妬による副産物だ。幾つもの視線がチクチクと私を刺していく。しかし原因はお前達だ。この状態が嫌ならフェロモンを引っ込めてくれれば良いだけである。

わんこ信者共はキリユウが私の頭に手を置いている理由を知らない。いい加減気づけと言いたい所だがキリユウに待ったを掛けられた。彼曰く「弱点を態々教えるな」と。まあ確かにそうなのだけれどもキャンキャン吠えられて噛み付かれる度に対処するのが面倒臭くなってきた訳で……。

驚くことに、いつもいつの間に仕掛けるのか、教科書にカッターというもはや廃盤並な嫌がらせがあるのだ。初めこそ感動すらしたが、そのカッターが異様に丁寧にペツタリと隙間なく貼付けてあるので処理が物凄く面倒臭い。最近ではカッターの刃廃棄箱なるものまで教室の隅に設置され、それが溢れ返っている始末だ。まあ教職員が流用してゴミにはなっていないようだ。……いや、流用ではないな。本来の用途に戻っただけだ。決して教科書にせっせと貼り付けるものではない。そういえば昨日箱に入れたとき大分溜まってきていたし、そろそろ回収の頃合いかもしれない……じゃなくて。

私はもう一度ぐると彼らを見渡した。……暑い。やはり暑い。

この際今回の嫉妬の副産物は見逃してやろう。だからその暑苦しいブレザーを脱げ。今すぐ、直ちに、迅速に。見本はうちの番犬だ。

隣に立つ優秀な彼の出で立ちはブレザーを脱ぎ、下に着ていた長袖のシャツを腕まくりしている。色は同じ黒だが、これだけでも与える印象が全く違う。視覚的に涼しいのだ。体感温度が5度くらいは下がっているかと思う。エコだろう、涼しいだろう。だからほら、 teme エラも見習って……おい、何故そんな恍惚とした真っ赤な顔でキリユウを見ているんだ？ちよつと薄着になつて腕を捲つただけだろうが。

……それだけでも色気が垂れ流しか……恐るべし。キリユウの天然フェロモン恐るべし。

「ヒイラギ、キリユウさん」

清涼計画とキリユウの色気について悶々と考えていると、後ろから声を掛けられた。振り返るとサカキと鼻血垂れが視界に入る。

「サカキ、お疲れ」

「お疲れ様」

私の言葉にサカキが返す。鼻血垂れに言わないのはデフォルトだ。必要性を全く感じない。

奴は「お疲れ様です、キリユウ様」とキリユウにだけお辞儀付きで労いの言葉を掛けて……って、ちょ、おま——

「……お前、やれば出来る子だったんだな」

「は？」

「清涼感溢れてる」

私は鼻血垂れをまじまじと見た。

ブレザーを脱ぎ、下の長袖シャツを肘まで捲っている。私の中の鼻血垂れ好感度が10程上がった。上限は1000だけでも。

私に見られている鼻血垂れは「あ……ああ」と言いながら何故か少し怯えている。

「私が頼んだのよ。見てるだけで暑くて」

それを聞いてまた好感度が8程下がった。何だ、サカキの仕業だったか。

奴の怯えは多分サカキが原因だろう。頼んだと彼女は言ったが実際どのような面白い頼み方を……ああ、肩をやられたか。

視界の隅に肩を押さえる鼻血垂れが映り納得する。

私は次に彼女へ視線を遣った。彼女は他の生徒とは違い、まだほんのり頬が染まりはするものの、もう目がハートになるまで堕ちる

事はない。優秀なのだろう。

そんな彼女も私と同じようにブレザー集団を暑苦しく思っているらしく、出来るだけ周りを見ないようにしているようだ。普通考えれば暑苦しいよね、うん。安心した。

「……で、今回は狩れたの？」

同じ考えの仲間にあえて嬉しく思っていたのにその一言で嬉しさが半減してしまった。……またサカキさんの小言が始まるのだ。私はそろそろと彼女から視線を外す。

ドス黒が帰った後、ヒヨコさんの親を探し出して帰してあげた。結構離れた場所にいたので少し手間取ったが無事終了だ。因みに親は普通の鶏で少しガツカリした。その一方、勿論課題は失敗である。彼女は私の態度でそれが分かったのだろう。彼女が眉間に皺を寄せて口を開きかけた瞬間、それはさせまいと私は行動を起こした。

「とうっ」

「きゃっ!？」

何時ぞやの私とは違い、奇襲に対して可愛らしい声を上げるサカキ。どうやら彼女は少数派のようだ。相変わらず期待を裏切らないな、この子は。

私はサカキの腕を引っ張ってキリュウへと放り投げた。普段は怪力な彼女だが、不意打ちには敵うまい。

思惑通り、彼女はぽすんとキリュウにぶつかった。避けはしないが受け止めもしないキリュウ。……おい、そこはちゃんとしてっかり受け止めるよ。

筋違いな非難する視線をキリュウへと向ける私。

「あ、ごめんなさ

」

振り返り、そこまで言った所で見る見るうちに顔が赤くなっている。彼女の目の前には程よく筋肉の付いた胸板、視線を上げれば超絶美形の顔が待ち構えているのだ。

秘技、天然フェロモン。

サカキはキリユウから物凄い勢いで距離を取り、ゆでだこ茹蛸になって固まった。これで今日のところは小言を聞かなくても済むだろう。彼女の心臓には負担が掛かるかもしれないが、私は今日物凄く疲れてしまった。あのドス黒のせいで神経をぞりぞりと磨り減らされたのだ。これ以上は勘弁して頂きたい。

軽く眉根を寄せてこちらを見ているキリユウに「グッジョブ！」と良い笑顔でサムズアップをし、未だに茹蛸状態のサカキを見た。

……ふむ、この技、使えるな。

動けない彼女をそのままに、いつの間にやら壇上に立っていた教師の挨拶を聞き流して本日の実習を終了した。

039 小言対専用秘技（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです（ ・ ・ ・ ）

040 開拓者からの贈り物（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

今日の夕飯は私の故郷、地球に存在する国の一つである中国のアレ、超豪華なアレ、料理の数が無駄に多いアレ——そう、満漢全席だ。

まさかこのような皇帝気分を味わえるとは……幸せ過ぎる。席に着いて「頂きます」と手を合わせてから逸^{はや}る気持ちを抑え、いそいそと口へ放り込み、まぐまぐと噛み締めた。……う、ウマシっ。

一度口に運ぶと後は止まらない。私は忙^{せわ}しく箸を運び続け、次々と目の前のウマシな中華料理モドキを胃の中へ収めていった。

しかしこのようなハンパない数の手が込んだ料理を一日、しかもたった一人でよくぞ仕上げられるものだ。そしてこのお洒落な大量の皿達は何処にあったのだろうか。どれも見た事がない。あと確かうちにコン口は2つしかなかったハズだが……いや、考えるのはよそう。あれこれ考えると折角の料理を思い切り味わえない。これを作ったのはタチバナさんだ。それだけで答えはもう十分ではないか。さくさくと標的を平らげ、目の前に陳列する皿はもう殆ど空になっっている。料理の数こそ多いが20分の1スケールなので腹に丁度納まる量なのだ。

いよいよ私はシメのデザート、杏仁豆腐にスプーンを差し込んだ。……口に入れた瞬間とろりふわりと消えてしまうこの繊細さ。ヤバイ、美味い。私の中の杏仁豆腐に対する認識が革命を起こした瞬間であつた。幸せ過ぎて死にそうだ。死なないけど。

「御馳走様でしたっ！」

「いえいえー、お粗末さまー」

パンツと勢いよく手を合わせて感謝の言葉を口にする。「うふー幸せそうな顔ー、作りがいあるー」と、にこにこ顔で零しながら食後のミルクティーを優雅に飲むタチバナさん。いや、もう、はい、今私は世界一の幸せ者だと豪語しますよ。

お蔭様で今日の憂いも疲れも全て吹っ飛んでしまった。私は案外単純なのかもしれない。

「今日は実習どうだったー？」

幸せオーラ全開で満腹になった腹をすりすり摩っているとカチャリとカップを置いたタチバナさんが話し掛けてきた。毎日恒例のご報告である。

本日の報告の目玉は勿論ドス黒についてであろう。もう口にするのも嫌なのだがタチバナさんならば打開策を思い付いて教えてくれるかもしれない。私は眉間に皺を寄せながらも口を開いた。

「天使……中身が半端なくドス黒い天使に会ったっス」

「天使なのにドス黒いのー？」

「うーん、纏う空気が禍々しいというか……確か名前はホヅミとか何とか」

拒絶反応を起こす輩の名前を口にしてしまったせいで嫌悪感がそのまま表情に現れてしまった。苦虫を噛み潰したような顔になっているだろうが止めようがない。その様子を見たタチバナさんはふむ、と少し考える素振りを見せてもう一度口を開いた。

「その子もしかしたら噂の問題児君かもー」

「噂の……問題児？」

「そそー、風の便りによると天使の領域内で問題になってるらしいー。気を付けてねー。いざとなったらキリユウ君を盾にすると良い

と思うー」

風の便りってこの隔離された状態でどうやって仕入れた情報だろうかとか気にしたら負けだ。タチバナさんだし。

アドバイスはキリユウを盾にしろという事だが……うん、候補として考えておこう。制御が掛かっている私とは違い、彼ならばそんな簡単にくたばらないはずだ。

うんうんと納得していると「ちょっと待ってー」と言い残し、タチバナさんが奥に引っ込んでいった。何だ何だと待っていると幾分もしないうちに彼女は何かを手にして戻ってくる。

「ただいまー。はい」

どうぞーと彼女が手にしていた物を差し出してきたので「ありがとうございます」と条件反射で応えて受け取る。何だ？

そつと手の中の物を見てみると、そこには繊細な模様が施ほどこしてある金の土台に青い石がぼつぼつと散りばめられた少し湾曲した楕円形の物があった。

これは――

「……バレッタ？」

「そそー、暑いでしょー？作ったからヒイラギにプレゼントー」

何と、手作りでしたか。もう一度手の中のバレッタを見る。土台は縁の中にクネクネと蔓と葉を描くように金属を曲げて接着しており、そこへ小さな青い石が絶妙な位置に嵌め込まれ実のように見せているようだった。部屋の光を反射し、キラキラと光つてとても綺麗だ。

最近暑くて髪をどうにかしたいと思っていたので大変有り難い。

……しかし残念ながら私はこれを使うことは出来ない。

「嬉しいっス。でもこれは私……」

「うん、髪に止まりにくいんだよねー。知ってるー」

言い淀む私が何を言いたいのか分かったタチバナさんが代弁した。そう、私の髪はこういったものと相性最悪なのだ。止めた矢先からズルズルと落ちていってしまう。上手く止められたと思ってても10メートルも歩かないうちに落下してしまうという厄介な髪なのだ。だから私は何もせず下ろしたままのこのナチュラルスタイルが基本なのである。もれなくアクセントに寝癖も付いているが。

「ヒイラギの髪質でも外れないようにしてあるからー。大丈夫ー」
「マジっスか」

それは凄い。今までどれを使っても一向に良い結果を出さなかったものだから諦めていたというのに……流石はタチバナさんだ。驚く私ににこりと笑い、更に続ける。

「滑らないようにしたし軽いから頭の負担も軽減ー。そのくせ頑丈ー。象が乗ってもだいじょーぶー」

どこぞの筆箱ですか。

しかしこの人は本当に規格外過ぎる……開拓者タチバナは今日も絶好調のようだ。

「ありがとうございます」

「いえいえー。あ、私明日から三日程家空けるねー」

「了解っス」

今思い出したかのように付け足されるタチバナさんのその言葉に

慣れた感じで返事を返す私。彼女は時々こうして家を空ける事があるので戸惑いといったものはないのだ。いつもながらに連絡が突然だが、これはもう諦めるしかない。

「一応戸締まりはしっかりねー。お留守番よろしくー」

『一応』というのは結界がある前提だからだ。我が第二の家に泥棒は有り得ない。

一応の注意を促す彼女に「うっす」と返事を返しながら家をぐるりと見回す。私は泥棒なんかより心配する重要事項があるのだ。

今までの経験から考えると、三日後には大量のお土産がこの家を占拠する。私はギツシりと物に囲まれたこの部屋を見渡した。……今度は何処に収納しようか。

案の定「お土産何にしようかなー」と不穏な台詞を暢氣のんきに呟く夕チバナさん。

それに反し、私は食後のお茶で喉を潤しながら頭をフル回転させ、スペース確保が可能な場所を探すのであった。

040 開拓者からの贈り物（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

041 蚊帳の外に当事者（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「……凄え」

いつも通りギリギリまで惰眠を貪り、朝食を食べ、身支度を整え終えた私は今、鏡の前で一人感動している。

目の前に映る鏡の中の自分はいつもの寝癖全開ボサボサ頭ではない。自由奔放に跳ねていた髪は後ろに一まとめに留められてスッキリとしている。早速昨日タチバナさんから頂いたバレッタを使ってみたのだ。

市販品のものでは直ぐにズルズルと落ちてしまうそれは、跳んでも跳ねても一向にずれる気配を見せない。しかもタチバナさんが言っていた様に、かなり軽いので頭皮が引っ張られて痛むという事態にも陥らない……素晴らしい代物である。

最近本当に暑くて髪をどうにかしなければと考えていた所なので物凄く助かった。後ろ髪を上げるだけだが、下ろしている時と比べるとかなり涼しい。

……っと、いかんいかん。いつまでもやっていると遅刻してしまう。

「行つて来ます！」

「はい、行つてらっしゃーい」

元気にタチバナさんと挨拶を交わし、家を後にする。

一步、二歩、三歩、四歩。どんどん進んでいくが……ズレない。足をいくら運んでもズレない。スキップなんてものもしてみるのが……やはりズレない。

「ふへへっ」

私は嬉しさのあまり、奇妙な声を発しながら足取り軽く学校へ向かった。

「ヒイラギ、どうしたのそれ？」

「ふへへ、タチバナさんに貰った」

「良かったじゃない！へえ、綺麗なバレッタね」

「ふへへ」

いつまでも「ふへへ」と奇妙な笑い方をする私に「嬉しいのは分かるけど、その笑い方、気味が悪いわよ」と続けるサカキ。細かい事は気にするな。良いじゃないか、嬉しいのだから。放って置いておくれ。

現在、私たちはクリスタルゲートの前にいる。昨日に引き続き、今日も実習なのだ。多分またレベルEの狩魂なので今回はどんなもふもふなのだろうかという楽しみも相乗し、私は今とても気分が良い。例え周りに暑苦しい黒色ブレザー着用集団が犇^{ひし}めいていて視覚的に体感温度が上昇しようが、むせ返るフェロモンのせいで頭にいつもお馴染みの手が置かれていようが、それに伴って陰口をバシバシ叩かれようが軽く見逃せるくらいには気分が良い。私の今の心の広さは太平洋並だ。是非とも菩薩^{ぼんざつ}と呼んでくれ。

——しかしそんな私でも一つだけ気になる視線があった。

「……」

「……」

「……あー……キリユウ？」

「……」

何なんだ。

プスプスと視線が突き刺さり、気になって後ろを振り向く。すると何処か不機嫌そうなキリユウと目が合った。え、何故に不機嫌。話し掛けた私に反応を返すことなく今度は私の前髪を頭に置いていた手で拾ってサラリと梳き、そして若干目を細めて不機嫌の意を表す彼。……いや、だから何故。

意味が分からないと首を傾げる私を幾分か見た彼は徐に私の後頭部おもむきに手を伸ばし――バレッタを外した。

「？」

カチリとバレッタが外れる音と共にまとめられていた髪がサラリと零れる。自分では確認することは叶わないが寝癖だらけの髪の毛はあちこち跳ねてさぞ個性的なヘアスタイルになっているだろう。

キリユウが起こしたその突然の行動にポカーンと間抜け面を晒す私。そんな様子の私を気にすることもなく彼は大惨事の私の髪を手で梳いていく……いや、手で梳いたくらいじゃ直りませんよ、それ。直らなくてイライラするのではないかと思っただが、幾分か彼の眉間の皺が減った気がする……と思えばまた刻まれた。意味が分からない。

よく彼を観察するとバレッタをジッと見つめているようだった。

暑いし早く返してくれないかなと思っただけなら、何故か彼は小さく舌打ちをして私の髪を手早くまとめ上げ、パチリと元の位置に留めた。……どうでもいいが器用だな。あちこち跳ねる自己主張の激しい髪に私は結構手間取ったというのに……何とも言い知れぬ敗北感を味わってしまった。もう何なのこの子は。一体全体何がしたいんだ。

彼は無言のままぼふつと再度私の頭に手を置くが、不機嫌な様子

は変わっていない。そして視線はまだバレッタに釘付けになって……
釘付け………はっ。まさか。

「……欲しいならタチバナさんに頼んであげ
「いらん」

言い終わる前にスパツと告げられた。何だよ、遠慮すんなよ。パ
ートナーな仲じゃないか。まあキリュウがバレッタを付けてもアレ
だけどさ。

私は口を尖らせ不満一杯な様子のまま、そっぴやサカキはどうし
たと彼女に向き直る。私と目が合った彼女は頬を染めて一度視線を
外し、次いでこちらをチラリチラリと伺うように見るといふ謎の行
動を取ってきた。……おい、お前もどうしたよ。

サッパリ訳が分からず顔を顰^{しか}める私に彼女は怖ず怖ずと口を開い
た。

「……あつ、えーと……あのっ、わっ、私、お邪魔よね？」

何が？

そう問う前に彼女は「ご、ごめんねっ！」と勝手に一人盛り上が
った様子で何処かへ駆けていった。いや、え？何？え？

不本意だが、今まで私の中で空気君と化していた鼻血垂れを説明
求めて見てみるが、同じく少し頬を染めてサカキの後を追って行っ
た。お前が頬を染めても全く以って可愛くない………じゃなくて、
ちゃんと説明してから消えろよ。

「………？」

今気が付いたが周りも不自然な感じにザワザワとしている気がする

る。不審に思い、ぐるりと周りを見渡せば、黒学の生徒からレーザービームが繰り出されそうなくらい剣呑な目が一斉に私へと向けられていた。

——だから、何なんだ。

041 蚊帳の外に当事者（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(・ ・ ・)

042 愚鈍な選択（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「おはようございます。皆さん昨日はお疲れ様でした。連日になり、大変かと思いますが今日から」

「……はあ」

教師の言葉をさらりと聞き流しながら私は溜め息をついていた。結局、皆の態度の訳が分からないまま、もやもやの状態を強いられているのである。

何処かへ行ってしまったサカキを探して問い詰めたところだが、今移動するわけにはいかない。よりによって今壇上で喋っているのはイズミ先生だからだ。彼女は現在、凜とした声で淡々と言葉を紡いでいる。美人でクールな彼女は生徒達の人気者だが、怒ると怖い。前にも言ったがとっても怖い。実習でキリユウを巻き込みながら最下位を維持している私に目を光らせている彼女。少しでも問題を起せば直ぐさま呼び出しを喰らってしまうかも知れない。そしてお決まりの言葉を掛けられるのだ。「何故狩らないの？」と。そしてそれに対して私もお決まりの言葉を彼女に返すのだ。「私にEランクは無理です」と。……勿論ここで言うEランクとはもふもふの事を指すのだが、彼女は実力的なものと取っているかもしれない。

しかし私は敢えてその誤解を解こうとはしない。解いた所で説教を免れられるとは思えないからだ。寧ろ説教時間が長くなる気がしてならない。そんなものは御免被る。

ならば、と私は隣を見上げて口を開いた。

「……さっきの周りの妙な反応は何？」

私が小声でそう尋ねたのはもう一人の当事者であろうキリュウだ。彼は未だバレッタに釘付けのようで、相変わらず眉間に皺を刻んだままいる。他人と比べると、その表情の変化はよく観察しないと分からない程僅かなものだが、普段表情変化が乏しい彼の表情筋は本日から酷使されていると思う。眉間に皺を寄せっぱなしとか地味にキツイ。筋肉痛にならないだろうか。表情筋の筋肉痛とか中々ないというか聞いたこともないけれども。……レアな体験おめでとう、キリュウ。

そんな明日には筋肉痛が心配されるキリュウはチラリと私に視線を遣った後、僅かに考える素振りを見せ、一言言った。

「……知らん」

いやいやいやいや、知ってるだろ。

思わずジト目になるのも仕方がない事だ。

私がそんな視線を遣っているというのに彼はそれ以上答えまいと前を向いた。

粘り強さは私のほうが上だと思っていたのだが、どうやら勘違いだったらしい……それからイズミ先生の話が終わるまでずっと見続けていたのに彼は口を開くことはなかった。何故にそこまで頑かたくなんだ。意味が分からない。

身長差で見上げる形になる私はだんだん首が疲れてきた。それにこれ以上見えていても意味がない。そう判断するやいなや私は颯さっそうに諦めた。時間が経てば周りの反応なんてものはどうでも良くなったし。

それより今から会えるもふもふに思いを馳せ、ウキウキしようじゃないか。

私の切り替えは早く、そして潔こけい。そう思った一分後には私の脳内をもふもふが占拠した。

「では、ゲートの方に進んで下さい」

今日はどんなもふもふに会えるのかなと内心わくわく、しかし外見は締まりのないただのアホ面になりながら考えていた所に掛かるイズミ先生の声。ようやく実習開始のようだ。

ぞろぞろと生徒達がクリスタルゲートへと進んでいく。私も例の邪魔にしなければならない鎌をよっこいせと担いでキリユウと共に生徒達の流れに紛れようと足を動かした。

「キリユウ」

突然背後から声が掛かり、立ち止まるキリユウ。つられて私も足を止めた。……隣を見ると眉間に本日一番の深い皺を寄せている。

……あ、今この子舌打ちしちゃったよ。

何だ何だと振り返ると黒学の男性教師が3メートル程後ろに立っていた。彼を見て私は少し驚く——肌の色が白い。キリユウ以外で肌が白い悪魔は初めて見た……といっても色白という程まででもないのだが。キリユウと比べると若干白さに劣るのだ。

そんな彼はセミロングの髪を後ろで一つ括りにし、少し気崩したスーツを身に纏まとっている……暑苦しい事に彼も長袖だ。今の季節が暑いと感じる私には気が知れない。

そして悪魔である彼ももれなく美形である。しかも外見年齢的に大人の色気がオブションで付いている。……サカキが騒さわぎそうだ。恐らく彼がキリユウを呼んだのだろうが………ん？この人どこで見たような……。

誰だっけ？と遠慮もなしに観察していたら彼とバッチリ目が合ってしまった。その瞬間妙な色気を振りまきながらニッコリと笑う彼……今これ絶対フェロモン垂れ流しだよ。頭に置かれた魔法の手

がなかったら尋常でない吐き気が私を襲っていただろう。グッジョブ、キリユウ。私はもうあなたが手放せない……訂正、あなたの手が手放せない。

セーフセーフと背中に妙な汗を垂らしながら笑顔を返そうと試みるが、多分失敗して大惨事になっている。そんな私の様子に若干目を細める彼。失礼な私の態度に怒ったのかもしれない。すみません、でもコレが頑張った結果なのですよ。

彼は暫し私を見詰めた後、今度はキリユウに視線を合わせた。……視線を外す直前、一瞬だけ睨まれたのは気のせいじゃないな。うん。

「ちょっと話がある。来い」

「……」

キリユウはその言葉に答えずに私を見下ろした。何だろう、聞かれたくないのだろうか。

私は周りを見渡し、残りの生徒が少ない事を確認した。ゲートまでも近い。これなら走っていけばフェロモンの餌食にはならないだろう。

「私、先行ってるよ」

「……………ああ」

かなり間を空けて返事が返って来た。相当迷ったようである。しかし、キリユウがこういうのならやはり聞かれたくない話のようだ。私も聞かれたくない話を聞きたいわけでないし、ここはさっさと離れよう。

「んじゃ後で」

「ああ……直ぐ行く」

最後に頭を一撫でされ、キリュウの手がスルリと離れた。

それと同時に私はキリュウにひらひらと軽く手を振り、重い鎌を担ぎながら一人走ってクリスタルゲートへ飛び込んだ。

頑張って走った成果がフェロモンの餌食にはならなかった。一向に吐き気は襲ってこない。

その事にホッとする……そう、私は暢気にそんな些細な事で安心していたのだ。

走り去る私を後ろから心配そうな目でキリュウが見ていたことも知らずに。

そしてこの数分後、キリュウの危惧していた事が起こってしまう事も知らずに。

——私はこの時、重大な事を忘れていたのだ。

042 愚鈍な選択（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

043 最も不適切な対応（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

043 最も不適切な対応

「ひいちゃん」

「……」

「キリユウいないみたいだけど一人？」

「……」

「ひいちゃん？」

「……」

「寝てるとちゅーしちゃうよ？」

「バッチリ起きてます」

何だ何だ何だ何だ……… 一体この状況は何だ。

私は今、大混乱中だ。原因はこの目の前の男…… というよりこの体制。

現在の体制を説明すると寝転がった私の上に外見だけは王子風、でも中身は真つ黒な天使モドキが覆い被さっている。そして近づいてきたその顔を私は両手でガツシリ掴んでぐいぐいと押し返している所だ。

…… 何コレ意味わかんない。こいつが何を考えているのか私にはサッパリ分からん——ッ！！

私は確かゲートを潜った後、周りを見渡して何処に飛ばされたのか確認をした。今回は街近くの森。私は少し先に街が見える森の入り口に飛ばされたのだ。

今回のターゲットは……実は私は分からない。告げられる課題の内容は、『何時何分に何処何処の場所へ現れる』というものだけ。対象の特徴やらは一切知らされないのだ。私達はそれを探し出し、そして狩魂をする事が課題である。

課題内容を何故私が知らないのか。その答えは至極簡単、全く聞いていなかったからだ。だが何も問題はない。キリユウが知っているはずなのだから。私はいつもこういった事は彼任せなのである。いやあ、優秀なパートナーだと楽出来て良いね。

しかしこのままでは何もする事がない。私はキリユウを待つ為、近場の木陰にゴロンと寝転がり、少し寝ようと目を閉じた。

気温は高いといっても日陰で少しは涼しいし、サラリと流れる風も気持ちがいい。私は眠る体制になってから幾許も経たずにうとうとしていた。それと比例して警戒も薄まる。

——それがいけなかった。

瞳を閉じて五分くらい経った頃だろうか。

両の耳元でかざりと草が揺れる音がしたのだ。何かが置かれたようなその音に夢の中へ片足を突っ込みかけていた私の意識は浮上した。そして何故か背筋を駆け抜ける物凄い悪寒。

こんな所で寝たから風邪でもひいたのかな、と暢気な事を考えながら私は徐に瞼を上げた。

そして目の前の光景に絶句し、目を見開く。

目の前に広がるのはウェーブのかかった金髪と青空の色を宿した瞳。わあ、天使だ、天子様だあ……なんて言ってられない。

私はコイツを知っている……それはそうだ、昨日会ったばかりなのだから。

そこには何故かドス黒がいたのだ。

これは悪夢に違いないと、放心状態になっているところで冒頭のしたくもない遣り取りになったのだった。

「……………ッ、ちょ、つと、退い、て、くれ、ません、か、ねっ！？」

ふぬぬ、と踏ん張って顔を押し退けようとする私だが一向に退く気配はない。見た目細いように見えるが、一応相手は曲りなりにも男だし力はあるのだろう。それなりに力がある私でも全く敵わないのだから。もしかしたらキリユウと同じく着痩せするタイプで服の下には立派な筋肉が付いているのかも知れない。それにこの体制では力が出し切れなくて圧倒的に不利だ。……………ああ畜生、出来るものなら五分前の自分を寝るな、死ぬぞ、と思い切り蹴り飛ばしてやりたい。

「嫌だつて言ったら？」

後悔の念に駆られている私へ、爽やかなようでやはりドス黒い微笑を浮かべながらそう言う目の前の男。

嫌だじゃねえよ、さっさと退け！……………って蹴り上げられたら良いのに。

私はそれを実行出来ずにいた。何故なら以前、依都に言われたのだ。「湖都ちゃんはそのうやって律儀に反応を返すからああいう輩に絡まれるんだよ」と。その後「私に任せて。追っ払ってあげる」と柔らかく微笑んでいた彼女が懐かしい。毎回どうやっているのかは謎だが、言葉通りに追っ払ってくれるそんな姉は実に頼もしい存在

だ。

しかし残念ながら今、彼女は此処にいない。自力で何とかしなければいけないのだ。

と言つても考えれば考えるほど混乱する。やはりどう対処すれば良いのか分からない。

冷や汗を流しながらうーうー、と考えている間にも少しずつ近づくっていく顔……　　って、近い近いッ！！キリユウー！！キリユウーッ！！！！お前番犬のくせにまだ来ないのかー！！ご主人様が大変な目に遭つてゐるぞーッ！！

「だんまりだとこのまましちゃうよ？」

キリユウにヘルプの念を送っているうちに、ドス黒はそう言うなり一層顔を近づけてきた。

ますますアップになるその顔。

やばい。このままでは本気でやばい。

でもいつもの態度で返すと依都のお告げ通りに……いやいや、しかしこのままではこの変態と口をくっ付ける羽目に……ッ！！

もう少しで唇が重なるという時、私の中の何かが――キレた。

「　　テメエいい加減にしろ！！！！」

言つと同時に渾身の力で右足を蹴り上げる。

脇腹を狙ったのだが、ドス黒はヒョイツと身体を起こして難なくそれを避けた。予想はしていたのでそれほど驚くことはない。この男が現在の私よりも強い事は分かっていた……でなければとつくに実力行使で排除している。

ドス黒が退いたので自由になる私の身体。素早く身を起こして無

造作に放り出していた鎌を拾い上げる。毎回お荷物だと思っていたものだが、今回はそれなりに役に立ちそうだ。キリユウが来るまでの間だけでも持ちこたえて欲しい。もう本当、切実に。

鎌を構え、私はギロリと相手を睨みつけた。それを受けたドス黒は相変わらずにつこりと薄ら寒い笑顔を浮かべ、口を開いた。

「へえ、それが鎌？ひいちゃんは変わってるね」

「お前にだけは言われたくない」

私の言葉を聞くなりきよんとするドス黒。奴は瞬きを数回繰り返した後、小首を傾げて心底不思議そうに聞いてきた。……小首とかが傾げるな。見てるこちらはイラッとするだけだ。

「ふーん……俺の何処が変わってる？」

「全部。お前変態だろ」

それも超の付く変態だ。間違いない。

ふんつ、と即キツパリ言い放つ私を奴はマジマジと見た後、何を思ったのか――噴出した。

「ぶつ

あははははははッ！」

腹を抱えてひいひい笑う目の前の変態。

……わあ、何だか凄くいやな予感がする。

「あはははは！ーひ、ひいちゃ、ははっ、面白……っ！」

「……………」

――やってしまった……あれだけ言われ続けていた事なのに

……………。

私はこの瞬間、この男のお気に入りに私が追加されてしまった事を悟った……勘弁して下さい。

043 最も不適切な対応（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

044 黒い微笑みと不測の事態（前書き）

本日もうとうぞ宜しくお願い致します。

「ははっ……あー、笑った笑ったー」

一頻り笑ったドス黒は酸欠なのか肩で大きく息をしている。そのまま笑い過ぎて逝ってしまえば良いのにとついつい願ってしまったのは仕方がない事だろう。誰もが許してくれると思う。

「もう、ひいちゃん最高」と言いながら目尻に溜まった涙を拭うドス黒……まだ若干肩が揺れている。こいつは笑い上戸なのだろうか。今なら箸を転がせば笑い出すのだろうか。転がし続ければ天に召されてくれるだろうか。ならば私はいくらでも転がしてみせる。魂を半分飛ばしつつ、私はどうすればコイツの興味対象から外れる事が出来るのかを考えた。……しかし一向に良い案が思い浮かばない。あ、どうか手遅れなんて言葉は出さないで。泣きたくなる。

「俺、変態なんて初めて言われたよ……ふふっ」

そう言って嬉しそうに笑うドスぐ……え、嬉し、そう……？何故に変態と罵られて喜ぶんだ。……ああ、そうか、コイツは真正の変態だったのか。常人にはこのドの付く変態の思考回路など読めるはずもない。これからは敬意を込めてド変態と呼ぼうじゃないか。ドス黒からド変態ヘクラスチェンジだな、おめでとう。是非ともその変態部分は自分の中に押し留めておいてくれ。でないと公害になる。これからは主に私へ迷惑が降り懸かる気がする。

しかし、初めて言われただと……？コイツはどう見ても変態だろう。あまりにも変態すぎて皆言えなかったのか？うん、なら納得だ。皆ドン引きして関わらないようにしていたのだろう。

「あー、違うからね？ひいちゃん以外は皆俺に好意持ってくれるから」

——雷を直に喰らった様な凄い衝撃を受けた。

コイツも読心術スキルの習得者かとか、もうどうでも良くなるくらい強い衝撃だった。

信じられないと目を限界まで見開いて目の前のド変態を凝視する。
「あ、そっぴりやキリユウも例外か」と付け足すかのようにぼやいているがそれもどうでも良い。というよりそれは正しい反応だ。キリユウは常人だから——じゃなくて。

コイツに好意？そんな天変地異が起きてたまるか。………あ、そうか、勘違いか。コイツの思い込みか。そっぴりやコイツのお頭は^{つむ}大混線しているのだった。その上『変態』と相手は言っているのに『紳士』やらそっぴりといった言葉に誤変換される余計な機能までもが搭載されているようだ。ある意味中身の詰まった脳みそをお持ちで。聞こえは良いが全く羨ましくない。詰まっている内容に問題があり過ぎる。つまり、一言で言つとこのド変態は残念な……いや、残念過ぎるイケメンなのだ。

「いや、だから違うって」

思考を読んだらしいド変態が苦笑混じりでそう答える。何が違うものか。

奴を疑いの色しか宿していない目で見てみると、奴は自分が何を言っても無駄だと思つたのか「まあいいか」と肩をすくめた。いや、そんなもん信じる訳がないだろう。ドの付く変態だという事実は曲げようがない。

「あ、さっきも聞いたけどキリユウはいないの？」

話は終わったとばかりに質問を持ちかけるド変態。

ド変態は兎も角、そついやそつだなとポケットの中の時計を確認する。こちらに来てから15分程時間が経っていた。……遅い。パートナーがこんなド変態野郎に絡まれているというのに彼は何をしているのだろうか。……あの黒学の教師の話が長いのか。早くキリユウを開放してこちらに送り届けてくれ。こちらら緊急事態なんだよ。

「ふーん……まだ来ないみたいだね？」

私が渋い顔をしているとド変態が笑みを深めてそう言った。それを見た私は全身に鳥肌が立つのを感じた。

変態が笑った……物凄く嫌な予感がする。

「ねえ、ひいちゃん、俺と遊ぼうよ」

「こつち来んなド変態」

ゆっくり近付いて来るド変態に向かって私は容赦なく鎌を振り下ろした。威嚇である。と言っても90%くらいは本気で切り掛かったがそう易々と当るとは思えなかった。……万が一当ればラッキーだ。寧ろ当れ。

しかし、そんな幸運が訪れる事もなく、予想通りそれを奴は軽々と避ける。「暴力反対ー」とふざけて両手を挙げているが、お前は先程私に何をした。こちらから言わせて貰えば『セクハラ変態野郎断固お断り』だ。お引取り願う。ついでに天国でも地獄でも土にでも帰って欲しい。迅速に宜しく頼む。

「ふふっ」

「……………」

……………何故に蕩けそうな笑顔。

攻撃されて物凄く嬉しそうにするとはどういう事だ。やはりド変態はあくまでド変態か……先程からチキン肌が治まらない。勿論気味が悪くてのそれだ。

私が心の底からドン引きしていても気にする素振りも見せずニコニコと笑うド変態……本気で関わり合いたくないのだが。

「あのキリユウが気に入るのも分かるなあ。ひいちゃん面白いっていうより不思議生命体だし？」

——不思議生命体はお前だ！！

顔を引き攣らせて心の中で思い切り叫んだ。

私が反応を返す度にコイツを喜ばせているのは何となく分かるが今更だ。どうしようもないというか、もう良い、どうでも良い。付き纏うならその度に返り討ちにしてやる。

そう意気込んでもう一度攻撃を仕掛けようとしたのだが、奴の次の言葉にそれは叶わなかった。

「ねえ　　- 蒼黒の死神さん？」

「ッー!!」

蒼黒……それは私の本来の髪と瞳の色だ。……それを何故こいつが知っている？

一瞬固まってしまった私。

その隙を相手が見逃すハズもなく、我に返ったときには背後を取られていた。

「これは預かっておくね？」

ド変態は私が振り返る前に手をチョーカーへと伸ばした。そして流れるような動作で素早く解かれる。

止める間もなかった。

「ちょ　　ッ！！」

辺りが光に包まれた。

視界に映る髪はいつもの明るい茶色でなく漆黒、今自分で確認はできないが瞳は蒼色だろう。私は元の配色へと戻ってしまった。

咄嗟に取り返そうと手を伸ばすがド変態は白い翼を広げ、空へと羽ばたいたので届かない。

奴は空の上から風に靡いている私の髪と驚きに見開かれた瞳を見遣り、黒く微笑んだ。

「じゃあ、またね」

ヒラヒラと手を振り、いつかのように出現させた光の中へ消えるド変態。呆気にとられ、私はその様子を固まったまま見送る事しか出来なかった。

先程まで晴れていた空はいつの間にか暗雲が立ち込めている。そして空からポツリポツリと雨が降り出し、点々と服や髪を塗らしていくが、そんな事気にしていられなかった。私はド変態が消えた空間を見上げながらそのまま立ち尽くす。

次第に雨脚が強くなり、雫が頬から首筋へと伝った。
首に馴染んだ感触が今はない。

濡れる私の髪とぼんやりした瞳は自前の色のまま。

.....
ヤバイ？

044 黒い微笑みと不測の事態（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

045 焦燥と力技（前書き）

すみません、物凄く遅れました；；

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

一人ぽつんと残された森の入り口。
見上げる空は相変わらず雨が降り注ぎ、止む気配を見せない。

「！」

ぽーっと間抜けに見上げていたせいで雨が目に入り、慌てて下を向く。ゴミは入らなかった様だが少し違和感がした。瞬きを何回かして慣らしていると、ハラリとしっとり濡れた黒髪がずれ落ち、視界へと入ってくる。

……黒……………そうだ、今は黒髪だった。

「……………」

タラリ、と背中に冷たい汗が流れた。

——ヤバイ。タチバナさんの約束を破ってしまった…………どうしよう。キリユウのときは意外にアツサリだったが、今度もそうとは限らない…………否、絶対前回のようにはいかないという自信がある。バレた相手が大问题だ。キリユウとド変態では比べるまでもないだろう。

しかし終わった事はどうにもならない。…………この際隅にでも置いておこう。考えても仕方ないのだ。

せめてチョーカーを取り返したいが、現在奴が何処にいるのかサッパリ分らない。いや、分かった所でこの姿ではホイホイと容易に動き回る事は出来ないだろう。完全に手詰まり…………いやいやいやい

や、何とかしないと。

「うーん」と唸りながら解決策を考えていたその時——じゃりっ、と土を踏む音が聞こえた。背後に誰かがいる。

「ッ——！」

ド変態の件で十分面倒臭いのこれ以上面倒臭い事が増えるのは勘弁である。もしも目撃が増えてしまったら……——タチバナさんの黒い笑みが脳裏に浮かんだ。

その恐ろしい光景に一瞬ピシリと身体が固まってしまったが気力で何とか我に帰り、私は森の中へと駆け出す。…………が、森へ入るその直前でガツシりと腕を掴まれてしまった。おい、何故掴む。少し戸惑っていると私はそのまま腕を引かれて引き寄せられてしまった。

——ヤバイ、見られる。

そう思うと同時に私は掴まれていない方の拳を繰り出した。まだ瞳の色までは見られてはいない。見られる前に逃げるのだ。最悪、キツイ一発を入れて記憶を失くしてしまえば良い。相手にとつたらとんだ災難かもしれないが、私は知りもしないあなたより我が身の方が断然可愛い。諦めてくれ。

狙うは相手の顎。当れば脳震盪を起こして立ってはいられなくなるように出来る限り体重を乗せ、下を向いたまま思い切り振り上げた。

「ッ——！」

パシッと乾いた音が響く。私の拳は掌で止められてしまったよう

だ。

正直これで決まると思っていた私は少し驚いた。相手は思ったより体術が使えるらしい。

ならば、とまだ残っている足を繰り出す。拘束したままでこれは避けられまい。

身体を捻り、シュツと空気を切る音と共に回し蹴りをお見舞い——するギリギリで止めた。

私は目をパチパチと瞬かせる。

……………何やらこの黒服には見覚えがあるぞ。

「……………」

どちらも動くことなく、そのまま暫しの沈黙が流れた。

このままでは埒が明かない……………私は意を決して、恐る恐る顔を上げ、確認をする。

——見上げた先にはやはり見慣れた顔があった。

今は雨でしつとりと濡れているサラサラの黒髪に赤い目を携えた超絶美形悪魔——私のパートナーがいた。いつの間に。

取り合えず上げたままの足をゆっくりと下ろす……………うん、物凄く居た堪れないな。

私が自分に気づいた事を認めると彼は溜め息を零して口を開いた。

「……………お前は相変わらず手が早いな」

「……………申し訳ない」

……………返す言葉もなかった。

取り敢えず私の配色がよろしくないので人目の付かない場所へ移る事にした。

ベシヤベシヤとぬかるんだ森の中へ進んで行く私とキリュウ。雨は相変わらず容赦なく降り注いでいたが二人とも既にずぶ濡れになっていたので気にしても今更だ。急ぐ事もなく歩いて進んで行く。

「わっ」

驚いて思わず足を止める私。

突然私の頭の上に何かが被さり、視界が一気に暗くなったのだ。

何だ何だと手に取ってみるとそこには黒学指定のブレザーさんがあつた。見た瞬間私の眉間に皺が寄る。……見たくもないものが突然降ってきたのだから当然だ。

取り合えずコレ、切り刻んじやって良いだろうか。結構なストレス発散になると思う。

「……被っておけ」

不穏な気配を感じたのか、立ち止まったまま親の仇のようにそれを睨みつける私へキリュウがそう言いながらまた憎きブレザーを被せてきた。切り刻むのはどうやら駄目らしい……まあこれキリュウのつばいしね。切り刻むなら他の奴らのものにしよう。我慢だ。

しかしこの暑いのにこんな物を被れとは拷問だろうか……それにもう何処もかしこも雨に濡れてしまっている今、雨を凌しのいで意味がないと思う。

不満たらたらしい様子でブレザーの下からキリュウを見上げると、淡々とした答えが返ってきた。

「……何処で見られているのか分からん」
「……」

被せたのは雨を凌ぐのではなく色を隠す為だったらしい。

まあ、確かにそれは必要かもしれない。

漆黒の森では誰も居ないと思っていたのにド変態に覗き見されていたのだ。用心に越した事はない。

……しかしだな。

私はもう一度キリュウを見上げる。ほんとコレ、暑いんだよ。出来るなら被りたくない。せめて違う布が欲しい。この生地は分厚すぎるのだ。

そうやって目で訴える私の思考を読み取ったらしいキリュウはまた一つ溜め息を零した。

「……あとはこれ位しかないが？」

そう言っただけで見たのはキリュウが今着ている黒シャツ。裾をまくって見せているので臍がチラリズムだ。見える腹には無駄な脂肪がなく、程よく筋肉が付いている……畜生、羨ましい。

思わず黒シャツではなく腹をジーツと見ている私にキリュウが怪訝な視線を遣つてき……はっ、いかん。これではまた痴女疑惑が……ッ。

私は急いで首をぶんぶん横に振り、いらないと意思表示をする。いくら暑いからといっても、流石に彼が今着ているものをぶん取ろうとまでは思わない。

「じゃあそれを被っている」

「……へい」

私は渋々とそ暑いブレザーを被り、ぬかるんだ道なき道を再び歩き始めるのであった。

045 焦燥と力技（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

046 自ら起こす二次災害（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

ぬかるんだ地面に足を取られつつ、森の奥へ進む事約20分。

私達は崖にポツカリと出来ている窪みを発見した。少し余裕を持つて2人入れるくらいのその窪みは、広くはないが周りから見付かりにくい上、雨宿りくらいは充分に出来そうだ。

私とキリュウは どちらからともなく目配せをし、軽く頷き合う。ここで少し休む事にした。

二人そこへ腰を下ろし、雨に濡れた服を絞しぼつていく。私がチビチビと着たまま裾だけ絞しぼっている、隣ではキリュウが黒シャツを脱いで豪快に絞しぼっていた。私もそれに見習いたいが、やれば痴女認定を受けそうな上、腹のお肉様を披露する羽目になってしまう。それは断じて頂けない。

チラリと隣に視線を遣ると、そんな腹肉に悩まされている私と違い、脂肪とは無縁の彼の身体が窺うかがえた。男と比べても仕方ないとは思うが、本当に彼は良い身体をしている。羨ましい限りだ。その筋肉を分けてはくれないだろうか。

またもや、つい彼の身体をガン見してしまう。視線を感じてふと視線を上げるとキリュウがこちらをじっと見ている事に気が付い…はっ。いかんいかん。

へらりと笑って誤魔化しを試みるが胡散臭さげに目を細める彼………これは遂に認定されてしまったのだろうか。誤解だ。私は断じて痴女ではない。このぷよぷよの腹肉の代わりに逞たくましい筋肉が欲しいという純粋な心を持っているだけなのだ。

「……被っておけ」

彼はそう言つて私が先程絞つてそのままさり気なく後ろへ置いていたブレザーをバサリと被せた。どうやら痴女認定ではなく、ブレザーを被っていない事に対して非難の視線をくれていたようだが……。

「……………暑い」

「……………我慢しろ」

再び戻つてきた要らぬ温もりに眉根を寄せ、溜め息を吐いた。そんな私を労るようにブレザーの上からポンポンと頭を撫でられる。私はわんこか。

すぐ離れるかと思われたその手は、尚も私の頭をブレザー越しに撫で続ける。

「……………」

……………定期的に訪れるその心地好い重みに、何だか瞼が重くなってきた。この魔法の手は相変わらず私に安心感を与えてくれる。

このまま眠れば至福の時を味わえるだろう——だがそれは駄目だ。こんな場所に長居するわけにはいかないし、気温が高いとはいえず濡れ状態では風邪をひくかもしれない。それに今後の対策を練らねばならない。

……………いやしかし、至福の時は魅力的——

「……………で、何があつた？」

大人しく撫でられながら心の中で格闘していると、頭上から声が

降ってきた。睡眠欲に負けそうになっていた私の意識がフワリと浮上する。……ああ、あのまま眠りの世界へ旅立ちたかった。

「……寝るな。風邪をひく」

「……」

全てお見通しなキリユウから注意が飛んでくる。

私はうたた寝を渋々断念することにした。

しかし、「何があった」って……色々ありすぎて何から言えば良いのか。言葉に詰まり再び沈黙が流れる。

そもそも彼に一から説明するという時点で私の意欲は急降下していた。物凄く面倒臭い。こんな時こそ彼の読心術を発揮させて欲しいのだが……珍しく不調なのだろうか。

私は深く息を吐きだした後、仕方無しに口を開いた。

……まあ取り敢えずアレだ。

「変態に遭遇した」

「……はしより過ぎだ」

やはりその一言では解らないという事で面倒臭いながらも私はクリスタルゲート前でキリユウと離れた後の一連を話した。

キリユウを待つ間、寝ようと転がっていたらド変態が現れた事、恐らくお気に入り追加されてしまった事、髪と瞳の元の色を知っていた事、チョーカーを盗られてそのまま消えてしまった事等々――あつた事を全てだ。説明しただけで精神をこっそりと削がれてしまった……流石はド変態である。

……それにしても、あのド変態め……全部全部あいつのせいだ。あいつがチョーカーを取っていったからこんな面倒臭い事態に……

次会ったらボロ雑巾並にボロボロにしてくれる。

私は拳を握り締め、怨みを全て元凶であるド変態へと向けた。そして脳内で殴る蹴るを繰り返し、マウントポジションを確保して再び拳をお見舞いしている所でプツッと妄想が途切れる。キリユウがポツリと言葉を零したのだ。

「……あの時か」

顔を向けると眉間に皺を寄せているキリユウが映った。何処か落ち込んで見えるように見える。……もしかして責任でも感じているのだろうか？

確かに不可抗力とはいえ彼の策略に嵌った事によってド変態にもバれてしまった。しかしそれは終わった話で、しかも彼は私を護りたいからという動機で暴いたのだ。彼は何も気負う必要はない。

「悪いのはあのド変態だけだよ。キリユウは悪くない」

私がそう言うのとキリユウは何故か少し目を見開いた。……何に驚いたのだろうか？

相変わらずよく分からないなと首を傾げているといつもの無表情に戻る彼。そしてその後——フツと口元に笑みを浮かべた。それを目の当たりにした私は一瞬固まる。

——私を見るその瞳がひどく優しい。

「……そうか」

「うっう、うん……、」

足に障害のある金髪少女が初めて立った光景を目撃した元気な山好き少女並に衝撃を受け、盛大に吃どもってしまった。

私は思わず彼の顔から視線をずらす。例の如く、直ぐに無表情に

戻った彼だが、何だかとてもいたたまれない。手に変な汗までも掻いてきた。何だ、これは。

彼の笑顔らしきものを見たのはこれで二度目だ。以前見た時は希少なものを見た気分でマジマジと見ていたが、今回は何か違う。何だか見てはいけないものを見てしまったような……何とも言えない感じた。

「……そういえば何故『変態』なんだ？」

私が一人よくわからないものに焦っているとキリユウが問い掛けてきた。私は気を取り直して「ああ、それはね」と前置きして答える。

「被さってきたからだよ」

「……被さる？」

「うん、寝てる時に」

私の言葉に眉間に皺を寄せるキリユウ……ん？言ってなかったっけ？

……ああ、そう言えば説明の時、思い出したくないが故に『寝てたらいきなり現れた』と説明した気がする。言っていなかっただけで、決して嘘ではない。

そろりと彼の顔に視線を戻すと違和感を覚えた。……雰囲気は何やら不穏なものになってきてはいないか？……何故だ。私は何か彼の気に障る事でも言ってしまったのだろうか。

気になりつつも視線で話の先を促すキリユウに負け、続けて話す私。

「……えーと、その、気配に気付いて目を開けたら目の前、に……」

つ、 あ、あとねっ、変態って罵られてアイツ喜ぶんだよ。
本格的な変態なんだよ、怖いよねっ」

「……………言葉の受け取り方はそれぞれだからな……………賛同は出来んが」

説明の途中、不穏な空気が更に濃くなった所で私は話を変えた。
纏う空気は相変わらずだが、これ以上濃くなる事態は阻止出来たようだ。ふう。

キリュウの不機嫌スイッチが何か分からない私は冷や汗タラタラである。よく分からないがタチバナさんとはまた違った意味で彼を怒らせてはいけないと警笛がガンガン鳴っているのだ。ここは慎重に話題を選ばねば……………。

……………あ。

『被さる』で彼に忘れ忘れた事を思い出した。アイツがどれだけ変態なのかを切々と伝える為、私は苦虫を噛み潰したような表情でそれを付け足す。

「あと、アイツにちゅうさ、れ……………」

『ちゅう』の部分で物凄く黒い空気を一瞬で纏わせたキリュウに私の言葉も停止する。

え、ちょ、だから、何故……………――

「……………されてないな……………？」

地の底から響くような声で質問とは言えない質問を繰り返す彼。
答えは『イエス』か『はい』しか受け付けない、みたいな……………。

……………えっと、目の前にいる奴はキリュウだよな？まるで別人……………

何だか不良のようでございますよ。

戸惑いながらも必死に何度もカクカクと首を縦に動かす私。実際阻止したので嘘ではないが、こんな質問の仕方ではもしされていたとしても縦に首を振ってしまいそうだ。

……………何だこの意味不明な二次災害は…………被害者の私が何故こんな目に。

これも全てあのド変態のせいだ。

私はより一層怨みを募^つらせるのであった。

046 自ら起こす二次災害（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

047 決死の時限爆弾処理作業（前書き）

遅れてすみません；；

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

私が壊れたオモチャの如くカクカクと首を縦に振り無罪を表明した後、キリユウは眉間にシワを刻んだまま黙り込んでしまった。何やら考え事をしているようだ。

彼は未だ黒い空気を纏わせてはいるが私から視線が外れたことでいくらか威圧感が薄れた。私はこっそり溜息をつく。……ふう、助かった。

不機嫌スイッチは何なのかやはり分からないままだが今探るのは得策ではない。変に刺激してまたあのプレッシャーを受けるのは嫌だ。原因が分からない事には対処できないだろうがなるべく地雷を踏まないように今後気を付ける事にしよう。

そしてふと思い出すあの瞳……あの時二人の間に流れたいたたまれない空気がもし再び流れる事になったら——私はもう耐えられそうにない。現に思い出すだけで息が詰まり、また手に変な汗を掻いてきてしまった。……駄目だ。思考ストップさせねば。

頭がパンクしそう——

「……これからどうするつもりだ？」

「……………」

風邪をひいても良いからもういつそ寝てしまおうと本気で考え始め、ゆるゆると瞼を閉じていたのだが、キリユウが話しかけてきたので私は閉じかけた瞼をパチリと開いた。

危うく聞き流しそうになった言葉をもう一度自分の中で繰り返し、その意味を理解する。

……これから……。

……そうだった。今寝ている場合ではなかったのだ。

「……うーん、どうしようかな」

この配色ではまず学校に戻る事は出来ない。キリユウとタチバナさん、あとド変態以外に見つかる訳にはいかないのだ。大問題になってしまう。

そうなると私は容易に動く事が出来ない。学校近くにある第二の家にも帰らない方が良さだろう。結界内に入り込めば何て事ないが入る前に見つかる可能性が高すぎる。迷いの森の入口辺りは目の前が死学という事もあって、結構人通りが多いのだ。

「……チョーカーのスペアは？」

「ない」

キリユウの質問に即答で否と答える。

そもそもアレは外さない事が前提の代物だ。スペアなんてあるはずがない。

こうなるとタチバナさんしか対処は出来なくなっている……。

……。

……ヤバイぞ。

「……どうした」

急に無言で固まった私にキリユウが尋ねてくる。私はそれに対して答えられずに冷たい汗をダラダラと掻きながら先程の事を思い出していた。

……確かド変態はこう言っていなかったか。

『じゃあ、またね』

また会うことが前提の口ぶりではあるが……時間と場所は全く分らない。勿論生息地も分らない。

——それはつまり会える事には会えるが、こちらから訪ねるという事ができない……もう少し言うとかチバナさんが帰ってくるまでに間に合うかどうか分からないという事で……。

そしてこの配色のまま下手をすれば何日か過ごさなければならぬという事で……。

その間、やり過ごせるだろうか？ 家には近付けないから野宿になるだろう。それはまあ何とかするとして……学校はどうする——
—？

「……どうした」

キリユウに再度尋ねられる。ハッと顔を上げると、どこか心配そうにこちらを覗き込んでいる赤色の瞳と視線がかち合った。

……そうだ、キリユウに学校への伝言を頼もう。

「キリユウ、私明日からインフルエンザにかかる予定だから伝言宜しく」

「……」

みるみるうちに呆れ顔になるキリユウ……あ、駄目？ やっぱ駄目？ 仕舞いには溜息までつかれてしまい私はアハハと笑うしかない。因みにインフルエンザはこちらにも存在する。一週間ではなく2日程で完治するが。

「……お前、本当に教師の話を全く聞いていないな」

ん？……と言いますと？

キリュウの言葉が指す所が分からず首を傾げる私。
そんな私を見てもう一度溜息を吐き出すキリュウ。溜息は吐けども治せと注意は吐かないので彼はもうとつくに諦めているらしい。
賢明な判断だ。治すつもりがないから注意をしてもきつと一生治らない。

何処か他人事のように考えているとキリュウが徐に口を開いて説明をしてくれた。

「……今回の実習は3日掛かりだ」

「3日？」

「ああ……3日掛けて狩りを行う。ターゲットは『レベルEの魂』という以外、数も種類も指定されていない……つまりEレベルの魂を狩れるだけ狩ってこいという訳だ」

「……んじゃ明後日まで学校に顔出さなくて良いと？」

「ああ」

なんと。そうだったのか。

そういう事なら学校の事は心配いらない。見つからないように気を付ければ良いだけである。

……タイムリミットはタチバナさんが帰ってくる明後日。それまでにド変態を取っ捕まえてチョーカーを取り戻さなければならぬ。
しかしその為には奴の居場所を掴まなければ……。

……。

「……キリュウ、ド変態の生息地分かる？」

居場所が分からない私は意を決してキリュウに尋ねてみた。

……どうも彼はド変態の話の振るとあの黒い空気を醸し出す。今

度は地雷を踏んだだろうか？手に汗を握り恐る恐るキリユウの顔を窺った。何だかドラマなんかでよく出てくる時限爆弾の最後2つのリード線を選択したような気分だ。赤か青か……私の切ったものは起爆の方でない事を願う。

「……聞いてどうする？」

——ひいつ。

眉間に皺が刻まれ、僅かだがまたあの黒いものがキリユウの背後に出現した。

私の選んだリード線は起爆の方だったらしい。

キリユウのそんな様子に冷や汗を流しながら黙っていると余計に皺が深くなっていたので私は慌てて質問に答えた。

「チョーカーを奪還するつ。心配しなくてもこれ以上キリユウに迷惑なんてかけないよ、一人で、……、——じゃなくてキリユウも手伝ってくれると嬉しいな！？」

——何を言っているんだ私は。

『一人で』の部分で空気が更に黒くなったので慌てて訳の分からない事を言ってしまった。迷惑かけます宣言をかましてどうする。決して振動を与えてはならない時限爆弾を思いつき蹴っ飛ばしてしまった。

視線を外し、覚悟を決めて大爆発の瞬間を待ったが……何故か一向にその気配を見せない。

ゆっくり彼に視線を戻すと眉間の皺は健在なものの、あの黒い空気が一掃されていた。何故。

「……わかった」

彼はそれだけ言い、私の頭をまたブレザー越しに撫で始めた。

……よく分からないが奇跡的に起爆は免れたようだ。蹴っ飛ばした先には液体窒素があつた模様……対冷却システムが付いていない爆弾で良かった。

私は気付かれないようにこっそり安堵の溜め息を吐き、もう一度質問をする。

「ありがとう。……で、奴は何処にいるの？」
「知らん」

ちよつと待て。

047 決死の時限爆弾処理作業（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
(. . .)

048 お手軽変装術（前書き）

また遅れてすみません；；

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

先程のさも知っていると云わんばかりの口ぶりは何だったのか……。

思わず絶句している私に構わずキリユウは続けた。

「……協力すると言っただけだ。アイツの居場所なんぞ知るか……それよりこの現状をどうにかしないとマズイ」

……確かにキリユウの言う通りだ。

タチバナさんが帰ってくるまでまだ時間はある。それより現状をどうにかしないとこの森から出られないままだ。

取り敢えず服をどうにかしないといけないだろう。ずぶ濡れな上、雨も降り続き少々身体が冷えてきた。このままだと冗談抜きで風邪をひいてしまう……今ぶっ倒れるのは非常にマズイ。

私は辺りを見回した。焚き火をしたい所だが雨のせいで燃えそうなものは周りにない。落ち葉や枝などは全て湿気っているのだ。

「……魔法は使わないのか」

うーん、と難しい顔をしているとキリユウが話しかけてきた。火を起こさないのかと言いたいのだろう。

確かに今はチャーカーがないのでリミッターが解除された状態だ。現在の私は勿論ただのチャッカマンではない……が。

……。

……。

……うん、説明するより見てもらった方が早い。

そう思つや否や、私は魔力を掌に集中させ、魔法を発動させた。
その瞬間、掌の上に炎が出現する。

「……」

「……」

二人してそれを暫し無言で見詰める。

……この沈黙、とても居た堪れない。別に悪い事なんて一つもしていないのに何だか無性に謝りたくなってくる。ごめんなさい。何か分かんないけどごめんなさい。

「……これで全力か」

何ともいえない沈黙を破ったのはキリユウだった。

それに対し、私は「うん」とだけ答える。正真正銘これで全力なのだ。

二人の視線の先——そこにはチャッカマンの火より一回り大きい程度の炎が揺らめいていた。強い風が吹くと呆気なく消えてしまつたろう。

少しだけ大きくなっているとはいえ、こんなもので暖を取れるはずもなく……。

事情を察したキリユウが溜め息を吐いた。……いや、だって、火の魔法苦手なんだよ。仕方ないじゃないか。

因みに水の魔法は出現させることは出来るが、服に付いた水分を取り除くといったような器用な真似は出来ない。風の魔法も服を着たまま乾かせば余計に身体が冷えてしまうので使えない。

「タチバナさん曰く、コントロールが下手なんだって」

「………そうか」

もう良いだろうと私は魔法を解いた。掌の上に揺らめいていた炎は瞬く間に消える。掌から2センチ程上に出現するこの炎は何故か私自身は熱くはない。摩訶不思議である。熱くないのはまあ良いのだが、これ、使い道あるのだろうか。今までの経験では火種くらいにしかなくていい。……今は火種にもならないのだが。

私は何となく手をにぎにぎをしてからキリュウを見た。あちらも私を見ていたようで目が合う。……わあ、何という呆れ顔。

「……一応聞くが泊まる宛てはあるのか」

「ない」

「……人間の領域の金は」

「ない」

「……まさか野宿するとは言わないだろうな」

「……」

「……却下だ」

まだ何も言っていないのに。

読心術レベルMAXのキリュウには隠し事は出来ないようである。ずるい。

でもまあ確かに焚き火が起こせない状態での野宿は危険だ。夜になると魔物はわらわらと出てくる。奴らは火の傍には動物と同じくあまり近付かない……つまり、焚き火を起こせないとなると、どうぞお好きにして下さいと言っているようなものだ。まず寝る事は叶わないであろう。

視線をそろそろと外すと溜め息が聞こえた。すみません。

このままでは二人仲良く風邪をひいてダウンだ……いや、違うな、私だけだ。キリュウまで私に付き合うことはない。彼は自分の寝床に戻れば良いだけだ。

「……此処で待つてろ」
「へあ？」

思考の渦に飲まれていた所に急に話しかけられ、変な声が出たが、私は気にせずそのまま続ける。

「何処行くの？」

そんな私にキリユウは大して気にした様子も見せず、立ち上がった。つられて私も見上げる形となる。首が痛い。

「……近くにあつた村」

「何しに？」

「……お前の服を調達する」

調た………え、盗む気？

いくら緊急事態とはいえそれはいくらなんでも気が引ける……。

「……金ならある」

まだ何も言っていないのに即効キリユウが眉を顰めながら私の心の声に訂正を入れた。

疑ってすみません……私はそろりと視線を外す。

……まあ取り敢えずお金がある事が分かって一安心だ。使った分は後々返すでしょう。

しかし彼はこの姿で大丈夫なのだろうか。人間から見て悪魔と死神は命を轟とどろかす者として忌み嫌われている。見るからに悪魔の風貌を持ったキリユウが尋ねて問題にならないのだろうか……かといって私が行くわけにもいかないし。

「……問題ない」

悶々と考えていると上から声が降ってきた。
問題ないって……問題だらけではないか。

私は外した視線をもう一度キリユウに合わせ

「……イメチェン？」

間抜けな顔でそう零す。

目が合ったのは予想していた赤い瞳ではなく、茶色い瞳。

「……直ぐ戻る。此処を動くな」

——見上げた先には黒髪から茶髪へ、赤い瞳から茶色い瞳に
染色されたキリユウがいた。

048 お手軽変装術（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

049 注意事項は忘却の彼方（前書き）

毎度遅れてすみません；；

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「此処を動くな」

そういうや否やキリユウは空間魔法を展開し、ポカンと間抜け面を晒している私を置いて姿を消した。

何度注意をするのだろうか。彼は子供に留守を頼んで買い物に行く母親か。となると私は彼の子供か。何気に私の世話を焼くしな。うん、帰ってきたらママと呼んでやろう。

……まあそんなくだらない事を思わず考えてしまうくらいには驚いた。ちよつと目を離れた隙に髪と瞳が違う色に染まっていたのだ。誰でも驚くと思う。

私は先程目に焼きついたキリユウの姿を思い浮かべる。故郷、日本で見慣れていた色に染まった彼はやはり相変わらずの超絶美形であつた。今までは赤い目がファンタジーさを醸し出していたので、何処かモニター越しの感覚だったのかもしれない。しかしこうも馴染み深い色に染まれば一気に身近に感じると共に改めて彼が超絶美形だという事が思い知らされた。

………そういえばサカキがいつだったか言っていた気がする。悪魔と天使は自由に瞳と髪の色を変える事が出来て周りに擬態するとか何とか。……しかしああも見た目が整っているとなると結局人間に擬態はできていないのではなからうか。人間はあれ程までに顔が整ってはいないと誰だかに教えてもらった覚えがある。人間から見れば完璧に整った彫像のようなのだとか……兎に角浮きまくる事間違いはない。

「ふ、……へえつくしーいッ！……あゝ……」

雨に濡れてからどれくらい時間が経っただろうか。

流石に身体が冷えてきたようだ。思いっきりくしゃみが出た。

私は冷たくなった腕を擦って摩擦熱を起こそうと頑張るが、一瞬は温まっても根本的な問題は解決していないのであまり意味はない。キリユウ……いや、ママン、早く帰ってこないだろうか。

早く、早くと念を何度も送る。離れた彼にこの思いは通じるだろうか。

出来る限り熱を逃がさないよう体育座りで丸まって足元に視線を遣っていると、突如目の前に影が出来た。

………ん？影？

「暖めてあげようか？勿論身体で」

「……」

概聴感溢れる声が頭上から降り注いだ。

出来れば聞きたくもないその無駄にエロい声が耳に届き、私はビクリと身体を跳ねさせる。腕には寒さとは違う原因でチキン肌が立った。勿論嫌悪で。

どうしてまたこんな急に現れるかなコイツは。

足元に落としていた視線を嫌々ながらに上げると、そこには予想通りの胡散臭さ満載な黒い笑みがあつた。

「ふふ、それにしてもオッサン級なくしゃみだったね」

そう言つて小首を傾げてこちらを見下ろすド変態。うわ、やめろ。チキン肌が悪化する。

そして放つとけ。私に乙女を求めるな。

ああいうのは思い切りやってこそスッキリするというものだ。ちまちまやっていたらストレスが溜まってしまふ。どことなくしゃみを

かまそうが私の勝手なのである。誰かに、というよりお前みたいなド変態にどうこう言われる筋合いはない。

……等々、色々と言い返したいことはあったはずだった。

しかし、咄嗟に私の口から出たのはただ一言だけ。

「近寄んな変態」

……うん、だって少しずつ近付いてきてる。

今、ド変態は身を屈めて私の顔を覗き込んでいる状態だ。私はすかさず尻をズルズルと引き摺って逃げるには狭い空間の中、横にずれた。こんなド変態の近くにいたくはない。ド変態菌に侵^{おか}されてしまう。

——って、そうじゃなかった。大事なものを取り返さねば。

「そこから動くな」

私は「相変わらずひどいなあ」とか薄気味悪い笑みを浮かべてぼやいているド変態に命令すると魔力を練り上げて腕で空を切り、風魔法を発動させた。そこから鎌鼬が生み出され、ド変態へと向かっていく……が、ギリギリかわされた。

リミッターが解除され、絶好調のそれはド変態の後ろに佇んでいた巨木をスパツと綺麗に切断した。切れ目が徐々にずれ、ゆつくりと木が倒れていく。

ドオン、と地響きを伴いながら倒れる大木をチラリと見遣り、笑みを深くするド変態。……何故そこで笑う。気味が悪い。本当に気味が悪い。奴の思考が全く理解できない。……理解する気もなければしたくもないのだけれども。

このド変態からチョーカーを取り戻さなければならぬとか鬱になりそうだ。しかし、それは残念ながら避けては通れない道……

…私はその気持ちを振り払うように睨みながら言う。

「チョーカー返せ、ド変態野郎」

言うや否や私は先程放ったものと同じ鎌鼬をいくつもとド変態へ向けて飛ばした。空気を切り裂きながら容赦なくド変態へと襲い掛かる。

一方、ド変態は「危ないなあ」と零しながら難なくそれらをひらりとかわしていった。

回避されるのは分かっていたが………何だか無性にムカつくのはこのド変態だからだろうか。

目標的が避けたので流れた鎌鼬が次々に後ろに佇む木々を薙ぎ倒していった。樵きこりの如く森林伐採、温暖化に貢献である。

しかし私は止まらない。

「……………ぶった切る…………ツ」

「ふふ、物騒だねえ」

森の奥へ笑いながら逃げるド変態。私はブレザーが落ちないように片手で押さえ、今度こそ仕留めるとばかりに空いた手で鎌鼬をぶっ放しながらド変態の後を追いかけるのであった。

049 注意事項は忘却の彼方（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

050 最終手段は力押し（前書き）

本日もどうぞ宜しくお願い致します。

「……ハア……ッ、……ハア……ッ」

「ねえ、ひいちゃん。さつきから躊躇いの欠片もなくぶっ放してくれちゃってるけど当たたらいくら俺でも血まみれだからね？」

「ハア……ッ、……何か問題か？」

ないよな。寧ろ何と有意義な事か。何ならその後埋まってくれても構わない。

息切れしながら私はド変態を睨んだ。何だコイツは。息切れどころか息一つ乱していない。変態といえば貧弱なイメージなのだが……最近の変態はこんなにも体力があるものなのだろうか？

「ふふ、酷いなひいちゃんは」

酷いと言いつつも何処か嬉しそうなド変態をドン引きしながら見る……コイツは相変わらず半端ない変態っぷりをしているようだ。

逃げるド変態を攻撃しながら追いかけて、気が付けば現在地の木々が空けたそれなりに広い空間に辿り着いた。雨は依然降り続けているので地面はぬかるみ、走る度に跳ねた泥で制服が酷い事になっている。それは別にそこまで気にしないのだが、同じく走って移動したド変態の白い制服に何故か泥跳ねが一つもない事実が私を妙に苛立たせた。しかも、こっちが必死こいて走っている先で余裕を見せ付けるかのように両手をズボンのポケットに突っ込んだままといいふざけた走り方をしたド変態……特性泥団子を投げ付けてやりたい。

勿論顔面に。

そんな事を考えながら私はふはふと欠乏している酸素を身体に送る。ぬかるんだ足場の悪い道に足をとられる中、攻撃しながら10分程全力疾走してきたのだ。イグランドに来てからタチバナさんに扱じかれて尋常でないくらい体力が上がったとはいえ、これは流石に堪える。

私は粗方必要分の酸素を取り込み終え少し呼吸が落ち着いたところでド変態に向かって手を突き出した。

「チョーカー返せ」

「簡単に返すと思う？」

予想通りの返事に思わず舌打ちをする。

明らかにこの状況を楽しんでいる様子のド変態。経験からするにこの手合いは一旦こうなったらこっちのいう事など一向に聞く耳を持たないのである。

よって、私が今から取れる手段は一つしか残っていない。

「返してもらっ」

そう。力押し、だ。

私は瞬時に出来る限りの魔力を練り上げて腕を勢い良く薙ぎ、特大の鎌鼬を繰り出した。

木々が空けた広いこの空間目いっぱい使った巨大な空気の刃がド変態に向かって飛んでいく。

「何度やっても同じ……っ！」

私は横に払った腕を今度は振り上げた。

白い翼をバサリと広げ、空へ逃げようとしたド変態の動きが止まる。

ド変態の足元に溜まっていた水が瞬時にド変態に絡まり、拘束したのだ。

私が水魔法を使ったのである。

水だからといって侮るなかれ、圧縮させたそれは生身でどうこうできるものではない。

巨大な鎌鼬は大ダメージを喰らいそうなビジュアルだが、加減したので実はそうでもない。走っている時にぶっ放していたものより威力は弱いのだ。まともに喰らっても少しの間動けなくなるくらいなのである。

だから安心して大人しく切り刻まれる。

そしてもう二度と湧いて出てくるな。

そう思った時だった。

「！」

——ド変態の口が弧を描いた。

その瞬間、奴の目の前に護るように光の魔法陣が出現する。到達した鎌鼬はその魔方陣に弾かれ、飛散してしまった。

「うわっ！」

衝突の影響か、眩い光と強風が放たれる。

そのあまりの眩しさに、私は目を瞑って強風に飛ばされないよう足を踏ん張った。

何とかやり過ぎし、閉じていた目を急いで開けて前方を確認する。水に捕らわれていたはずのド変態の姿はそこになかった。

「！！」

背後から気配がし、振り返ろうとしたが、それは叶わなかった。先程の間に背後を取ったド変態に両手首を捕まれて身動きが出来ないのだ。

支えを失ったブレザーがバサリと落ちる。

「ふふ、折角綺麗なんだから隠さないでよ。……それにしても2属性同時に発動できるとはね。びっくりした。凄いね、ひいちゃん」

何故か嬉しそうにそう言うド変態。

確かに魔法は同時に一つの属性しか使えない死神が殆どだ。以前タチバナさんが死神全体で10パーセントくらいだと言っていた。だからあまり使うとも言われたが……これは緊急事態。致し方ないと自分に言い訳をする。

まあ兎に角、確かにそれは貴重らしいのだが、お前が喜ぶ意味が分からない。

掴まれた腕を振り解こうと力を入れるのだがびくともしない。くそつ、この馬鹿力何とかならんのか……っ。

足技を繰り出したい所だが……それは出来ない。身体を支えが一本になり不安定になったその瞬間払われて寝技に持ち込まれそうな気がしてならないのだ。地面は雨が降って泥だらけの状態だが……このド変態ならやりかねん。いや、絶対やる。

寝技に持ち込まれたら今朝の再現になってしまう。あの時は足技で何とかしたが、今回も出来るとは限らない。足を押さえ込まれた

らお仕舞いだ。……考えただけで背筋が凍った。

「……、離せ変態ッ」

「ん？何？」

「ッ」

手も足も出ないので残った口で抗議するが、直ぐ傍で聞こえたエロイ声に思わず押し黙る。

顔を近付けんな。耳元で喋んな。鳥肌がヤバい。寒気がする。

素性を知らない他の女の子に同じ事をすれば多分腰砕けだろう。だが私にされたって気持ちが悪いだけだ。他でやれ。いや、やっぱやるな。迅速に土に埋ま……って、ぎゃあああああッ！！

「、やめっ ツ！！」

首筋に息が掛かった。

——その時、背後に風が通った。

サクッと何かが刺さる音と共に拘束が解かれる。

力をこれでもかを入れて抵抗していたので支えを失い、思いつきり前につんのめったが、たたらを踏んで何とか堪えた。……危ない、泥んこ塗れになる所であつた。

何が起きたんだと視線を走らせると少し離れた場所から私の後ろをニヤニヤと気持ち悪い笑顔で見ているド変態の姿があつた。

そして先程までド変態と私が力比べをしていた場所に視線を遣ると、見覚えのあるダガーが深く突き刺さっている。

——コレはッ！！

私は急いでそれが飛んできた方向に向き直る。同時に、僕らのヒーローが来たとはかりに嬉々としてその救世主の名前を呼んだ。

「キリュ

」

……ウ？

最後まで言えなかったのは彼を纏う禍々しい程の黒いオーラが原因である。

……、……あれ？

……物凄い、怒ってる……？

050 最終手段は力押し（後書き）

誤字・脱字などあれば報告して下さいと有難いです
（ ・ ・ ・ ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2184r/>

死神亜種

2011年10月6日23時29分発行